RI✱WAC
Research Institute for Women and Careers
日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0008
調査タイトル	①大学生活に関する調査（4 年） ②大学生活に関する調査（1 年）
論文／雑誌名	「日本女子大学学生の学生生活に関する意識調査」 『女子の高等教育』
著者	日本女子大学女子教育研究所
掲載ページ	pp.128-230.
発行年	1987.06
出版社	ぎょうせい

女子の高等教育（「女子教育研究双書⑧」）

目　次

序にかえて……青木　生子　1
女子の高等教育についての三つの提言……麻生　誠　9
一　量的均等化の課題　9
二　女性の進出を拒む日本型学歴社会　14
三　女子大学の存在理由について　17

歴史研究

近代日本における女子高等教育の位相……中嶌　邦　24
はじめに　24
一　女子高等教育への抑制　26
二　女子高等教育機関の成立　32
おわりに　45

日・米女子大学教育の比較……小島　蓉子　51
——我が国の女子高等教育の発達に及ぼした米国東部女子カレッジ教育の影響を中心として——
序　51
一　アメリカにおける女子高等教育創設期の状況　52
二　我が国女子大学先覚者を動機づけたアメリカ女子カレッジ教育の思想と実践　64
三　アメリカにおける女子教育再検討の動きと日米交流の行方　71
〈参考〉創始期を中心とする日・米女子教育年表　83

成瀬仁蔵の女子高等教育……真橋美智子　98
——職業教育の視点から——
はじめに　98
一　明治後期から大正前期にかけての女子職業観　100
二　成瀬仁蔵の女子高等教育と職業　105
おわりに　114

現　況

日本女子大学学生の学生生活に関する意識調査……日本女子大学女子教育研究所　128
はじめに　128
一　全国の大学の概況　129
二　調査の概況　145
三　大学生活への期待　148
四　学生生活の状況　161
五　卒業後の展望　187
まとめ　213
生涯教育における女子高等教育の役割……山本　和代　231
——日本女子大学の事例から——
一　生涯教育への期待　231
二　大学院教育　238
三　大学通信教育　249
四　女子高等教育の役割　259

外国研究

英国女性の高等教育へのアクセスとその系譜……山口　眞　268
一　英国女性の高等教育へのアクセス　268
二　英国における女子高等教育の系譜　276
三　女子高等教育の課題と展望　286
スウェーデンの女子高等教育問題……一番ヶ瀬康子　290
はじめに　290
一　女子教育の展開　291
二　大学進学に関する男女比較　294
三　大学院教育及び教授職における問題点　304
おわりに　310
コミュニティー・カレッジと女子教育……牧野　暢男　313
一　アメリカの大学における女性の位置　313
二　コミュニティー・カレッジの現状　316
三　女子高等教育機関としての意義　322

アメリカの女子高等教育……谷　清子　331
——高等教育と女性に関する現況報告——
一　アメリカの高等教育——現状と将来への展望——　331
二　アメリカの女性と高等教育　346

研究生論文

日本女性の仕事観と専門職に対する意欲性……エリザベス・マウアー・ボーナ　364
——キャリアウーマンと専業主婦の職業選択の「アチーブメント・モティベーション」——
序　364
一　既に職業を選択した高学歴の婦人の専業選択　366
二　女性の職業選択のモデルへ　374

統計・資料

教育統計……河合　慶子　382
アメリカの女性研究機関……谷　清子　414
——セブン・シスターズにおける女性研究——
付　戦後女子教育研究文献目録(6)……真橋美智子　429

日本女子大学学生の学生生活に関する意識調査

日本女子大学女子教育研究所

はじめに

日本女子大学女子教育研究所では、先に大正期（明治四三年入学～昭和三年卒業）、昭和前期（大正一四年入学～昭和二〇年九月卒業）、戦後期（昭和二二年入学～昭和四〇年卒業）の日本女子大学の卒業生に対して学園生活、卒業後の生活、本学の教育に対する評価等の面について追跡調査を行い、その成果を「大正期の本学卒業生に対する調査報告」（日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』女子教育研究双書⑤）、「昭和前期の日本女子大学卒業生に対する調査報告」（『昭和前期の女子教育』女子教育研究双書⑦）、「女子大学卒業生の生活・意見調査」（『女子の生涯教育』女子教育研究双書③）として発表した。

本調査はそれに続くものとして、現在日本女子大学に在学している者たちを対象に実施したものである。

周知のように、現在、高等教育の普及に伴い学生数の増大、学生層の多様化に対応する高等教育の在り方が各方面

で論議を呼んでおり、女子の高等教育機関としての女子大学もその存在意義、役割を大きく問われている。本調査では、日本女子大学に入学した者、また大学教育の課程を終えて社会に巣立っていこうとしている者たちが、本学の教育に何を期待し、何を得たのか、入学の動機、本学及び学科・専攻選択理由、学生生活の満足度、取得資格、クラブ・サークル活動等の面から検討し、あわせて卒業後の展望について職業生活、家庭生活の面から考察することによって、現代女子学生の学生生活の状況、志向の方向等を探りたいと意図している。さらに、本学への期待、不満・改善点等を通して、私学としての本学の教育の在り方、女子大学の将来展望等について学生の側からの資料を得たいと願っている。

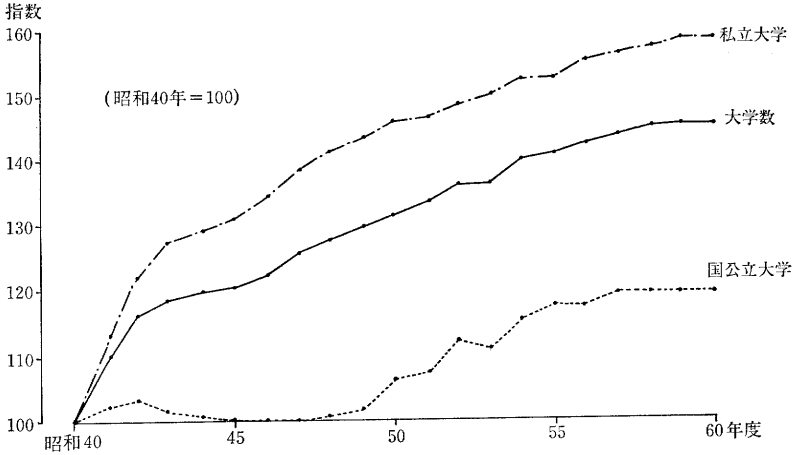
後述するように調査票は二部（一年次用、四年次用）から成っているが、本報告では紙面の都合で主として四年生を対象としたものに焦点をあて報告し、一年生については比較のための引用にとどめた。また随所で、附属校出身者と大学からの入学者の対比を試みている。

なお、時代の推移の中で学生像の変遷をたどる資料として、前掲の一連の調査報告を参照していただければ幸いである。

一　全国の大学の概況

今回の「大学生活に関する調査」は、日本女子大学の一年生と四年生を対象にし、一年生は昭和六〇年五月に、四年生は昭和六〇年一二月から昭和六一年二月にかけて実施したものである。両調査とも昭和六〇年度に実施したものであり、調査報告に先立って、昭和六〇年度の全国の大学の概況について述べることにする。ここでは、大学の状況を大学数、学生数、卒業後の状況等の面から、主として文部省の「学校基本調査報告書」（毎年五月一日実施）によっ

図1　設置者別大学数の推移



（注）大学数には，学生募集停止の学校も正規の廃止手続が完了しない限り含めてある。

〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

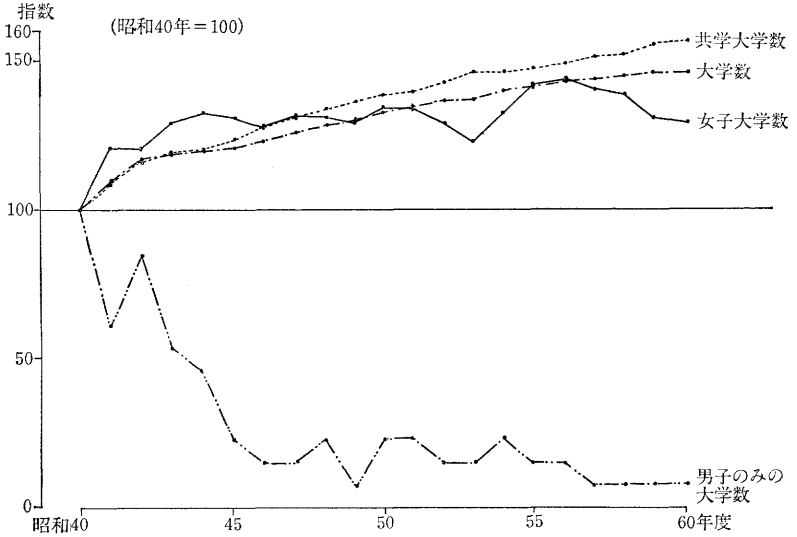
てみていく。その際、比較年度として、昭和四〇年度をとりあげて検討する。これは戦後の第一次ベビーブームの影響で、昭和四一年に大学二九校、短期大学四四校が新設されており、学生数の増加に伴って、女子の大学・短期大学への進学率が上昇し、現在に至っているからである。

＜大　学　数＞

昭和六〇年度の大学数は、四六〇校（国公立一二九校、私立三三一校）で四〇年度（三一七校）に比べ一四三校増え、伸び率は約一・五倍となっている。更に、一〇年前の五〇年度（四二〇校）と比べると、一・一倍の増であり、伸び率は四〇年から五〇年にかけての一〇年の方が五〇年から六〇年にかけてよりも大きい。ちなみに、文部省の集計によると、昭和六一年は、新設大学申請ラッシュになっているが、これは一八歳人口の急増（第二次ベビーブーム）に対応したものである。

設置者別に大学数をみると、私立大学が七二％を占め、圧倒的に多い。この傾向は四〇年度においてもみられ、四

図2　男女別大学数の推移



〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

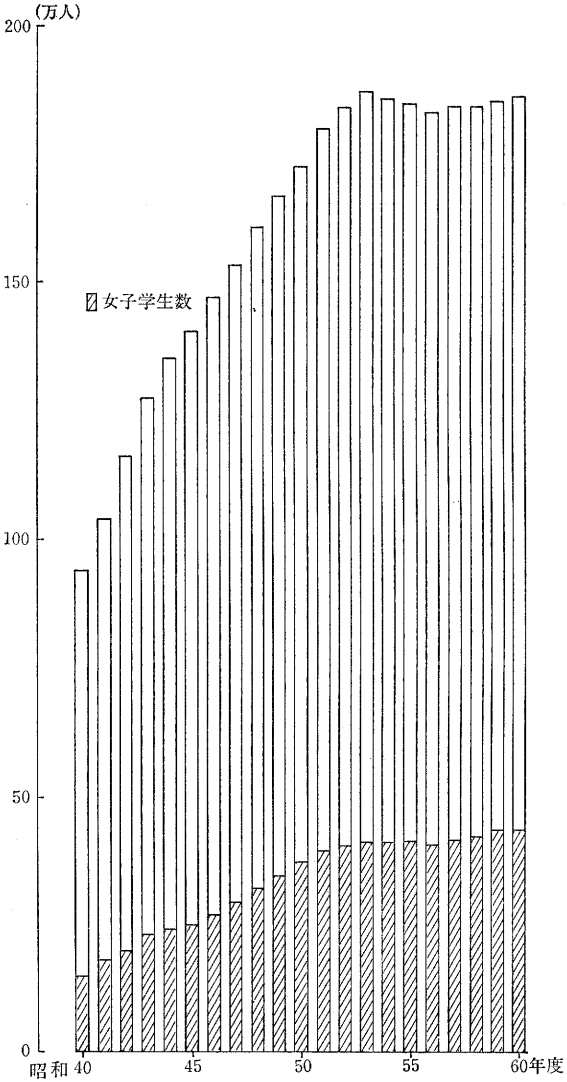
○年以降の二〇年間の増加率をみると、国公立大学の一・一倍に対し、私立大学は一・五八倍と国公立大学を上回っている。四〇年以降の大学数の増加は私立大学に負うところが大きい（図1）。

次に、共学・別学別に大学数をみると、共学校が八割を占め（八一・七%）、女子校は約二割（一七・六%）にすぎない。男子校はわずか一校（〇・二%）のみである。このような傾向は四〇年度においてもみられるが、六〇年度と比較すると、六〇年度では共学校（一・六倍）と女子校（一・三倍）が増加する反面、男子校は極端に減少している。女子校について、二〇年間の推移をみると、四四年までは増加傾向を示し、その伸び率も高いが、その後増減を繰り返し、五七年以降は減少傾向が続いている（図2）。また、女子校から共学校への移行が八校（国公立一校、私立七校。八校のうち六校は昭和四〇年前後の設立である）ある。これとは逆に、共学校から女子校へ転じた学校（尚絅大学、昭和五七年）も一校ある。

〈学　生　数〉

六〇年度の学生数（ここでいう学生数は、四年制大学における学部・専攻科・別科及び大学院の学生数の合計である）は約一八四万九、〇〇〇人であり、前年度に比べ約五、〇〇〇人の増加である。このうち女子学生の占める割合は二三・五％（約四三万四、〇〇〇人）であり、前年度に比べ〇・四％高く（約九、〇〇〇人増）なっている。また、四〇年度（約九三万八、〇〇〇人、そのうち女子学生は約一五万二、〇〇〇人で全体の一六・二％である）に比べると約二倍の増加である。

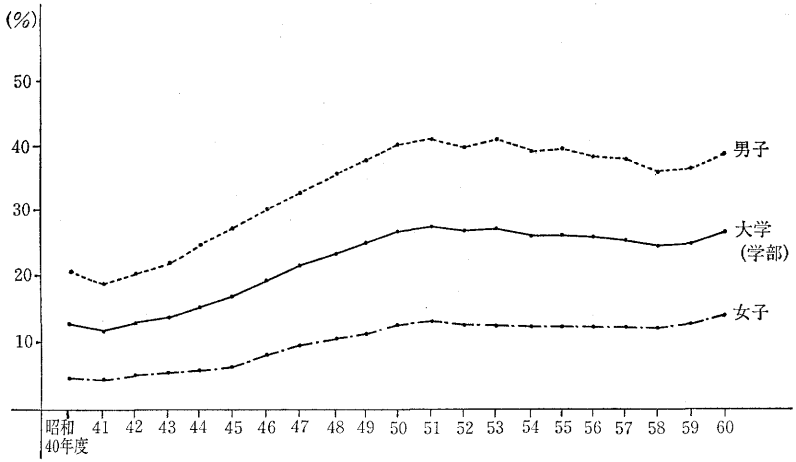
図3　学生数の推移



（注）　学生数とは，学部・専攻科・別科及び大学院の学生数の合計である。

〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

図4　大学（学部）進学率の推移



（注）　大学進学率＝$\frac{\text{大学への入学者数}}{\text{同年齢人口（三年前の中学卒業者数）}}\times 100$

〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

これを男女別にみると、男子学生の一・八倍に対し、女子学生は二・九倍と女子学生の増加率が高い。

次に、四〇年から六〇年にかけての二〇年間の学生数の推移をみると、四〇年以降増加傾向にあるが、五三年度をピークとして翌五四年から減少に転じ、五八年に再び増加し、その後増加傾向を示している。これを男女別にみると、男子学生の場合は、五八年度に増加したものの五九年以降再び減少傾向となっている。これに対し、女子は五四～五六年の三年間は減少したが、男子より一年早い五七年から増加傾向がみられ、現在に至っている（図3）。図3から明らかなように、最近の学生数の増加は女子学生数の伸びによっている。

また大学進学率からこれをみると、男女とも四〇年から五〇年にかけては急激な勾配で上昇したが（男四〇年二〇・七%、五〇年四〇・四%：女四〇年四・六%、五〇年一二・五%）、五〇年以降男子は下降傾向にあり、女子は一二%台で緩やかな伸びを示している（六〇年男三八・六%：女一三・七%）（図4）。このように、女子学生数の増加率は男子よ

り高いが、四年制大学への進学率となると、女子は一三・七%と依然として低く、前述のように、全学生中に占める女子学生の割合も六〇年度で二割強という状況である。

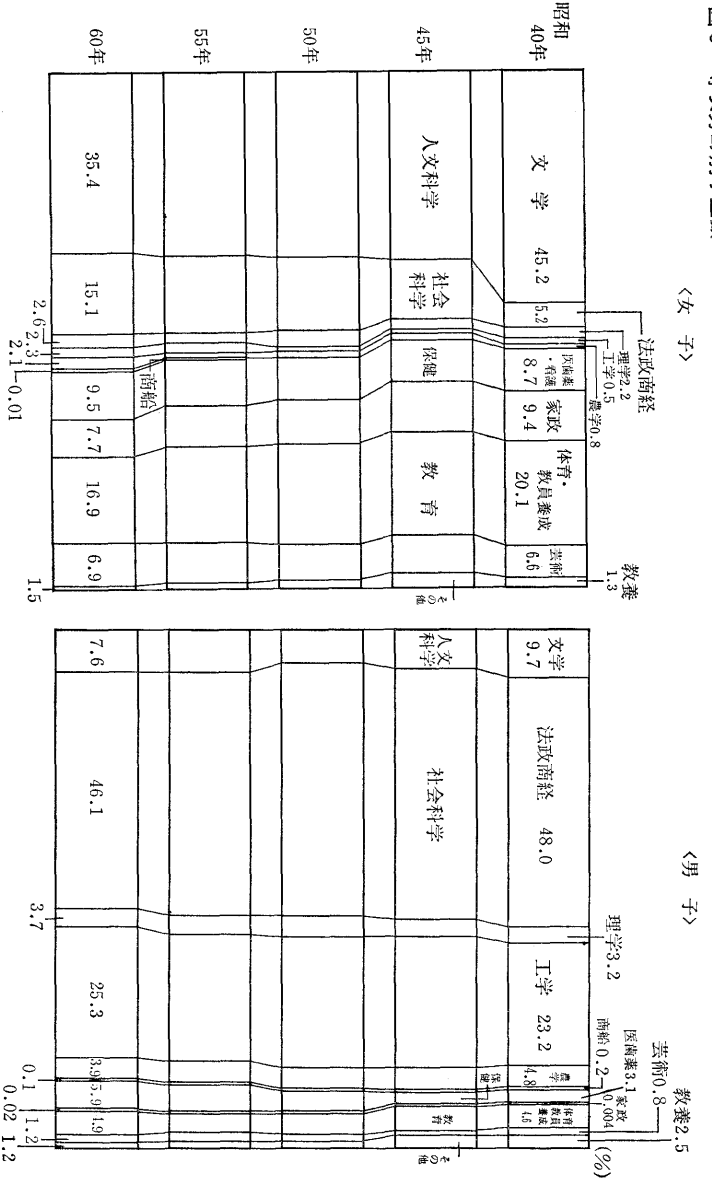
次に設置者別に六〇年度の学生数をみると、私立大学学生が七二・七%（約一三四万四、〇〇〇人）を占めている。このような傾向は四〇年度においてもみられ、四〇年以降の二〇年間の増加率をみると、私立大学では二・〇倍増であり、国公立大学の一・八倍よりも増加の幅は大きくなっている。このことは、前述のように私立大学が全体の七割に達し、増加率についても私立大学の方が国公立大学より高いことに対応している。

専攻分野別に学生数（学部）をみると、男子学生の場合は、「社会科学」が四六・一%を占めて最も多く、次いで「工学」（二五・三%）、「人文科学」（七・六%）の順である。このように「社会科学」（法律、経済、政治、商学等）と「工学」（機械、電気通信、土木建築、原子力等）の二分野で全体の七割を占めている。これに対して、女子学生の場合は、「人文科学」が最も多く（三五・四%）、その中でも特に文学を専攻する者が多い。次いで「教育」（一六・九%）、「社会科学」（一五・六%）となっており、男子とは異なった構成を示している。

四〇年度と比較すると、男子の場合、全体的に大きな変化はみられないが、女子では「社会科学」（九・九ポイント増）、「工学」（一・八ポイント増）、「農学」（一・三ポイント増）等が増加し、逆に「人文科学」（九・八ポイント減）、「教育」（二・二ポイント減）、「家政」（二・〇ポイント減）等が減少している。この変化は四〇年以降徐々に生じたものであるが、このような女子の専攻領域の広がりは女子学生数の増加と並行してみられるものである。五五年度からの「商船学」への女子の進出、また最近の電子工学、バイオテクノロジー等に関連した職種への女子の就業といった時代の要請も大きく影響していると思われる（図5）。

しかし、六〇年度について女子学生の占める割合を専攻分野別にみると、「家政」では九九・二%と女子がほとん

図5　専攻分野別学生数



〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

どを占めており、「芸術」（六三・九％）、「人文科学」（五九・四％）、「教育」（五一・八％）の分野でも半数以上が女子学生で占められている。これに対し、「工学」（二・七％）、「商船」（四・〇％）、「社会科学」（九・三％）、「農学」（一四・七％）、「理学」（一八・一％）等の分野では女子学生の占める割合は依然として低い。

（注）専攻分野は下記の分類によっている。

「人文科学」……文学関係、史学関係、哲学関係（心理学、宗教学等）、その他（行動科学、マス・コミュニケーション学等）
昭和四三年以前は、上記の他に教育学、社会学、教養学を加えて「文学」として分類

「社会科学」……法学・政治学、商学・経済学、社会学（社会福祉学、人類学等）等
昭和四三年以前は、社会学を除いて「法政商経」として分類

「理　学」……数学、物理学、化学、生物学、地学等

「工　学」……機械工学、電気通信工学、土木建築工学、応用化学、原子力工学、鉱山学、経営工学等

「農　学」……農学、農芸工学、農業経済学、林学、獣医学、畜産学、水産学等

「保　健」……医学、歯学、薬学、看護学等
昭和五〇年以降は、医学進学課程、歯学進学課程を加える。
昭和四三年以前は、「医歯薬」、「看護」と分類

「商　船」……航海学、機関学、運送工学等

「家　政」……家政学、食物学、被服学、住居学、児童学等

「教　育」……教育学、小学校課程、体育学等
昭和四三年以前は、「体育」、「教員養成」と分類

「芸　術」……美術、デザイン、音楽等

「そ の 他」……教養学、総合科学、国際関係等
昭和四三年以前は、医学進学課程、歯学進学課程、教養課程（各学科に分類できないもの）、教養学等を「教養」として分類

△卒業後の状況▽

次に、昭和六一年三月に大学（学部）を卒業した者がどのような進路をとったかをみていこう。

まず卒業者数をみると、約三七万六、〇〇〇人（男二八万三、〇〇〇人、女九万三、〇〇〇人）で、前年に比べ約三、〇〇〇人増加している。

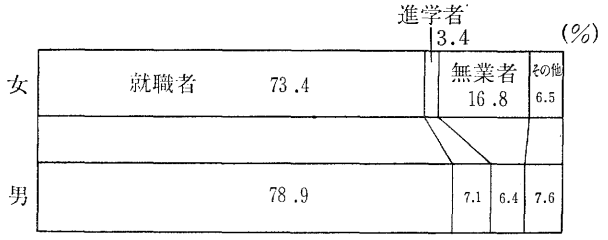
卒業者を進路別にみると、「就職者」（大学院等へ入学して就職した者を除く）が最も多く七七・五％、次いで「無業者」（専修学校及び各種学校等の入学者を含む）九・〇％、「その他」（死亡・不詳、臨床研修医予定者等）七・三％、大学院等への「入学者」（入学して就職した者を含む）六・二％となっている。大学院等への入学者は、大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学、短期大学の専攻科、別科へ入学した者である。

就職率（卒業者のうち就職者及び大学院等へ入学して就職している者の占める比率）は、前年に比べ〇・三ポイント上昇している。これを男女別にみると、男子七八・九％、女子七三・四％で、前年よりそれぞれ〇・七ポイント、一・〇ポイント上昇している。進学率（卒業者のうち大学院等への入学者の比率）も、前年より〇・三ポイント上昇している。

設置者別にみると、就職率は私立大学八〇・五％、国公立大学六八・四％であり、私立大学の方が高く、他方進学率は国公立大学一六・二％、私立大学三・〇％であり、国公立大学の方が高くなっている。この傾向は四〇年以降一貫してみられる。

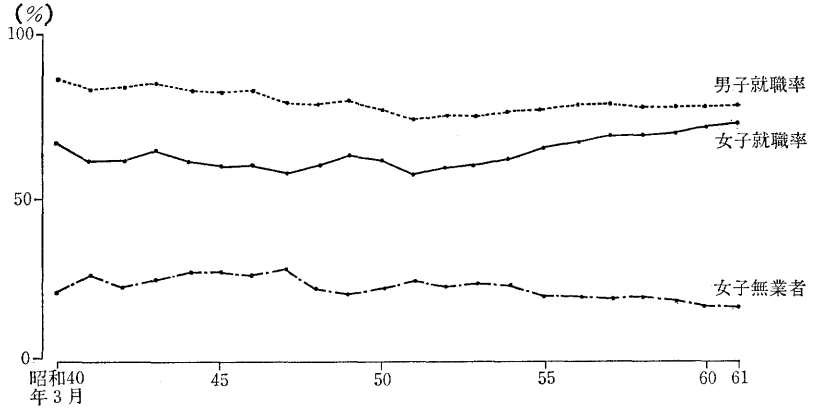
次に男女別にみると、男子の場合、「就職者」が七八・九％を占めて最も多く、次いで「その他」（七・六％）、「進学者」（七・一％）、「無業者」（六・四％）となっている。女子の場合も、「就職者」が最も多い点（七三・四％）は男子と同様であるが、「無業者」が一六・八％と高く、「進学者」は三・四％と低くなっている。このような傾向は四〇年以降大きな変化としては現れていないが、女子就職率の上昇（四〇年六六・六％、五九年七〇・六％、六一年七三・四％）

図6　卒業後の進路（昭和61年3月）



〔資料出所〕　昭和61年度「学校基本調査速報」文部省

図7　男女別就職率及び女子無業者の推移



〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省
昭和61年度「学校基本調査速報」文部省

によって、近年男子就職率との差が縮まる傾向にあり、同時に女子の「無業者」数の下降傾向（四〇年二〇・三%、五二年一九・九%、六一年一六・八%）がみられる（図6、7）。

次に専攻分野別に昭和六一年三月に大学を卒業した者の就職率をみると、「社会科学」が八五・九%で最も高く、次いで「工学」八二・二%、「家政」七九・二%の順となっており、「保健」が四〇・七%で最も低い。男子の「社会科学」と「工学」専攻の学生、また女子では「工学」と「理学」専攻の学生の就職率はいずれも八〇%を超えており、高率である。

進学率を専攻分野別にみると、

表1　専攻分野別，男女別就職率・進学率（昭和61年3月）

（%）

区分	就職率			進学率		
	計	男	女	計	男	女
計	77.5	78.9	73.4	6.2	7.1	3.4
人文科学	72.8	68.6	75.4	3.7	5.8	2.4
社会科学	85.9	86.8	76.7	0.9	0.8	1.6
理学	68.9	65.9	81.3	20.5	23.4	9.0
工学	82.2	82.1	85.8	14.3	14.5	9.8
農学	71.6	71.8	70.6	18.2	18.0	19.4
保健	40.7	27.4	63.1	10.2	14.0	3.8
商船	48.7	48.0	66.7	50.6	51.3	33.3
家政	79.2	67.4	79.3	2.1	4.3	2.1
教育	70.3	69.2	71.3	3.7	4.8	2.7
芸術	61.1	59.5	61.8	6.6	9.2	5.3
その他	76.6	82.2	69.8	6.2	8.7	3.2

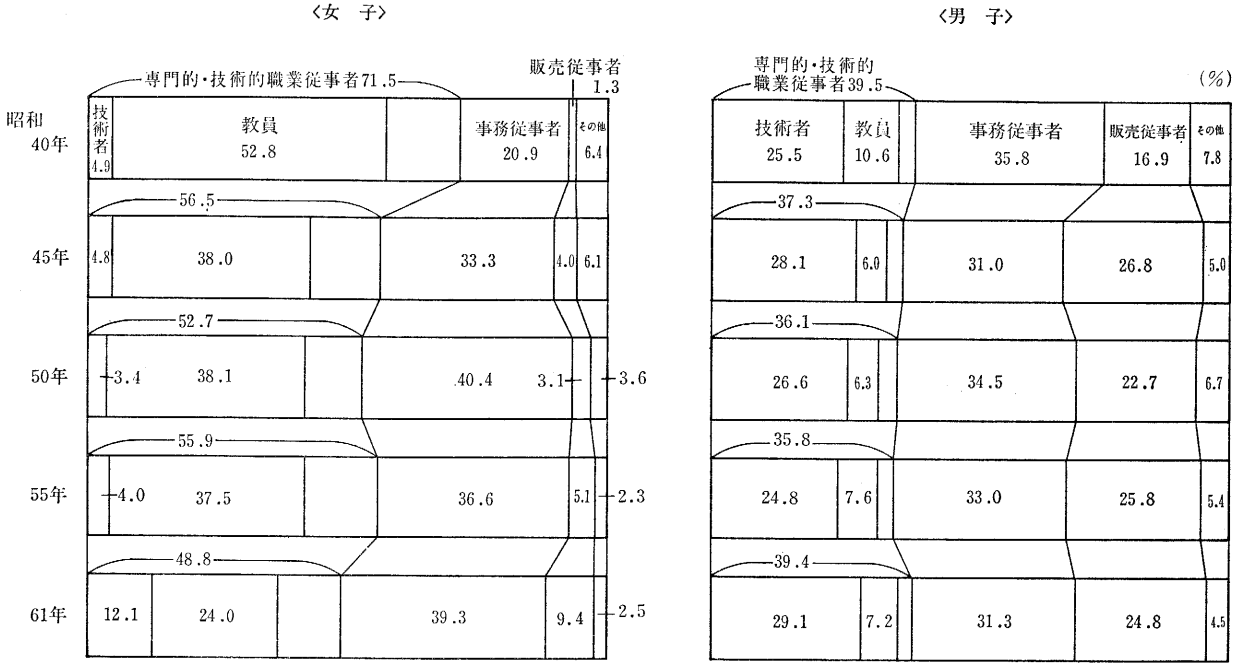
〔資料出所〕　昭和61年度「学校基本調査速報」文部省

「理学」が二〇・五%で最も高く、次いで「農学」一八・二%、「工学」一四・三%の順であり、自然科学系専攻の学生に進学者が多いことは男女ともに共通した傾向である（表1）。

前述のように、昭和六一年三月に大学を卒業した者の八割が就業しているが、ではどのような分野（産業別、職業別）に進出しているのだろうか。まず男子の産業別就業者数をみると、「製造業」が最も多く（三一・六%）、次いで「サービス業」（二一・九%）、「卸・小売業」（一五・八%）、「公務」（一〇・二%）、「金融・保険業」（九・八%）の順である。これに対し、女子では、「サービス業」に就業する者が最も多く、五〇・四%と過半数を占め、次いで「製造業」（一八・二%）、「卸・小売業」（一三・一%）、「公務」（七・〇%）、「金融・保険業」（五・八%）となっている。第三次産業に就業する者が約八割に達しており、これは男子（六割）の場合よりも多くなっている。「労働力調査」（総務庁）によれば、女子雇用者が第三次産業に占める割合は年々高まる傾向にあり、六〇年度には六八・六%となっているが、大卒女子の場合はこれを超えた比率である（図8）。

産業別構成比では男女に違いがみられたが、職業別（注）ではどうであろうか。男子の場合、「専門的・技術的職業従事

図8　産業別就職状況

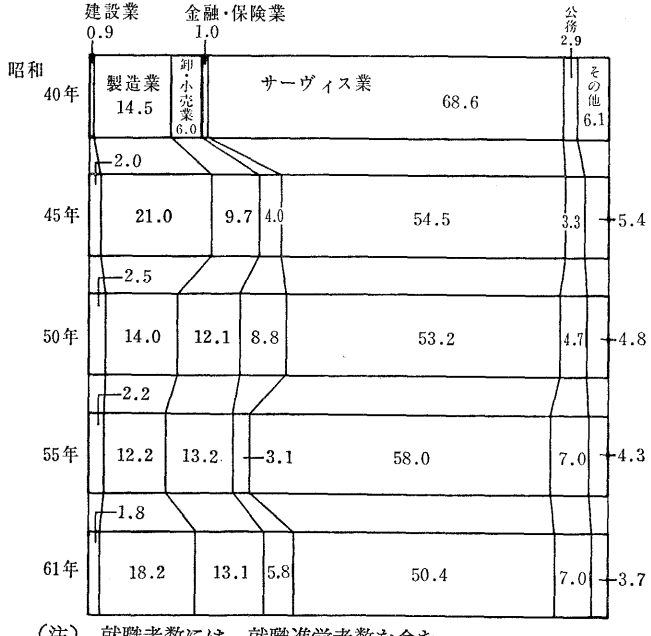


(注)　就職者数には，就職進学者数を含む。

〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省
昭和61年度「学校基本調査速報」文部省

職業別就職状況

〈女　子〉



〈男　子〉

(%)

建設業 5.8	製造業 39.3	卸・小売業 16.8	金融・保険業 8.7	サーヴィス業 15.7	公務 5.3	その他 8.3
6.1	41.9	18.5	8.8	11.7	6.2	6.7
7.8	29.7	18.7	12.7	13.9	10.5	6.7
7.4	27.6	19.8	10.1	17.8	11.8	5.4
5.4	31.6	15.8	9.8	21.9	10.2	5.2

（注）　就職者数には，就職進学者数を含む。

〔資料出所〕「学校基本調査報告書」文部省

昭和61年度「学校基本調査速報」文部省

者」が最も多く（三九・四％）、次いで「事務従事者」（三一・三％）、「販売従事者」（二四・八％）となっている。これに対して、女子では「専門的・技術的職業」に従事する者が四八・四％と半数近くに達し、その比率は男子よりも高い。次いで、「事務従事者」が約四割、「販売従事者」が約一割である。専門的・技術的職業のなかでは、女子の場合は「教員」の占める割合が二四・〇％と高く、男子では「技術者」が二九・一％と多く、職業別にみても男女差がみられる（図8）。

（注）職業別就業者は下記の分類による。
「専門的・技術的職業従事者」……技術者・教員・医師・栄養士・芸術家等
「事務従事者」
「販売従事者」
「その他」……管理的職業、農林業、技能工等

前述のように、昭和四〇年以降の二〇年間に女子学生の就職率の上昇がみられたが、ここで、産業別・職業別に女子就業者の推移をみてみよう。まず、産業別構成比を四〇年度と比較すると、「卸・小売業」（七・一ポイント増）、「金融・保険業」（四・八ポイント増）、「公務」（四・一ポイント増）、「製造業」（三・七ポイント増）等が増加し、他方「サービス業」が全体の中で占める割合は減少している。これは、「サービス業」に分類される「教員」の減少傾向が反映していると思われる。職業別には「事務従事者」（一八・四ポイント増）の伸びが目立ち、このほかに「販売従事者」（八・一ポイント増）、「技術者」（七・二ポイント増）等が増加している。これに対し「教員」の占める割合は低下し続け、四〇年度には女子就業者の半数を超えた者が「教員」に就業したが（五二・八％）、六一年三月には二四・〇％と全体の四分の一に減少している。

これに対して男子の場合は、産業別には「サービス業」の増加（六一年三月には「サービス業」は「製造業」に次ぐ比

表2　女子雇用者数の増加，減少の著しい主な職業（昭和50～60年）

昭和50～60年に2倍及び2,000人以上増加した職業	55～60年に50%及び1,000人以上増加した職業	50～60年に2,000人以上減少した職業
（専門的・技術的職業従事者）	（専門的・技術的職業従事者）	（事務従事者）
情報処理技術者	機械技術者	速記者，タイピスト
薬剤師	電気技術者	（運輸・通信従事者）
文芸家，著述家	化学技術者	車掌
社会福祉事業専門職員	情報処理技術者	電話交換手
職業スポーツ家	文芸家，著述家	（技能工，生産工程作業者及び労務作業者）
（事務従事者）	職業スポーツ家	自動車組立工
電子計算機等操作員	個人教師	粗紡工，精紡工
（販売従事者）	（事務従事者）	合糸工，ねん糸工，加工糸工
商品販売外交員	電子計算機等操作員	織布工
（農林漁業作業者）	（販売従事者）	編物工，編立工
水産養殖作業者	商品販売外交員	婦人・子供服仕立職
（技能工，生産工程作業者及び労務作業者）	（技能工，生産工程作業者及び労務作業者）	合板工
一般機械器具組立工	一般機械器具修理工	れんが・かわら・土管製造工
半導体製品製造工	半導体製品製造工	（サービス職業従事者）
製図工，写図工	（サービス職業従事者）	家事手伝い（住込の女子）
（サービス職業従事者）	物品一時預り人，賃貸人	理容師
物品一時預り人，賃貸人		接客社交係

（注）昭和50年，55年は20%抽出，60年は1%抽出集計結果による。
〔資料出所〕総務庁統計局「国勢調査」

率である）が目立っている。職業別にみると、景気の変動による一時的な変化はあるが、全般的傾向に変わりはない。

以上のように、女子学生の卒業後の進路は、就職者が七割を超え、男子就職率との差を縮めてきている。昭和四〇年度の女子就職率は六六・六%（男、八六・六%）と経済の高度成長の中で高い比率を示したが、その後、四六年の不況や第一次石油危機等の景気の変動を受けて減少・上昇を繰り返したが、五一年（五七・五%）以降は上昇を続けている。これは、経済の成長（五〇年から六〇年までの実質GNP年率は四・五%増である）

に伴う労働力の需要増大、また情報サービス関連産業の拡大等、産業構造の変化に伴う女子労働力の需要に加えて、女子の高学歴化による女子学生の就業意欲の向上によるものと思われる。

このように女子就業者数の増加とともに、女子の就業領域の推移がみられる。これは、女子学生の卒業後の進路に大きなウェイトを占めていた「教員」比率の減少と並行して「事務従事者」、「販売従事者」、「技術者」等の増加傾向となって現れている。総務庁統計局の「国勢調査」によれば、女子雇用者数の増加の著しい職業（昭和五〇～六〇年）として、情報処理技術者、薬剤師、社会福祉事業専門職員、機械技術者、電気技術者、化学技術者等の「専門的・技術的職業従事者」、電子計算機等操作員等の「事務従事者」、商品販売外交員等「販売従事者」があげられ、また、減少の著しいものでは、速記者、タイピスト（「事務従事者」）、電話交換手（「運輸・通信従事者」）等がある（表2）。このような女子の就業領域の拡大は、「社会科学（社会福祉学を含む）」、「工学」、「農学」等の女子の専攻領域の広がりと、こ

表3　回収状況（4年）

学部	学科	対象者数	回収数	回収率
家政	児童	96	47	49.0%
	食物学	64	34	53.1
	管理栄養士	34	24	70.6
	住居	100	90	90.0
	被服	64	64	100.0
	家政理学一部・物理	44	38	86.4
	化学	42	23	54.8
	数学	56	55	98.2
	家政理学二部	56	55	98.2
	家政経済	88	76	86.4
文	国文	130	121	93.1
	英文	184	132	71.7
	史学	98	64	65.3
	社会福祉	112	96	85.7
	教育	131	119	90.1
計		1,299	1,038	79.9

れらの科目を専攻する女子学生数の増加等と関連すると思われる。

二　調査の概況

〈調査期日〉

○四年生

昭和六〇年一二月二〇日から昭和六一年二月二八日

○一年生

昭和六〇年五月三〇日

〈調査方法〉

四年生、一年生共に質問紙法による。四年生の場合は、各学科ごとに依頼して実施した。一年生は、講堂における集合調査である。

回収状況は、表3、4に示すとおりである。

集計・製表については、コーディング作業後、自由記述方式の部分は手集計を行い、その他の部分は、本学計算研究所のコンピュータによる機械集計によったものである。

調査結果は、主に専攻学科別に検討している。専攻学科については、本学の学科・専攻の開設状況に基づき、次の

表4　回収状況（1年）

学部	学科	対象者数	回収数	回収率
家政	児童	77	63	81.8%
	食物学	52	51	98.1
	管理栄養士	43	42	97.7
	住居	78	69	88.5
	被服	82	70	84.1
	家政理学一部・物理	45	38	84.4
	数学	50	47	94.0
	化学	43	42	97.7
	家政理学二部	73	69	94.5
	家政経済	69	63	91.3
文	国文	127	115	90.6
	英文	131	113	86.3
	史学	74	68	91.9
	社会福祉	99	90	92.9
	教育	102	87	85.3
計		1,145	1,027	89.7

一五学科（専攻）に分類した。

㈠ 児童学科　㈡ 食物学専攻　㈢ 管理栄養士専攻　㈣ 住居学科　㈤ 被服学科　㈥ 家政理学科一部・物理専攻　㈦ 家政理学科一部・数学専攻　㈧ 家政理学科一部・化学専攻　㈨ 家政理学科二部（生物農芸）　㈩ 家政経済学科　㈪ 国文学科　㈫ 英文学科　㈬ 史学科　㈭ 社会福祉学科　㈮ 教育学科

なお、家政学部は上記の㈠～㈩の各学科よりなり、文学部は㈪～㈮より構成されている。

表5　調査対象者学科別内訳

学科＼学年	4年生	1年生
	人　%	人　%
児童	47（4.6）	63（6.1）
食物	33（3.3）	51（5.0）
管理栄養士	24（2.4）	42（4.1）
住居	88（8.7）	69（6.7）
被服	64（6.3）	70（6.8）
物理	38（3.8）	38（3.7）
数学	54（5.3）	47（4.6）
化学	23（2.3）	42（4.1）
理二	55（5.4）	69（6.7）
家政経済	76（7.5）	63（6.1）
国文	116（11.5）	115（11.2）
英文	127（12.5）	113（11.0）
史学	62（6.1）	68（6.6）
社会福祉	91（9.0）	90（8.8）
教育	115（11.4）	87（8.5）
有効回収数計	1,013（100.0）	1,027（100.0）

〈調査対象者〉

調査対象者は、日本女子大学の四年生（昭和六一年三月卒業見込みの者）一、二九九名と、一年生（昭和六〇年四月入学）一、一四五名である。

調査対象者の学科別内訳は表5に示すとおりである。

出身校をみると、国公立・共学校出身者が最も多く、全体の約半数を占めており（四五・〇%）、次

いで私立・女子校出身者（本学付属校も含む）である（三八・九%）。なお、本学付属校出身者は全体の約三割である（二九・五%）（表6）。

次に、出身校の所在地をみると、神奈川県が最も多く（三九・〇%）、次いで東京都（一六・五%）、東京と神奈川を除いた関東地方（一五・七%）、中部地方（一二・五%）の順である。このように関東地方が全体の七割を占め、なかでも神奈川県の占める割合が高いのは、付属高校の所在地が神奈川県にあるためと思われる（表7）。

以上のような出身校の傾向は、一年生についても言える。

なお、一年生の調査では「高校卒業の時期」についてたずねている。昭和六〇年三月に卒業した者が七六・八%と、高校卒業後ストレートに入学した者が約八割であり、他の者たちは昭和五九年三月卒業である（表8）。

表6　出身校

出身校＼学年	4年生	1年生
	人　%	人　%
国公立・共学校	456（45.0）	485（47.2）
国公立・女子校	128（12.6）	135（13.1）
私立・共学校	21（2.1）	15（1.5）
私立・女子校	95（9.4）	81（7.9）
本学付属校	299（29.5）	309（30.1）
その他	4（0.4）	—
無答	10（1.0）	—
計	1,013（100.0）	1,027（100.0）

＜調査項目＞

本調査は大別すると、大学生活への期待、学生生活の状況、卒業後の展望から成っている。大学生活への期待においては、本学選択理由、学科選択理由、日本女子大学に学んでよかった点、不満・改善点等が含まれている。学生生活の状況では、学生生活の満足度、資格取得、クラブ・サークル活動、愛読書等をたずね、卒業後の展望においては、卒業直後の進路、職業観、性別役割分業観、結婚観等について回答を求めている。

表7　出身高校所在地（4年）

（上段　実数）
（下段　%）

合　計	東京都	神奈川県	他の関東地方	北海道	東　北	中　部	近　畿	中　国	四　国	九　州	国外	無答
1013 100.0%	167 16.5%	395 39.0%	159 15.7%	6 0.6%	34 3.4%	127 12.5%	14 1.4%	29 2.9%	21 2.1%	37 3.7%	4 0.4%	20 2.0%

表8　高校卒業の時期（1年）

合　計	昭60年3月	昭59年3月	昭58年3月	その他	無　答
1027 100.0%	789 76.8%	222 21.6%	13 1.3%	2 0.2%	1 0.1%

三　大学生活への期待

では、厳しい受験体制を経て、日本女子大学に入学した者たちは、どのような理由で本学を選び、また学科を選択したのであろうか、この点についてみていこう。

〈本学選択理由〉

まず、四年生に「日本女子大学を選んだ理由」（以下「本学選択理由」とする）についてたずねると、「自分が専攻したい分野がある」が最も多く（五〇・六%）、次いで「付属校にいた」（二六・四%）、「大学の特色・学風にひかれて」（二五・四%）、「四年制の大学に行きたかった」（二二・一%）、「自分の偏差値に合っている」（一七・一%）の順であり、専攻分野から本学を選択した者が過半数を占めている。これに対し「将来の就職を考えて」をあげる者は八・八%と一割にも満たない。なお、「二　調査の概況」でみたように、調査対象者の約三割は本学付属校出身者であるため「付属校にいた」と答えている者の比率もかなり高くなっている（表9）。

学科別に、本学選択理由をみると、管理栄養士、住居、家政理学科二部、食物、児童、社会福祉等の各学科で「自分が専攻したい分野がある」をあげる者の比率が高い（管理栄養士八三・三%、住居七五・〇%、家政理学科二部六七・三%、食物六六・七%、児童六六・〇%、社会福祉六二・六%）。また、

表9　本学選択理由（4年）（M.A.）

	合　計	専攻分野がある	大学の特色・学風	四年制大学	大学院がある	付属校にいた	先生のすすめ	親等のすすめ	女子だけの大学
合　計	1,013 100.0%	513 50.6%	248 24.5%	224 22.1%	2 0.2%	267 26.4%	54 5.3%	134 13.2%	63 6.2%
児童	47 4.6%	31 66.0%	12 25.5%	7 14.9%	—	16 34.0%	2 4.3%	5 10.6%	—
食物	33 3.3%	22 66.7%	7 21.2%	10 30.3%	—	3 9.1%	2 6.1%	1 3.0%	2 6.1%
管理栄養士	24 2.4%	20 83.3%	4 16.7%	5 20.8%	1 4.2%	4 16.7%	—	3 12.5%	—
住居	88 8.7%	66 75.0%	19 21.6%	13 14.8%	—	20 22.7%	5 5.7%	8 9.1%	3 3.4%
被服	64 6.3%	31 48.4%	17 26.6%	15 23.4%	—	6 9.4%	3 4.7%	11 17.2%	4 6.3%
物理	38 3.8%	18 47.4%	5 13.2%	7 18.4%	—	14 36.8%	3 7.9%	2 5.3%	4 10.5%
数学	54 5.3%	25 46.3%	7 13.0%	12 22.2%	—	20 37.0%	3 5.6%	8 14.8%	3 5.6%
化学	23 2.3%	12 52.2%	—	3 13.0%	—	—	4 17.4%	6 26.1%	1 4.3%
理二	55 5.4%	37 67.3%	10 18.2%	9 16.4%	—	14 25.5%	3 5.5%	5 9.1%	4 7.3%
家政経済	76 7.5%	34 44.7%	27 35.5%	14 18.4%	—	13 17.1%	6 7.9%	12 15.8%	6 7.9%
国文	116 11.5%	36 31.0%	35 30.2%	30 25.9%	—	49 42.2%	7 6.0%	11 9.5%	14 12.1%
英文	127 12.5%	38 29.9%	29 22.8%	37 29.1%	1 0.8%	39 30.7%	8 6.3%	30 23.6%	8 6.3%
史学	62 6.1%	23 37.1%	12 19.4%	16 25.8%	—	17 27.4%	2 3.2%	12 19.4%	3 4.8%
社会福祉	91 9.0%	57 62.6%	34 37.4%	22 24.2%	—	17 18.7%	2 2.2%	8 8.8%	3 3.3%
教育	115 11.4%	63 54.8%	30 26.1%	24 20.9%	—	35 30.4%	4 3.5%	12 10.4%	8 7.0%

就職を考えて	学費を考えて	通学に便利	偏差値	学校案内をみて	その他	無答
89 8.8%	22 2.2%	50 4.9%	173 17.1%	77 7.6%	24 2.4%	8 0.8%
9 19.1%	1 2.1%	2 4.3%	3 6.4%	4 8.5%	—	—
2 6.1%	1 3.0%	1 3.0%	7 21.2%	4 12.1%	3 9.1%	—
1 4.2%	1 4.2%	2 8.3%	4 16.7%	2 8.3%	1 4.2%	—
15 17.0%	1 1.1%	1 1.1%	14 15.9%	6 6.8%	—	—
6 9.4%	2 3.1%	1 1.6%	14 21.9%	7 10.9%	2 3.1%	2 3.1%
6 15.8%	3 7.9%	1 2.6%	3 7.9%	2 5.3%	—	1 2.6%
7 13.0%	—	5 9.3%	10 18.5%	5 9.3%	1 1.9%	—
2 8.7%	5 21.7%	2 8.7%	4 17.4%	2 8.7%	3 13.0%	—
7 12.7%	1 1.8%	3 5.5%	2 3.6%	4 7.3%	2 3.6%	—
2 2.6%	2 2.6%	3 3.9%	18 23.7%	6 7.9%	2 2.6%	—
4 3.4%	2 1.7%	4 3.4%	19 16.4%	4 3.4%	4 3.4%	—
4 3.1%	—	8 6.3%	26 20.5%	15 11.8%	1 0.8%	—
1 1.6%	2 3.2%	7 11.3%	19 30.6%	3 4.8%	2 3.2%	5 8.1%
6 6.6%	1 1.1%	7 7.7%	12 13.2%	8 8.8%	—	—
17 14.8%	—	3 2.6%	18 15.7%	5 4.3%	3 2.6%	—

社会福祉、家政経済の各学科では「大学の特色・学風にひかれて」をあげる者が比較的多くみられる。

なお、「将来の就職を考えて」をあげる者は、全体としては少なかったが、児童（一九・一％）、住居（一七・〇％）、物理（一五・八％）、教育（一四・八％）、数学（一三・〇％）等の各学科では比較的多くなっている。

本学選択理由については学科別よりも付属校出身者と大学からの入学者との間の差が大きくなっている。すなわち、付属校出身者の場合、当然のことながら「付属校にいた」（八九・三％）をあげる者が多く、次いで「自分の専攻したい分野がある」（三四・一％）、「大学の特色・学風にひかれて」（二三・一％）、「四年制の大学に行きたかった」（一六・一％）の順である。他方、大学からの入学者では「自分の専攻したい分野がある」が五七・七％と約六割を占めて最も多く、次いで「四年制の大学に行きたかった」（二四・七％）、「大学の特色・学風にひかれて」（二四・六％）、「自分の偏差値に合う学校だったから」（二三・〇％）が続いている。「就職を考えて」をあげる者も一一・六％と一割を超しているが、付属校出身者の場合は二・三％とわずかである。このように大学からの入学者では、付属校出身者に比べ「自分の専攻したい分野がある」、「四年制の大学に行きたかった」、「自分の偏差値に合う学校」、「就職を考えて」等の比率が高くなっている（表10）。

一年生の場合は、更に詳しく「四年制大学入学理由」、「女子大学選択理由」、「本学選択理由」と三段階で順を追ってたずねている。まず「四年制大学入学理由」をみると、「専門的知識や技術を修得したいから」（四八・四％）が最も多く、次いで「教養を高めたい」（四六・〇％）、「大学卒業の学歴・資格（教員、司書、栄養士等）を得たい」（三九・〇％）、「大学生活を楽しみたい」（二二・六％）の順であり、「専門志向」と「教養志向」が相半ばしているが、「専門志向」の方が若干上回っていると言えよう。なお、付属校出身者についてみると、第一位は「教養を高めたい」（五六・三％）であり、第二位に「専門的知識や技術の修得」（五三・四％）があげられ、全体的な傾向とは逆に「教養志

表10　本学選択理由（4年）

	専攻分野がある	大学の特色・学風	四年制大学	大学院がある	付属校にいた	先生のすすめ	親等のすすめ	女子だけの大学	就職を考えて	学費を考えて	通学に便利	偏差値	学校案内をみて	その他	無答
合計	508 50.6%	242 24.1%	222 22.1%	2 0.2%	267 26.6%	53 5.3%	134 13.4%	63 6.3%	89 8.9%	21 2.1%	50 5.0%	170 16.9%	76 7.6%	24 2.4%	8 0.8%
本学付属	102 34.1%	69 23.1%	48 16.1%	— —	267 89.3%	7 2.3%	46 15.4%	7 2.3%	7 2.3%	— —	6 2.0%	8 2.7%	3 1.0%	1 0.3%	1 0.3%
大学からの入学者	406 57.7%	173 24.6%	174 24.7%	2 0.3%	— —	46 6.5%	88 12.5%	56 8.0%	82 11.6%	21 3.0%	44 6.3%	162 23.0%	73 10.4%	23 3.3%	7 1.0%

表11　四年制大学入学理由（1年）（M.A.）

	専門的知識・技術	教養を高める	学歴・資格	入学は当然	就職したくない	まわりが行く	親等のすすめ	大学生活を楽しむ	よい友人	自由な時間	何となく	その他	無答	不明
合計	496 48.4%	472 46.0%	400 39.0%	113 11.0%	20 2.0%	19 1.9%	16 1.6%	232 22.6%	134 13.1%	83 8.1%	8 0.8%	24 2.3%	1 0.1%	2 0.2%
本学付属	165 53.4%	174 56.3%	99 32.0%	42 13.6%	1 0.3%	8 2.6%	2 0.6%	55 17.8%	36 11.7%	18 5.8%	1 0.3%	8 2.6%	— —	— —
大学からの入学者	331 46.2%	298 41.6%	301 42.0%	71 9.9%	19 2.7%	11 1.5%	14 2.0%	177 24.7%	98 13.7%	65 9.1%	7 1.0%	16 2.2%	1 0.1%	2 0.3%

向」が優先している（表11）。

「女子大学を選んだ理由」では、全体的傾向として、後述するように、「積極的に女子大学の意義を認めているもの」が最も多く、四割を占めている。次いで「専攻分野から」、「付属校出身なので」、「特に理由はない」の三者がそれぞれ二割を占めている。では、どのような点で積極的に女子大学の意義を認めているのであろうか。この項目は自由記述方式で回答を求めたものだが、具体的には、「女子だけの方が男子の目や反応を気にしないで、ありのままの自分が出せ、のびのびと学べると思う」、「共学だと男子に甘えて、頼ってしまい、自分一人で物事を判断したり、実

行するチャンスが減ってしまうと思う」、「今まで共学で、どちらかと言うと男子の方が中心だったので、女子が中心となって運営する所に行き、自分を試してみたかった」といった記述に代表されるように、女子大学は自分の個性、女性としての能力をのばしやすいという点が全体を通してあげられている。

また、「女性に関する問題を考えていく上でよい環境だと思う」、「女子教育が徹底されているので、女性としてこれから生きていく糧となるような教育が受けられると思ったので」といったような、女子大学だから女性の問題について考えられるのではないかという記述もみられた。この点は付属校出身者が多くあげているものである。また、「就職が共学校より有利と聞いていたから」のように、就職を理由にあげる者もあり、これは付属校の出身者よりも大学からの入学者に多い。

このほかに、「同性の先輩や友人の方が得るものが多いと思ったから」、「総合大学のような規模の大きい大学よりも女子大学の方が細かい面でゆきとどいた指導がされると思われたので」、「今まで共学校であったので、女子だけという環境に興味があった」等が出されている。

更に「本学選択理由」をみると、「四年制の大学に行きたかったから」（三六・九％）が最も多く、次いで「大学の特色・学風にひかれて」（三四・〇％）、「将来の就職を考えて」（二九・八％）、「付属校にいた」（二七・七％）、「自分の偏差値に合う学校だから」（一九・八％）の順である（表12）。

以上のように一年生の場合も四年生と同様に、大学からの入学者は「専攻分野」、「四年制大学」、「就職」、「偏差値に合う学校」等をあげる者が多く、これに対して、付属校出身者の場合は「教養を高めたい」、「大学の特色・学風にひかれて」をあげる者が多く、これらの点で大学からの入学者と違いがみられる。

四年生では、本学選択理由に「就職を考えて」をあげる者は一割にも満たなかったが、一年生の場合は二九・八％

表12　本学選択理由（1年）（M.A.）

	専攻分野がある	専攻分野の教授	大学の特色・学風	四年制大学	大学院がある	付属校にいた	建学の精神
合　計	40 3.9%	118 11.5%	349 34.0%	378 36.9%	15 1.5%	284 27.7%	39 3.8%
本学付属	5 1.6%	49 15.9%	138 44.7%	117 37.9%	2 0.6%	284 91.9%	21 6.8%
大学からの入学者	35 4.9%	69 9.6%	211 29.5%	261 36.5%	13 1.8%	— —	18 2.5%

先生のすすめ	親等のすすめ	友人がいく	就職を考えて	学費を考えて	通学に便利	偏差値
74 7.2%	192 18.7%	8 0.8%	305 29.8%	56 5.5%	168 16.4%	203 19.8%
3 1.0%	43 13.9%	4 1.3%	52 16.8%	— —	10 3.2%	3 1.0%
71 9.9%	149 20.8%	4 0.6%	253 35.3%	56 7.8%	158 22.1%	200 27.9%

学校案内をみて	その他	無答
121 11.8%	79 7.7%	4 0.4%
— —	8 2.6%	— —
121 16.9%	71 9.9%	4 0.6%

と約三割を占めており、これは大学からの入学者に限ってみると、第一位の「四年制の大学」（三六・五％）に次ぐ高率（三五・三％）になっている。一年生で「就職を考えて」をあげた者が何を目的に四年制大学に入学したのかをみると、本学選択理由で「就職を考えて」を選んでいる者は、四年制大学入学理由として「学歴・資格を得たい」、「専門的知識や技術を修得したい」をあげる者が多い。また、本学選択理由に「就職を考えて」をあげた者は、女子大学入学理由においても「就職が有利だから」をあげている者が多い。以上の結果から、「就職を考えて」をあげる者は、資格取得や専門的知識・技術の修得を大学教育に期待している者が多く、本学に対する期待も就職を念頭においている者が多いと言えよう。これらの関連は四年生より一年生においてより強くみられる傾向である。また、一年生には「日本女子大学に期待すること」をたずねているが、その中で「男性と対等に職場で働いていけるような女子教育をしてほしい」、「女性がどんな分野で必要とされているのか、女性はどうあるべきかなどを教育してほしい」といった指摘も出されている。

＜学科選択理由＞

次に、学生たちはどのような理由からそれぞれの学科や専攻を選んでいるのであろうか。学科選択理由を四年生についてみると、「自分の性格や興味にあっていたから」が六三・六％と群を抜いて高く、六割を超している。これに対し、「職業に役立たせたい」、「取得したい資格がとれる」と答えている者はそれぞれ一五・二％、一〇・二％程度であり、職業や資格を目指して学科を選択している者は二割強にすぎない（表13）。

学科別の傾向をみると、史学・国文の両学科では「性格・興味」をあげる者が際立って多く（史学一〇〇％、国文九三・一％）、これに対し、教育、児童、管理栄養士、食物等の学科で「資格」をあげる者の比率が高くなっている（教

表13　学科選択理由（4年）

	合計	職業	性格・興味に合う	つきたい教授	資格の取得	家庭生活	社会活動	その他	無答
合計	1013 100.0%	154 15.2%	644 63.6%	6 0.6%	103 10.2%	31 3.1%	18 1.8%	55 5.4%	2 0.2%
児童	47 4.6%	7 14.9%	24 51.1%	— —	15 31.9%	1 2.1%	— —	— —	— —
食物	33 3.3%	— —	22 66.7%	— —	6 18.2%	3 9.1%	1 3.0%	1 3.0%	— —
管理栄養士	24 2.4%	5 20.8%	9 37.5%	— —	7 29.2%	2 8.3%	1 4.2%	— —	— —
住居	88 8.7%	39 44.3%	39 44.3%	— —	4 4.5%	4 4.5%	— —	1 1.1%	1 1.1%
被服	64 6.3%	8 12.5%	31 48.4%	1 1.6%	6 9.4%	7 10.9%	— —	11 17.2%	— —
物理	38 3.8%	11 28.9%	22 57.9%	— —	4 10.5%	— —	— —	1 2.6%	— —
数学	54 5.3%	15 27.8%	25 46.3%	1 1.9%	9 16.7%	— —	1 1.9%	3 5.6%	— —
化学	23 2.3%	3 13.0%	11 47.8%	— —	4 17.4%	— —	— —	5 21.7%	— —
理二	55 5.4%	2 3.6%	43 78.2%	— —	2 3.6%	— —	2 3.6%	6 10.9%	— —
家政経済	76 7.5%	3 3.9%	48 63.2%	— —	4 5.3%	9 11.8%	4 5.3%	8 10.5%	— —
国文	116 11.5%	2 1.7%	108 93.1%	2 1.7%	1 0.9%	1 0.9%	— —	2 1.7%	— —
英文	127 12.5%	27 21.3%	88 69.3%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	— —	9 7.1%	— —
史学	62 6.1%	— —	62 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —
社会福祉	91 9.0%	17 18.7%	55 60.4%	1 1.1%	1 1.1%	1 1.1%	9 9.9%	6 6.6%	1 1.1%
教育	115 11.4%	15 13.0%	57 49.6%	— —	39 33.9%	2 1.7%	— —	2 1.7%	— —

表14　学科選択理由（1年）(M.A.)

	職業	性格・興味に合う	つきたい教授	有名な教授	まわりのすすめ	勉強したい専門	家庭生活	社会に役立ちたい	結婚の条件	その他	無答	不明
合計	462 45.1%	649 63.3%	11 1.1%	8 0.8%	38 3.7%	536 52.3%	86 8.4%	51 5.0%	11 1.1%	62 6.0%	2 0.2%	6 0.6%
本学付属	142 46.0%	230 74.4%	6 1.9%	— —	12 3.9%	156 50.5%	18 5.8%	17 5.5%	2 0.6%	9 2.9%	— —	2 0.6%
大学からの入学者	320 44.7%	419 58.5%	5 0.7%	8 1.1%	26 3.6%	380 53.1%	68 9.5%	34 4.7%	9 1.3%	53 7.4%	2 0.3%	4 0.6%

育三三・九%、児童三一・九%、管理栄養士二九・二%、食物一八・二%。これは、これらの学科では教員免許、管理栄養士、栄養士等の資格取得が可能であるためとみられる。

また、住居、物理、数学、管理栄養士、英文等の学科では「職業」をあげる者が目立っている（住居四四・三%、物理二八・九%、数学二七・八%、管理栄養士二〇・八%、英文二一・三%）。特に住居、物理、数学等の学科では前述のように本学を選択した理由として「将来の就職を考えて」という点をあげている者が比較的多く、学科選択にも職業志

向の強さがうかがえる。このような傾向は、最近のエレクトロニクスや住宅関係への女子の就職率の高さも反映していると思われる。

付属校出身者と大学からの入学者を比較すると、付属校出身者の場合「性格・興味に合う」と答えている者が七二・九%を占め、大学からの入学者より更に高率になっている。

なお、一年生の学科選択理由についても同様な傾向がみられ、「自分の性格・興味に合っていたから」が全般的に多く、特に付属校出身者にその比率が高い（表14参照）。

以上、どのような理由で本学を選択し、また学科を選んだのかをみてきたが、本学を第一志望で選んでいる者は半数弱である（四年四六・五%、一年四三・四%）。しかし、四年間の学生生活の中で本学に学んだことを積極的に評価して卒業していく者たちもまた多くみられる（「学生生活の満足度」本書一六二頁参照）。

〈日本女子大学に学んでよかった点〉

さらに、卒業を間近に控えた四年生には、本学に学んでよかったと思う点、不満に思ったり、改善したらよい点を自由記述方式でたずねているので、代表的な意見をあげておこう。まず、よかった点では、最も多かったのが、大学の「校風・雰囲気」（約三割）であり、次いで「よい友人」（二割）、「女子だけだった」、「よい教師」、「小規模である」「学習目標の達成」、「講義の内容」の順である。以下、具体的内容についてみていこう。

まず、「校風・雰囲気」については、「アットホームな雰囲気」、「落ち着いていて、こじんまりとしている」、「自由であるが、適度に厳しく、節度がある」等があげられている。「学生時代をのびのびと過ごした」と述べる者が全体を通して多く、大学に入学するまでの受験体制の影響がうかがわれる。

「よい友人」では、「少人数なので、みんなと友だちになれた」、「信頼できる友人たちに恵まれ、自分が高められた」、「全国各地の友人ができ、視野が広がった」、「個性的な人が多く、型にはまらずに自分をのばせた」等であり、このような友人に対する満足は全体を通して強く出されている。

「女子だけだった」については、「女子の視点を重視した講義が多く、女性の置かれている位置や問題点に触れることができた」、「女性としての生き方を考える機会を多くもてた」、「女子だけなので、男子に頼らず何でも自分でする習慣がついた」等があげられている。これらは、前述の「女子大学入学理由」と共通するものである。

「よい教師」については、「熱心な指導を受けた」、「尊敬できる教師が多い」、「教師と個人的に話す機会が多く得られた」、「教師の人格に触れることができ、影響を受けた」、「教師の中に、女性として社会の一線で活躍している者が多く、励みとなった」といった点があげられている。「小規模である」については、「大学の規模が小さく、こまやかな指導が受けられた」、「マンモス校と違って、一人一人が大事にされたと思う」、「就職指導がきめ細かく行われる」等が出されている。「学習目標の達成」には、「自分の勉強したい専門の学習を十分することができ、研究の場として充実していた」、「栄養士の資格を取得できて、四年間勉強したことを形として残すことができた」等、学習面での充実、満足感があげられている。「講義の内容」では、「講義の質が高かったと思う」、「教養特別講義で、いろいろな分野の方の話を聞くことが出来、有意義だった」、また「夏期セミナーでは、他学科の教授・学生と語り合う機会を持て、視野が広がった」等、本学の特色である教養特別講義にふれた記述がみられた（教養特別講義はⅠとⅡに分かれ、Ⅰは二、三年生を対象に教養を深めるための必修講義である。芸術、思想、宗教に関するAコースと、社会（国際事情を含む）、自然についてのBコースがあり、それぞれのコースについて、前・後期各二回ずつ、計四回の講義が行われる。Ⅱは、主として一年生を対象に行われる軽井沢夏期セミナー（合宿）である）。

このほかに、「学部・学科の区別なく、希望する講義を受講することができ、幅広い知識が得られた」、「学問一辺倒でなく、女性としても成長できた」、「自分自身の生き方を性別にとらわれずに見つめなおすことができた」、「将来に対する考え方がしっかりした」、「拘束されることなく、自分自身の責任で学習する習慣が身についた」、「日本女子大学を卒業する誇りをもてた」、「日本女子大学の伝統の中で、控え目で強さのある魅力的な女性像を見直した」「サークル活動を自由に行えた」、「桜楓学園（卒業生の団体である桜楓会が資格取得や教養のためのコースを開設している）を利用できた」といった諸点があがっている。

なお、付属校出身者についてみると、本学の教育理念である「信念徹底・自発創生・共同奉仕の精神が身についた」、「付属からの一貫教育には特色がある」等、本学の教育方針への期待がみられる。

〈不満・改善点〉

反面、不満・改善点では、最も記述の多かったのが「カリキュラムについて」であり、次いで「設備・施設」、「学生について」、「教育制度」、「講義の内容」、「教師」、「学校の態勢」となっている。以下、順を追って具体的内容をみていこう。

「カリキュラムについて」は、「授業科目や時間割をもっと自由に決めたい」、「資格取得に追われるような授業で時間割がほぼ決まり、他の興味ある授業をとることが困難であった」、「専門科目が開設されていても、必修科目と重なり、とれないことがあった」、「選択科目の開設が少ない」、「新しい教科目を入れてほしい」、「選択科目の人数制限や抽せんをなくしてほしい」等々があり、このような記述は、概して文学部の学生に多くみられた。

「設備・施設」では、「キャンパスが狭い」、「図書館の図書が少ない」、「図書や実験器材が古く、十分学習できない」、「教室使用時間が短すぎ、遅くまで勉強できない」といった悩みが出されており、この点は家政学部の学生が多

くあげている。

「学生について」では、「女子ばかりなので、自分自身を厳しくみつめない」、「学生同士のつながりが薄く、学科としてのまとまりに欠ける」、「教師に対して甘えがある」、「女子大生として、社会の中で甘やかされ、このままでは社会の一員として通用しないと思う」といった学生自身の反省が述べられている。

「教育制度」については、「やりたい分野の学習を学科の壁を作らず、学生にやらせてほしい」、「海外留学制度（交換学生等）を設けてほしい」、「学生数に合わせ、授業数、科目数、教員数を調節してほしい」、「もっと学校側と学生側の交流をはかり、双方の意志が疎通する機会がほしい」といった点が出されている。

「講義の内容」では、「最先端の技術を取り入れた内容にしてほしい」、「女子の視点を取り入れた授業科目を増やしてほしい」、「〝女子〟向きにこだわらず、広い視野からの学習内容にしてほしい」等、多様な要望がみられる。

「教師」については、「教師との意見交換の場、交流の場を設けてほしい」、「教員数が少ない」等、主として教師との積極的な交流を望む者が多い。

「学校の態勢」については、「社会の必要に応じた人材を育ててほしい」、「伝統にとらわれすぎて、現状認識が甘い」、「新したことに挑戦してほしい」等々があげられている。そのほか、「資格取得のためのガイダンスを丁寧に行ってほしい」、「就職対策が不十分である」、「科目選択のガイダンスが不足している」等の「ガイダンス・就職指導の不足」があげられており、学習相談、情報の提供等に関して改善を求める声が高い。

四　学生生活の状況

前述のように、大学教育に対してそれぞれの期待を抱いて入学した者たちは、四年間の学生生活にどの程度の満足

感をもって卒業期を迎えたのであろうか。本項では学生自身の評価を通して、学生生活の各面についての満足度を探ってみる。なお一年生については、入学後二か月ということで、時間割や単位取得の面に絞って満足度をたずねている。

また今日、大学在学中に何らかの資格、あるいは資格取得試験のための基礎資格を取得する者が多く、大学教育の中で資格は一つの大きな意味をもっている。そこで、資格取得の状況及びそれに伴う問題点等について検討を試みる。

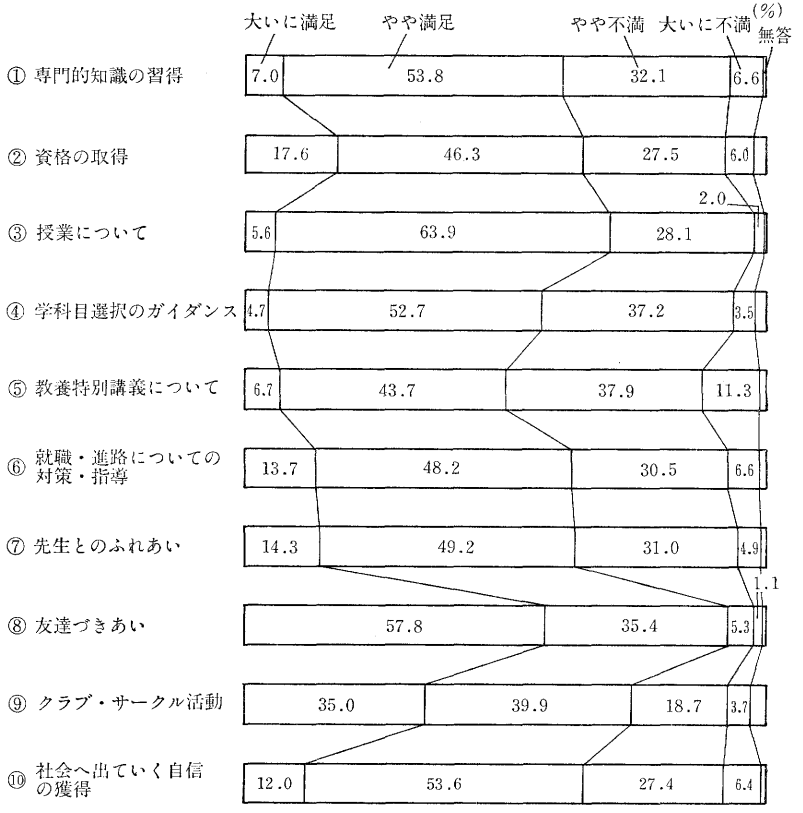
さらに、学園のレジャーランド化がいわれてかなり久しいが、クラブ・サークル活動等の課外活動の実態、購読誌・愛読書などの面からも考察を行うことにする。

＜学生生活の満足度＞

「学生生活の満足度」については、①専門知識の習得、②資格の取得、③授業について、④学科目選択のガイダンス、⑤教養特別講義について、⑥就職・進路についての対策・指導、⑦先生とのふれあい、⑧友達づきあい、⑨クラブ・サークル活動、⑩社会へ出ていく自信の獲得の一〇項目から検討を行っている。

図9に示すように、すべての項目で「大いに満足」「やや満足」と答えている者が五〇％を超えており、総合的にみると約半数以上の者が学生生活に満足しているといえよう。特に、「友達づきあい」「クラブ・サークル活動」においては「大いに満足」「やや満足」と答えた者が九三％、七五％を占め、とりわけ、「友達づきあい」では、半数以上の者が「大いに満足」と答えている。これに対して「教養特別講義について」「学科目選択のガイダンス」においては、「大いに満足」「やや満足」と答えている者が六〇％に満たず、満足度はやや低くなっている。

図9　学生生活の満足度



このような友人関係あるいはクラブ・サークル活動に対する満足度の高さは、他大学の調査においても共通にみられる傾向である。

さらに本学では、前述の入学の理由に「専攻分野がある」をあげる者が五〇%を超え、専門志向が比較的強くみられた。これに対して「専門的知識の習得」「授業について」に満足する者が六〇%、七〇%を占め、他大学に比べてその満足度はやや高く、さらに「社会へ出ていく自信の獲得」についても約六五%の者が満足しており、この面での学生たちの期待がかなり満たされたのではないかと考えられる。

また、前述の「日本女子大学に

表15 「日本女子大学に学んでよかった点」と「専門的知識の習得の満足度」

	合　計	大いに満足	やや満足	やや不満	大いに不満	無　答
合　計	1013 100.0%	70 6.9%	545 53.8%	326 32.2%	66 6.5%	6 0.6%
校風・雰囲気	268 26.5%	19 7.1%	154 57.5%	77 28.7%	16 6.0%	2 0.7%
よい友人	170 16.8%	12 7.1%	88 51.8%	59 34.7%	10 5.9%	1 0.6%
女子だけだった	74 7.3%	4 5.4%	33 44.6%	34 45.9%	2 2.7%	1 1.4%
よい教師との出会い	71 7.0%	7 9.9%	40 56.3%	20 28.2%	4 5.6%	— —
小規模	59 5.8%	1 1.7%	35 59.3%	19 32.2%	4 6.8%	— —
学習目標の達成	54 5.3%	7 13.0%	35 64.8%	9 16.7%	3 5.6%	— —
講義の内容	49 4.8%	6 12.2%	27 55.1%	16 32.7%	— —	— —
学科目選択の満足	35 3.5%	2 5.7%	23 65.7%	7 20.0%	3 8.6%	— —
自己成長の満足	32 3.2%	5 15.6%	17 53.1%	8 25.0%	2 6.3%	— —
同性の先輩・教師	10 1.0%	— —	2 20.0%	6 60.0%	1 10.0%	1 10.0%
その他	93 9.2%	4 4.3%	50 53.8%	28 30.1%	10 10.8%	1 1.1%
特になし	32 3.2%	1 3.1%	15 46.9%	12 37.5%	4 12.5%	— —
無　答	269 26.6%	17 6.3%	139 51.7%	96 35.7%	16 5.9%	1 0.4%

学んでよかった点」では、「よい教師との出会い」「講義の内容」「学科目選択の満足」「自己成長の満足」などについて、「不満に思ったり改善したい点」では、「カリキュラムについて」「講義の内容」「教師について」「ガイダンス・就職指導の不足」などの記述がみられた。そこで、これらの項目と「学生生活の満足度」との関連をみてみる。

まず「よかった点」として「学習目標の達成」「自己成長の満足」「学科目選択の満足」などをあげた者に「専門的知識の習得」に

表16 「日本女子大学に学んでよかった点」と「授業についての満足度」

	合　計	大いに満足	やや満足	やや不満	大いに不満	無　答
合　計	1013 100.0%	56 5.5%	649 64.1%	283 27.9%	20 2.0%	5 0.5%
校風・雰囲気	268 26.5%	17 6.3%	177 66.0%	66 24.6%	6 2.2%	2 0.7%
よい友人	170 16.8%	15 8.8%	99 58.2%	53 31.2%	2 1.2%	1 0.6%
女子だけだった	74 7.3%	1 1.4%	44 59.5%	27 36.5%	1 1.4%	1 1.4%
よい教師との出会い	71 7.0%	6 8.5%	55 77.5%	10 14.1%	— —	— —
小規模	59 5.8%	3 5.1%	41 69.5%	14 23.7%	1 1.7%	— —
学習目標の達成	54 5.3%	2 3.7%	35 64.8%	17 31.5%	— —	— —
講義の内容	49 4.8%	6 12.2%	33 67.3%	10 20.4%	— —	— —
学科目選択の満足	35 3.5%	6 17.1%	20 57.1%	9 25.7%	— —	— —
自己成長の満足	32 3.2%	3 9.4%	24 75.0%	5 15.6%	— —	— —
同性の先輩・教師	10 1.0%	— —	6 60.0%	4 40.0%	— —	— —
その他	93 9.2%	2 2.2%	60 64.5%	24 25.8%	5 5.4%	2 2.2%
特になし	32 3.2%	1 3.1%	15 46.9%	16 50.0%	— —	— —
無　答	269 26.6%	10 3.7%	172 63.9%	79 29.4%	8 3.0%	— —

ついて満足する者がやや多くみられる（表15参照）。同様に「よい教師との出会い」「講義の内容」「学科目選択の満足」「自己成長の満足」などをあげた者に「授業について」満足する者が多い（表16参照）。また当然のことながら、よかった点として「よい教師との出会い」をあげた者に「教師とのふれあい」に満足している者が多くなっている（表17参照）。

上記の結果より、学科目選択が自分の希望通りになって満足している者では、「専門的知識の習得」や「授

表17 「日本女子大学に学んでよかった点」と「先生とのふれあいの満足度」

	合　計	大いに満足	やや満足	やや不満	大いに不満	無　答
合　計	1013 100.0%	144 14.2%	498 49.2%	314 31.0%	49 4.8%	8 0.8%
校風・雰囲気	268 26.5%	47 17.5%	132 49.3%	73 27.2%	14 5.2%	2 0.7%
よい友人	170 16.8%	22 12.9%	94 55.3%	45 26.5%	7 4.1%	2 1.2%
女子だけだった	74 7.3%	9 12.2%	36 48.6%	27 36.5%	1 1.4%	1 1.4%
よい教師との出会い	71 7.0%	28 39.4%	29 40.8%	14 19.7%	— —	— —
小規模	59 5.8%	12 20.3%	26 44.1%	18 30.5%	3 5.1%	— —
学習目標の達成	54 5.3%	9 16.7%	26 48.1%	16 29.6%	3 5.6%	— —
講義の内容	49 4.8%	4 8.2%	26 53.1%	16 32.7%	3 6.1%	— —
学科目選択の満足	35 3.5%	6 17.1%	16 45.7%	12 34.3%	1 2.9%	— —
自己成長の満足	32 3.2%	3 9.4%	14 43.8%	12 37.5%	3 9.4%	— —
同性の先輩・教師	10 1.0%	1 10.0%	3 30.0%	4 40.0%	2 20.0%	— —
その他	93 9.2%	12 12.9%	38 40.9%	32 34.4%	10 10.8%	1 1.1%
特になし	32 3.2%	5 15.6%	12 37.5%	12 37.5%	3 9.4%	— —
無　答	269 26.6%	23 8.6%	148 55.0%	88 32.7%	8 3.0%	2 0.7%

業について」も満足する者が多い点が注目される。

これに対して、「不満に思ったり、改善したい点」として「講義の内容」「教師について」「カリキュラムについて」などをあげている者に「授業について」の不満がやや強くみられる。同じく「ガイダンス・就職指導の不足」をあげている者に「就職・進路についての対策・指導」に関する不満がかなり強いことが分かる（表18参照）。さらに「教師について」「人数が多すぎる」（クラス・ゼミ等）をあげている者に「先生と

表18「不満に思ったり，改善したい点」と「就職・進路についての対策・指導の満足度」

	合　計	大いに満足	やや満足	やや不満	大いに不満	無　答
合　計	1013 100.0%	139 13.7%	487 48.1%	309 30.5%	66 6.5%	12 1.2%
カリキュラムについて	177 17.5%	31 17.5%	82 46.3%	50 28.2%	14 7.9%	— —
設備・施設	167 16.5%	22 13.2%	78 46.7%	53 31.7%	12 7.2%	2 1.2%
学生について	137 13.5%	17 12.4%	65 47.4%	45 32.8%	8 5.8%	2 1.5%
教育制度について	92 9.1%	23 25.0%	44 47.8%	20 21.7%	5 5.4%	— —
講義の内容	88 8.7%	10 11.4%	40 45.5%	30 34.1%	6 6.8%	2 2.3%
教師について	58 5.7%	7 12.1%	24 41.4%	19 32.8%	7 12.1%	1 1.7%
学校の態勢	50 4.9%	10 20.0%	14 28.0%	23 46.0%	3 6.0%	— —
授業外の学生生活	49 4.8%	4 8.2%	28 57.1%	13 26.5%	4 8.2%	— —
職員について	36 3.6%	4 11.1%	17 47.2%	11 30.6%	4 11.1%	— —
ガイダンス・就職指導	30 3.0%	3 10.0%	6 20.0%	9 30.0%	12 40.0%	— —
学校全体の雰囲気	27 2.7%	1 3.7%	13 48.1%	10 37.0%	1 3.7%	2 7.4%
人数が多い	17 1.7%	3 17.6%	10 58.8%	3 17.6%	1 5.9%	— —
そ の 他	45 4.4%	9 20.0%	25 55.6%	8 17.8%	2 4.4%	1 2.2%
特になし	75 7.4%	16 21.3%	40 53.3%	18 24.0%	1 1.3%	— —
無　答	280 27.6%	24 8.6%	142 50.7%	92 32.9%	18 6.4%	4 1.4%

表19　時間割・単位取得の満足度

	大いに満足	やや満足	やや不満	大いに不満
合　計	14 1.4%	281 27.4%	633 61.8%	97 9.5%

表20　不満の理由（M.A.）

	必修が多い	希望科目がない	受けたい科目不可	受けたい先生不可	ガイダンス不足	その他	無　答
合　計	170 23.3%	164 22.5%	437 59.9%	298 40.8%	58 7.9%	92 12.6%	4 0.5%

のふれあい」に不満をもつ者が多い。

以上のように、講義、教師との出会い、カリキュラム、ガイダンス・就職指導等の大学教育の諸面が「学生生活の満足度」とかなり深く関連しているように思われる。前述の不満に思ったり、改善したい点を少しでも改めていくことが、友人関係、クラブ・サークル活動以外での学生生活の満足度をより高めることになると考える。

さらに附属校出身者についてみるならば、すべての項目において、満足度が大学からの入学者に比べて高くなっている。なかでも「学科目選択のガイダンス」「友達づきあい」「クラブ・サークル活動」「社会へ出ていく自信の獲得」等の面で満足度が高い傾向がみられる。

次に一年生には、入学後二か月を経過した時点なので、時間割や単位取得の面に絞って満足度をたずねている。

表19に示すように、これらの点について、「大いに満足」「やや満足」と答えている者は二八・八%にすぎず、七割以上の者が何らかの不満を感じていることが分かる。特に、必修の多い学科で不満度が高い傾向がみられる。

不満の理由としては、表20に示すように、「時間割の都合で受けたい科目が受けられない」と答えている者が最も多く（五九・九%）、「時間割の都合で受けたい先生の授業を受けられない」と答えている者がこれについでいる（四〇・八

%)。さらに「必修が多すぎる」「自分の希望する受講科目がない」と答えている者がそれぞれ約二〇%である。

具体的には、「一般教養の授業で抽選に落ちてしまい、時間割の都合上自分の興味のない授業を取らなければならなくなった」り、「一般教養科目の多さと時間割の関係で、自分に興味のない科目も取らざるをえない」ことなどへの不満や、「必修が大変でなかなか自分の時間がもてない」、「予習が非常に大変」で「専門以外の勉強ができない」、「教職をとった場合の単位取得の仕方が説明をきいてもよく分からなかった」などの不満があげられている。

以上のように、時間割や単位取得に対する一年生の不満は予想以上に大きい。前述の四年生の場合、学科目選択に満足している者では専門的知識の習得や授業について比較的満足度が高く、逆にカリキュラムや学科目選択に不満であった者に授業に対する不満がやや強くみられた。

一年生では、本学の教育方針、授業等についての期待も大きいだけに、この不満がその後の学生生活にどのような影響を及ぼすかが懸念される。

これらの問題の背景には、近年の学生数の増加、学生の要求の多様化等に応じた体制が一校だけではとりにくくなっている状況があるものと推察される。

国際婦人年の世界行動計画をうけて、昭和五二年に策定された国内行動計画（総理府婦人問題企画推進本部）では、「高等教育機関の間の単位の相互認定、累積加算制度を検討するなど、大学教育を弾力化する方策について検討する」との考え方が示されている。上記のような状況に対応する方策として、他大学との単位互換制度の検討が急がれよう。

本調査においても、この制度の利用について一年生にたずねているが、「制度があれば利用したい」と考えている者が五四・三%と半数を超えている。

〈資　格〉

前述のように、約一割の者が学科・専攻の選択理由として資格取得をあげている。では実際に、本学在学中にどれくらいの学生が、どのような資格を取得しているのであろうか。本学在学中の資格取得について、学内資格、学外資格の両面から検討を行う。

表21に示すように、「資格の取得状況」については、「学内資格と学外資格の両方を取得している者」が最も多く（三七・四％）、「学内資格だけを取得している者」（二五・六％）、「学外資格だけを取得している者」（一六・二％）がこれについでおり、「全く資格を取得していない者」は一九・九％にすぎない。しかし、学科による差が大きく、食物学科や児童学科では資格取得者が九〇％を超えている。これに対して、住居学科や物理専攻などでは資格取得者はやや少なく、特に住居学科では学内資格の取得者は約一〇％にすぎない。

前述の資格取得の満足度は、概して資格取得の可能性の多い学科に高く、逆にその可能性の少ない学科では低い傾向がみられる。このことは、入学当初には資格取得を目指していなかった者でも、在学期間中に何らかの資格を取得したいと望む者が多く、それが満たされなかった時に不満が強くなると考えられる。

なお一年生では、この調査の時点で本学在学中に資格を取得したいと考えている者は八一・五％にものぼり、資格志向が強くみられる。

では、「学内資格」としてはどのような種類の資格を取得しているのであろうか。

表22に示すように、「中学校・高等学校教諭」の免許を取得している者が最も多く（五四・四％）、「小学校教諭」「学芸員」「幼稚園教諭」の資格・免許を取得している者がそれぞれ一五％前後でこれについでいる。以下「司書」「社会福祉主事（任用資格）」「衣料管理士」「栄養士」「管理栄養士」等である。また学科の特色を反映して、理学系

表21　資格の取得状況

	合　計	取得しない	学内で取得した	学外で取得した	両方で取得した	無　答
合　計	1013 100.0%	202 19.9%	259 25.6%	164 16.2%	379 37.4%	9 0.9%
児　童	47 4.6%	3 6.4%	20 42.6%	1 2.1%	23 48.9%	— —
食　物	33 3.3%	1 3.0%	14 42.4%	— —	17 51.5%	1 3.0%
管理栄養士	24 2.4%	— —	6 25.0%	— —	18 75.0%	— —
住　居	88 8.7%	49 55.7%	5 5.7%	27 30.7%	4 4.5%	3 3.4%
被　服	64 6.3%	10 15.6%	13 20.3%	3 4.7%	38 59.4%	— —
物　理	38 3.8%	14 36.8%	6 15.8%	10 26.3%	7 18.4%	1 2.6%
数　学	54 5.3%	16 29.6%	13 24.1%	12 22.2%	13 24.1%	— —
化　学	23 2.3%	3 13.0%	7 30.4%	4 17.4%	9 39.1%	— —
理　二	55 5.4%	15 27.3%	15 27.3%	9 16.4%	15 27.3%	1 1.8%
家政経済	76 7.5%	12 15.8%	8 10.5%	26 34.2%	28 36.8%	2 2.6%
国　文	116 11.5%	13 11.2%	45 38.8%	13 11.2%	45 38.8%	— —
英　文	127 12.5%	20 15.7%	21 16.5%	38 29.9%	48 37.8%	— —
史　学	62 6.1%	9 14.5%	19 30.6%	7 11.3%	27 43.5%	— —
社会福祉	91 9.0%	19 20.9%	21 23.1%	9 9.9%	42 46.2%	— —
教　育	115 11.4%	18 15.7%	46 40.0%	5 4.3%	45 39.1%	1 0.9%

表22　学内資格

	合　計	教職（中高）	教職（小）	教職（幼）	司書教諭	司書	学芸員
合　計	638 100.0%	347 54.4%	100 15.7%	83 13.0%	11 1.7%	53 8.3%	87 13.6%
児童	43 6.7%	1 2.3%	34 79.1%	37 86.0%	2 4.7%	2 4.7%	—
食物	31 4.9%	15 48.4%	—	—	—	1 3.2%	—
管理栄養士	24 3.8%	—	—	—	—	—	—
住居	9 1.4%	1 11.1%	—	—	—	—	8 88.9%
被服	51 8.0%	26 51.0%	—	—	—	1 2.0%	8 15.7%
物理	13 2.0%	12 92.3%	—	—	—	—	2 15.4%
数学	26 4.1%	26 100.0%	—	—	—	—	—
化学	16 2.5%	16 10.0%	—	—	—	—	—
理二	30 4.7%	24 80.0%	—	—	—	—	7 23.3%
家政経済	36 5.6%	19 52.8%	—	—	1 2.8%	11 30.6%	10 27.8%
国文	90 14.1%	70 77.8%	—	—	6 6.7%	17 18.9%	17 18.9%
英文	69 10.8%	69 100.0%	—	—	—	—	1 1.4%
史学	46 7.2%	27 58.7%	—	—	—	9 19.6%	18 39.1%
社会福祉	63 9.9%	21 33.3%	—	—	1 1.6%	8 12.7%	11 17.5%
教育	91 14.3%	20 22.0%	66 72.5%	46 50.5%	1 1.1%	4 4.4%	5 5.5%

	管理栄養士	栄養士	衣料管理士	保母	社会福祉主事	社会教育主事
合　計	24 3.8%	25 3.9%	27 4.2%	10 1.6%	40 6.3%	1 0.2%
児童	—	—	—	—	—	—
食物	—	24 77.4%	—	—	—	—
管理栄養士	24 100.0%	1 4.2%	—	—	—	—
住居	—	—	—	—	—	—
被服	—	—	27 52.9%	—	—	—
物理	—	—	—	—	—	—
数学	—	—	—	—	—	—
化学	—	—	—	—	—	—
理二	—	—	—	—	—	—
家政経済	—	—	—	—	—	—
国文	—	—	—	—	—	—
英文	—	—	—	—	—	—
史学	—	—	—	—	—	—
社会福祉	—	—	—	10 15.9%	40 63.5%	—
教育	—	—	—	—	—	1 1.1%

資料1　本学で取得できる教員資格

専攻分野に応じて教職に必要な単位を取得すれば，次の教員資格が得られる。

(1)　中学校教諭1級普通免許状
　高等学校教諭2級普通免許状
　　児童学科……家庭
　　食物学科(食物学専攻)……家庭又は保健
　　住居学科……家庭
　　被服学科……家庭
　　家政理学科一部(物理学系)……理科
　　家政理学科一部(化学系)……理科
　　家政理学科一部(数学系)……数学
　　家政理学科二部……理科
　　家政経済学科……家庭又は社会
　　国文学科……国語
　　英文学科……英語
　　史学科……社会
　　社会福祉学科……社会
　　教育学科……社会

(2)　幼稚園教諭1級普通免許状
　小学校教諭1級普通免許状
　　児童学科，教育学科

※児童学科・教育学科においては，幼・小1級免許状，あるいは中学1級・高校2級の免許状のうちいずれかを取得できる。

の学科及び国文・英文学科では「中学校・高等学校教諭」が多く、児童・教育学科では「幼稚園教諭」「小学校教諭」、食物学科では「栄養士」「管理栄養士」、被服学科に「衣料管理士」、社会福祉学科に「社会福祉主事」等の資格取得者が多くみられる（資料1、資料2参照）。

同様に一年生においても、表23に示すように「教員免許（幼小・中高含）」の取得を考えている者が最も多く（六三・四%）、特に児童・教育学科では九〇%を超えている。「学芸員」「司書」がそれぞれ約一〇%でこれについでおり、以下「栄養士」「衣料管理士」「管理栄養士」等である。

以上のように、本学における資格取得は、教員、栄養士等の従来女性向きとされてきた分野に集中している。特に教員免許の取得者が際立って多く、この傾向は一年生にも共通している。

ちなみに、昨年七月の文部省の「国立の教員養成大学・学部の今後の整備に関する調査研究会議」報告をみると、児童・生徒数減少に伴う教師過剰時代に対応するため、教員養成を抑制する施策として、「教員養成大学・学部の入

学定員を一部他学部に振り替える」、「教員以外の職業分野へも進出することを想定した課程を設置する」、「教員免許状の取得を前提としないコースを設置する」などが盛り込まれている。

このような国の教員養成をめぐる施策の転換は、本学にとっても今後検討を要する課題であり、後述する教員免許取得者の職業選択の現状をもふまえて何らかの対応が必要とされよう。

次に「学外資格」としてはどのような種類の資格を取得しているのであろうか。

ここでは「自動車免許」を取得している者が最も多く（六九・二％）、「実用英語検定」（三一・〇％）、「秘書」（二五・九％）の資格を取得している者がこれについでいる。以下「タイプ」「趣味的なもの（華道、茶道、エレクトーン他）」「スポーツ指導者」「情報処理関係」等である。

また、一年生では、「実用英語検定」が最も多く、「自動車免許」がこれについでいる。以下「秘書」「趣味的なもの」「タイプ」「情報処理関係」等である。内容的には四年生の場合と似た傾向にあるが、時代を反映してか「情報処理関係」が増加している。

さらに一年生に、上記の学外資格をどのような方法で取得しようと考えているのかをたずねてみると、

資料2　本学で取得できるその他の資格

規定の学科を修めることによって，次の資格を取得することができる。

(1) 図書館司書（司書課程科目の履修を要する）

(2) 学校図書館司書教諭（教職課程科目及び司書課程科目の履修を要する）

(3) 博物館学芸員（博物館学芸員課程科目の履修を要する）

このほか，学科により，規定の科目を修めることによって，次の資格などを取得することができる。

食物学科（管理栄養士専攻）……栄養士
……食品衛生管理者，食品衛生監視員
被服学科……衣料管理士
社会福祉学科……社会福祉主事，児童福祉司
教育学科……社会教育主事補

また，学科により，次の資格取得に際し，試験の一部が免除される。

食物学科（管理栄養士専攻）……管理栄養士
社会福祉学科……保母

表23　学内資格（1年）

	合　計	教職	司書	学芸員	管理栄養士	栄養士	衣料管理士	保母	社会福祉主事	その他	無答
合　計	837 100.0%	531 63.4%	80 9.6%	81 9.7%	34 4.1%	52 6.2%	36 4.3%	18 2.2%	5 0.6%	5 0.6%	136 16.2%
児童	56 6.7%	55 98.2%	5 8.9%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
食物学	49 5.9%	28 57.1%	1 2.0%	1 2.0%	— —	4.8 98.0%	— —	— —	— —	— —	— —
管理栄養士	41 4.9%	1 2.4%	1 2.4%	— —	34 82.9%	4 9.8%	— —	— —	— —	2 4.9%	2 4.9%
住居	39 4.7%	2 5.1%	— —	3 7.7%	— —	— —	1 2.6%	— —	— —	— —	34 87.2%
被服	60 7.2%	33 55.0%	5 8.3%	9 15.0%	— —	— —	35 58.3%	— —	— —	1 1.7%	2 3.3%
物理	30 3.6%	21 70.0%	4 13.3%	3 10.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	7 23.3%
数学	35 4.2%	24 68.6%	1 2.9%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	11 31.4%
化学	25 3.0%	19 76.0%	— —	2 8.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	6 24.0%
理二	52 6.2%	31 59.6%	4 7.7%	13 25.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	10 19.2%
家政経済	51 6.1%	39 76.5%	10 19.6%	3 5.9%	— —	— —	— —	— —	— —	1 2.0%	5 9.8%
国文	98 11.7%	71 72.4%	22 22.4%	9 9.2%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	10 10.2%
英文	91 10.9%	65 71.4%	1 1.1%	5 5.5%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	22 24.2%
史学	62 7.4%	41 66.1%	7 11.3%	30 48.4%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	3 4.8%
社会福祉	72 8.6%	32 44.4%	9 12.5%	2 2.8%	— —	— —	— —	18 25.0%	5 6.9%	1 1.4%	19 26.4%
教育	76 9.1%	69 90.8%	10 13.2%	1 1.3%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	5 6.6%

「専門学校や各種学校に通う」と答えている者が最も多く、「独学」と答えている者がほぼ同数でこれについでいる。以下「各種の講座の受講」「通信講座の受講」をあげる者もわずかながらみられる。

上記の結果により、本学においても、大学の授業だけでは習得しにくい様々な資格を取得するために、さらに別の学校に通って学習することを希望している学生たちがみられ、いわゆるダブルスクール族志向の傾向がうかがえる。

今や、これらのダブルスクール族が専門学校生の二〇％を占めるまでに急増しており、取得しようとする資格の分野は、第一は語学、第二は商業実務分野、第三は情報処理関係といわれている。

このような状況を背景として、とりわけ英検ブームといわれる中で、本学でも「実用英語検定」の人気が高く、「情報処理関係」も増加の傾向にあることは興味深い。

では、取得した資格・免許は、実際の職業選択にどの程度生かされているのであろうか。

「取得資格」と「職種」との関連をみると表24に示すように、「中学校・高等学校教諭の免許取得者では、「事務職」を選択する者が最も多く（四二・五％）、「専門技術職」（一九・四％）がこれについでおり、「教育職」は「サービス業」とともにわずか一〇％にすぎない。

これに対して、「小学校教諭」及び「幼稚園教諭」の免許取得者では、「教育職」を選択する者が最も多く、それぞれ三五％を超えており、「中学校・高等学校教諭」の場合よりは取得資格を生かした職業選択が多くみられる。

しかし「教育職」の場合、幼小、中高を問わず、調査の時点で内定している者はごくわずかであり、実際の就職率はさらに低くなることが予想される。

また、「司書」や「学芸員」の資格取得者では、これらの資格を生かした職業選択は残念ながら調査の時点ではみられない。これは希望しても就職の機会が乏しいことや、どこでどのような求人があるのか情報が得られないといっ

表24 「学内資格」と「職種」

	合　計	教育職	事務職	専門技術職	研究専門職	サーヴィス業	公務・福祉関係	芸能	未定	無答
合　計	594 100.0%	73 12.3%	242 40.7%	100 16.8%	43 7.2%	56 9.4%	21 3.5%	17 2.9%	10 1.7%	32 5.4%
教職（中高）	320 53.9%	33 10.3%	136 42.5%	62 19.4%	21 6.6%	32 10.0%	6 1.9%	9 2.8%	5 1.6%	16 5.0%
教職（小）	98 16.5%	38 38.8%	33 33.7%	9 9.2%	— —	7 7.1%	2 2.0%	— —	1 1.0%	8 8.2%
教職（幼）	80 13.5%	29 36.3%	29 36.3%	8 10.0%	— —	7 8.8%	— —	— —	1 1.3%	6 7.5%
司書教諭	11 1.9%	1 9.1%	9 81.8%	— —	— —	1 9.1%	— —	— —	— —	— —
司書	52 8.8%	1 1.9%	30 57.7%	11 21.2%	— —	3 5.8%	3 5.8%	2 3.8%	— —	2 3.8%
学芸員	79 13.3%	3 3.8%	32 40.5%	15 19.0%	5 6.3%	7 8.9%	3 3.8%	5 6.3%	2 2.5%	7 8.9%
管理栄養士	21 3.5%	— —	7 33.3%	— —	11 52.4%	3 14.3%	— —	— —	— —	— —
栄養士	22 3.7%	— —	3 13.6%	5 22.7%	6 27.3%	4 18.2%	— —	1 4.5%	2 9.1%	1 4.5%
衣料管理士	26 4.4%	1 3.8%	11 42.3%	7 26.9%	3 11.5%	3 11.5%	— —	— —	1 3.8%	— —
保母	10 1.7%	1 10.0%	4 40.0%	— —	— —	— —	5 50.0%	— —	— —	— —
社会福祉主事	35 5.9%	— —	18 51.4%	— —	— —	3 8.6%	10 28.6%	1 2.9%	— —	3 8.6%
社会教育主事	1 0.2%	— —	1 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

たことが影響しているものと思われる。

さらに、「管理栄養士」及び「栄養士」の資格取得者では、ともに「研究専門職」（栄養士を含む）が最も多いが、栄養士を選択する者だけについてみると、前者でも二割弱、後者では一割にもみたない。

また、「社会福祉主事」任用資格取得者では、「事務職」が最も多いが（五一・四%）、「公務・福祉関係」もこれについている（二八・六%）。「公務・福祉関係」は、ソーシャルワーカー、ケース・ワーカー、保護観察職員など福祉関係の専門職で占められており、公務員の福祉職のように社会福祉主事資格を生かした職場選択もみられる。

以上のように、取得資格が職業選択に比較的生かされているのは、幼稚園・小学校教諭、社会福祉主事、保母、管理栄養士などであり、他は全く生かされていないか、生かされていてもごく一部にすぎない。

なお、「学外資格」と「職種」との関連をみると、「実用英語検定」「タイプ」「秘書」等の資格取得者では、共に「事務職」を選択する者が多くみられる。

それでは、各種の資格取得者たちは職業を継続することについてどのように考えているのであろうか。

「学内資格」と「職業継続意志」との関連をみると、表25に示すように、「中学校・高等学校教諭」「小学校教諭」等の免許取得者では、「継続型」と「中断型」が同程度に多く、次いで子どもができるまでの「子ども型」、結婚するまでの「結婚型」の順である。

これに対して、「幼稚園教諭」の免許取得者では「中断型」が最も多く、次いで「子ども型」「継続型」「結婚型」の順で、「小学校教諭」等の場合とは職業継続意志に若干違いがみられる。

また「司書」資格取得者では、「子ども型」と「継続型」が共に多く、「中断型」がこれについでおり、継続型と短期就労型の二極化がみられる。

表25 「学内資格」と「職業継続意志」

	合計	結婚するまで	子ども	継続	中断	もたない	考えていない	その他	無答
合計	638 100.0%	68 10.7%	125 19.6%	144 22.6%	163 25.5%	3 0.5%	107 16.8%	22 3.4%	6 0.9%
教職（中高）	347 54.4%	39 11.2%	68 19.6%	81 23.3%	82 23.6%	1 0.3%	57 16.4%	17 4.9%	2 0.6%
教職（小）	100 15.7%	5 5.0%	23 23.0%	27 27.0%	27 27.0%	— —	16 16.0%	1 1.0%	1 1.0%
教職（幼）	83 13.0%	7 8.4%	20 24.1%	18 21.7%	21 25.3%	— —	15 18.1%	1 1.2%	1 1.2%
司書教諭	11 1.7%	2 18.2%	3 27.3%	2 18.2%	3 27.3%	— —	1 9.1%	— —	— —
司書	53 8.3%	4 7.5%	15 28.3%	14 26.4%	9 17.0%	1 1.9%	9 17.0%	1 1.9%	— —
学芸員	87 13.6%	7 8.0%	17 19.5%	16 18.4%	19 21.8%	1 1.1%	23 26.4%	2 2.3%	2 2.3%
管理栄養士	24 3.8%	5 20.8%	2 8.3%	3 12.5%	9 37.5%	— —	4 16.7%	1 4.2%	— —
栄養士	25 3.9%	4 16.0%	4 16.0%	4 16.0%	8 32.0%	1 4.0%	3 12.0%	1 4.0%	— —
衣料管理士	27 4.2%	6 22.2%	1 3.7%	6 22.2%	9 33.3%	— —	4 14.8%	— —	1 3.7%
保母	10 1.6%	— —	2 20.0%	5 50.0%	2 20.0%	— —	— —	1 10.0%	— —
社会福祉主事	40 6.3%	1 2.5%	5 12.5%	9 22.5%	13 32.5%	— —	7 17.5%	4 10.0%	1 2.5%
社会教育主事	1 0.2%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	1 100.0%

表26　サークル参加状況

	合　計	学内サークルのみ参加	学外サークルのみ参加	両方に参加	参加せず	無　答
合　計	1013 100.0%	247 24.4%	491 48.5%	133 13.1%	134 13.2%	8 0.8%

その他の資格取得者（保母を除く）では、「中断型」が最も多くなっている。

上記の結果から「中学校・高等学校教諭」、「小学校教諭」、「司書」の一部及び「保母」の資格・免許取得者では職業継続志向が比較的強いが、その他の資格取得者では中断あるいは短期就労志向の方が強いといえよう。

また「学外資格」と「職業継続意志」との関連をみると、全体的に「中断型」が最も多く、次いで「子ども型」、「継続型」の順である。

＜クラブ・サークル活動＞

学生生活において、「友達づきあい」についで満足度が高かったクラブ・サークル活動について、「参加状況」「参加サークルの種類」及び「参加理由」等を通して、現代女子学生のクラブ・サークル活動の状況を探ってみよう。

まず、クラブ・サークル活動への参加状況をみると、表26に示すように、全体の八六%の者が何らかのクラブ・サークルに参加している。しかも「学外サークル」に参加している者が多く（六一・六%）、「学内サークル」に参加している者（三七・五%）を大きく上回っている。また、学内・学外両方のサークルに参加している者も一〇%を超えている。

特に、附属校出身者に学外サークルへ参加する者が多い。

一年生では、クラブ・サークル活動に参加している者は九〇%を超え、しかも「学外サークル」に参加している者が七二・七%と、学外サークル志向が一段と強まっている。これに対して、「学

表27　学内サークルの種類

	合　計	人文・宗教関係	社会・教育関係	自然科学関係	芸術・芸能	体育・スポーツ	その他	無　答
合　計	380 100.0%	20 5.3%	43 11.3%	8 2.1%	163 42.9%	135 35.5%	9 2.4%	2 0.5%

表28　学外サークルの種類

	合　計	人文・宗教関係	社会・教育関係	自然科学関係	芸術・芸能	体育・スポーツ	その他	無　答
合　計	624 100.0%	13 2.1%	32 5.1%	25 4.0%	92 14.7%	435 69.7%	25 4.0%	2 0.3%

内サークル」に参加している者は前者の半数以下である（三三・八%）。

いつごろから学外サークル参加者が学内サークル参加者を上回るようになったのか、これは女子大学だけの現象なのかなどの点については明らかではないが、後述するクラブ・サークル活動への参加理由と深く関連しているものと考えられる。

次に、参加しているクラブ・サークルの種類をみると、「学内サークル」では表27に示すように、「芸術・芸能関係」のサークルに参加している者が最も多く（四二・九%）、「体育・スポーツ関係」（三五・五%）、「社会・福祉・教育関係」（一一・三%）がこれについでいる。

これに対して、「学外サークル」では、表28に示すように、「体育・スポーツ関係」が際立って多く（六九・七%）、「芸術・芸能関係」（一四・七%）がこれについでいる。

こうしてみると、本学学生に人気のあるサークルは「芸術・芸能関係」と「体育・スポーツ関係」のサークルに二分される状況にある。特に、学外サークルにおける「体育・スポーツ関係」サークルの人気の高さは、一年生にも共通しており、その中でもとりわけテニスサークルの多いのが目立った。このような傾向も、次に述べる「参加理由」と関連が深いと思われる。

クラブ・サークル活動への参加理由をみると、表29に示すように、「学生生活を豊かにするため」と答える者が最も多く（四四・八%）、ついで「趣味と一致するか

表29　サークル参加理由（M.A.）

	合計	友人がほしい	進路に直結する	自分の場がほしい	楽しみ	趣味と一致する	競技への参加	社会問題	特技・技術の向上
合計	871 100.0%	227 26.1%	17 2.0%	36 4.1%	253 29.0%	316 36.3%	13 1.5%	5 0.6%	77 8.8%

知識・教養	身体を鍛える	団体生活の魅力	自己の成長	豊かな学生生活	授業にないもの	サークルの雰囲気	その他	無答
30 3.4%	78 9.0%	16 1.8%	68 7.8%	390 44.8%	71 8.2%	117 13.4%	8 0.9%	3 0.3%

ら」（三六・三%）、「楽しみのため」（二九・〇%）、「友人がほしいから」（二六・一%）などをあげる者が多い。なお、友人の中には当然異性の友人も含まれているものと思われる。また、少数ながら、「自己の成長のため」あるいは「授業では得られないものを補うため」といった理由もみられる。しかし、全体としては受験などから解放されて、豊かで楽しい学生生活を過ごすためにサークルに参加している様子がうかがえる。逆に、このような参加理由であれば、学外サークルのしかもスポーツ関係サークルに人気が集中することもうなずけよう。

次に一年生では、サークル参加理由として四年生同様「学生生活を豊かにするため」と答える者が最も多く（四一・二%）、ついで「友人がほしいから」（三三・四%）、「趣味と一致するから」（二六・六%）、「楽しみのため」（二六・三%）などをあげる者が多い。全体的には四年生と類似の傾向を示すが、入学して間もないせいか、友人を得ることがサークル参加の大きな理由の一つになっていることが特徴的である。

では、学外サークルのみの参加者、学内サークルのみの参加者、両方のサークルへの参加者では、それぞれのサークルへの参加理由に違いがみられるであろうか。

表30に示すように、特徴的なのは、学内サークルのみの参加者では、「大学内に自分の場がほしいから」「知識・教養を身につけたいから」「団体生活に魅力を感じて」「サークル・クラブ・部の雰囲気がよかったから」などの理由をあげる者が、わずかずつながら他のグループに比して多くみられる。これに対して、学外サークルのみの参加者で

表30 「サークル参加状況」と「サークル参加理由」

	合　計	友人がほしい	進路に直結する	自分の場がほしい	楽しみ	趣味と一致する	競技への参加	社会問題	特技・技術の向上	知識・教養	身体を鍛える	団体生活の魅力	自己の成長	豊かな学生生活	授業にないもの	サークルの雰囲気	その他	無答
合　計	871 100.0%	227 26.1%	17 2.0%	36 4.1%	253 29.0%	316 36.3%	13 1.5%	5 0.6%	77 8.8%	30 3.4%	78 9.0%	16 1.8%	68 7.8%	390 44.8%	71 8.2%	117 13.4%	8 0.9%	3 0.3%
学内で参加	247 28.4%	41 16.6%	5 2.0%	23 9.3%	58 33.5%	84 34.0%	3 1.2%	1 0.4%	24 9.7%	17 6.9%	27 10.9%	9 3.6%	20 8.1%	95 38.5%	22 8.9%	53 21.5%	4 1.6%	— —
学外で参加	491 56.4%	160 32.6%	9 1.8%	7 1.4%	159 32.4%	166 33.8%	7 1.4%	2 0.4%	36 7.3%	6 1.2%	46 9.4%	6 1.2%	32 6.5%	242 49.3%	38 7.7%	50 10.2%	4 0.8%	3 0.6%
両方に参加	133 15.3%	26 19.5%	3 2.3%	6 4.5%	36 27.1%	66 49.6%	3 2.3%	2 1.5%	17 12.8%	7 5.3%	5 3.8%	1 0.8%	16 12.0%	53 39.8%	11 8.3%	14 10.5%	— —	— —

は、「友人がほしいから」「楽しみのため」「学生生活を豊かにするため」などの理由をあげる者が多く、両者への参加者では、「趣味と一致するから」「自分の特技・技術を向上させるため」「自己の成長のため」などの理由をあげる者が若干多くなっている。

つまり、学外サークルのみの参加者では、楽しみとしてのサークルの色彩がより鮮明であり、学内サークルのみの参加者及び両者への参加者では、楽しみに加えて、知識・教養志向、特技・技術の向上、あるいは団体生活を通じて自己の成長を図ろうとする姿勢が若干強く感じられる。

以上のように、九割近い学生が、豊かで楽しい学生生活等を期待してクラブ・サークル活動に参加しており、その活動に対する満足度も高い。現在、本学には、五三のクラブと三〇に及ぶ同好会があるが、実際には、学内サークルよりは学外サークル、しかもスポーツ関係や芸術・芸能関係サークルの人気が高い。

前述のように、大学におけるクラブ・サークル活動は非常に盛んであるが、大学以外の場での活動についてはどうであろうか。

クラブ・サークル活動の場合とは対照的に、参加している者は一七%とごく少数であるが、学科の性格を反映して、参加者は社会福祉学科に比較的多い（三九・六%）。

活動の内容としては、「スポーツ」が最も多く（二五・〇%）、「社会奉仕活動」（一七・四%）、「音楽・演劇関係」（一六・九%）などがこれについでいる。参加者が最も多かった社会福祉学科では「社会奉仕活動」が四割以上を占め、とりわけ障害児のためのボランティア活動が多いのが目立っている。

一年生では、大学以外の場での活動に参加している者は八・三%とさらに少ない。活動を開始した時期は「高校時代から」が最も多いが、中には「小学校時代から」ずっと継続している者もみられる。

このように、大学以外の場での活動は、個人的な学習活動を含めても、概して活発であるとはいえず、特にボランティア活動などの社会活動への参加が予想以上に少ない。

以上、大学のクラブ・サークル活動及び大学以外の場での活動についてみてきた。大学のレジャーランド化がいわれて久しいが、クラブ・サークル活動は学生生活の中でかなり大きなウエイトを占め、その比重は年々増加しているように思われる。クラブ・サークル活動を通じての多くの友人・先輩等との出会いや様々な経験が、今日の学生生活の重要な側面となっているとはいえ、その活動はあまりに体育・スポーツあるいは芸術・芸能関係に片寄っている。これは、多面的な活動の機会や場に関する情報が不十分なことにも一因があるように思われる。例えば、大学以外の場での活動がふるわない中で、ボランティア活動などに積極的に参加する者が比較的多くみられた社会福祉学科では、授業や実習等を通して、これらの活動に関する情報の提供や活動の場の紹介がなされている。従って、これらの点についての方策が講じられるならば、活動の範囲も広がり、異なった立場の人々との交流を深めることもできるのではないだろうか。それらの経験がさらにクラブ・サークル活動に反映していくことが期待される。

〈購読誌・愛読書〉

昨今、若い世代の活字離れがいわれているが、女子学生たちが日ごろ愛読している雑誌・本はどのようなものであろうか。

雑誌についてみると、時代を反映して多種多様なものが登場するが、中でも「ＪＪ」（ファッション誌）を購読している者が最も多く（一二四人）、「ぴあ」（情報誌、七二人）がこれについでいる。以下「non no」（六三人）、「an・an」（五七人）、「週間朝日」（四八人）、「朝日ジャーナル」（四六人）、「Can Cam」（四〇人）等が比較的多く購読されている

表31　定期購読誌

順位	誌　　名	人数
1	JJ	124
2	ぴあ	72
3	non no	63
4	an・an	57
5	週刊朝日	48
6	朝日ジャーナル	46
7	Can Cam	40
8	MORE	38
9	CLASSY	36
10	With	31

表32　感銘を受けた本

順位	書　　名	著者名	人数
1	氷点	三浦　綾子	33
2	塩狩峠	〃	16
3	こころ	夏目　漱石	10
3	人間失格	太宰　治	10
3	道ありき	三浦　綾子	10
6	それから	夏目　漱石	9
7	兎の眼	灰谷健次郎	8
7	されど我らが日々	柴田　翔	8
9	羊をめぐる冒険	村上　春樹	7
9	シンデレラ・コンプレックス	ダウリング，C.	7

（表31参照）。上位一〇誌についてみると、七誌までが女性誌で占められているのは女子学生ならではの現象としても、じっくりと「読む雑誌」から、「見る雑誌」へと若い世代の活字離れが顕著である。

一年生では、「Can Cam」（ファッション誌）が最も多く購読されており、ついで「JJ」「non no」「an・an」と続き、以下「ぴあ」「オリーブ」「別冊マーガレット」「FOCUS」「Newton」「朝日ジャーナル」等となっている。

次に、本学在学中に最も感銘を受けた本についてたずねると、約七割の者が感銘を受けた本をあげており、書名の数は六九七点にのぼっている。しかし六人以上が同時にあげているものは一一点にすぎず、学生たちの多様な読書傾向がうかがえる。

書名をみると、最も多くの者があげているのは三浦綾子の「氷点」（三三人）で、ついで「塩狩峠」（一六人）、「道ありき」（一〇人）と三浦綾子の著作が多い。以下「こころ」（夏目漱石）、「人間失格」（太宰治）、「それから」（夏目漱石）、「兎の眼」（灰谷健次郎）、「されど我らが日々」（柴田翔）などが比較的多くあげられている（表32参照）。

一年生では、これまで感銘を受けた本（三冊以内）として、「こころ」（夏目漱石）をあげている者が二三二人と群を抜いて多い。これは高校時

代の教科書等の影響がかなりあるものと推察される。ついで「人間失格」（太宰治）、「塩狩峠」（三浦綾子）が多く読まれており、以下「風と共に去りぬ」（ミッチェル）、「友情」（武者小路実篤）、「氷点」（三浦綾子）、「赤毛のアン」（モンゴメリー）、「斜陽」（太宰治）、「暗夜行路」（志賀直哉）、「大地」（パール・バック）などが続いている。

全体としては文学作品が大勢を占めているが、映画化された作品が目立ち、映画やテレビ等で取り上げられた作品と読書傾向との関連がうかがわれる。作家では、夏目漱石、太宰治、三浦綾子などの人気が高いが、現代作家としては三浦綾子の人気が注目される。

全国大学生活協同組合連合会の「第一回学生読書生活実態調査」（一九八四年）によれば、これまでに最も感動した本の一位は「こころ」（夏目漱石）、二位「人間失格」（太宰治）、三位「竜馬がゆく」（司馬遼太郎）、四位「塩狩峠」（三浦綾子）、「赤毛のアン」（モンゴメリー）、六位「ああ無情」（ビクトル・ユーゴー）、七位「車輪の下」（ヘルマン・ヘッセ）、八位「友情」（武者小路実篤）、九位「次郎物語」（下村湖人）、一〇位「老人と海」（ヘミングウェイ）である。

上位の「こころ」「人間失格」「塩狩峠」などは、現代の学生たちに感銘を与えている本として共通のものであるといえよう。

このような読書傾向には、当然のことながら時代の推移が感じられるが、これらの本の中には戦前・戦中を通して当時の学生たちが愛読した本も含まれており、変化の中にも時代を超えて共通するものがみられる。

五　卒業後の展望

ではこれらの学生たちは、大学卒業後の生活についてどのような希望を持ち、将来の生活展望を描いているのであろうか。卒業後の展望について、職業生活、家庭生活の両面からみていくことにする。

＜卒業直後の進路＞

まず、本学卒業直後にどのような進路をとりたいと思っているかをたずねると、「就職」を希望する者が九〇・三％と九割に達している。また「大学院に進学」二・五％、「大学院以外の機関での学習継続」三・二％と継続して学習を希望する者が約六％を占めている。「家業・家事に従事」する者「結婚」する者はそれぞれ一・七％、一・三％といずれもわずかである（表33参照）。一年生についても同様の傾向がみられるが、「まだ考えていない」と答えている者が一割以上ある。

学科・専攻別（四年）にみても大差はないが進学を希望する者が「管理栄養士」「理二」に多く、「家業・家事」を挙げる者が「児童」に若干多くなっている（表33参照）。

＜職業生活について＞

① 職業継続の意志

卒業を目前にひかえた四年生では、就職希望が九割を超えている。では、いつごろまで継続して職業を持ちたいと考えているのであろうか。

職業継続意志についてみると、表34に示すように「中断型」（子どもができたらやめ、大きくなったら再び持つ）が最も多く二四・三％、「継続型」（子どもができてもずっと持ち続ける）二〇・八％「子ども型」（子どもができるまで持つ）一九・三％、「結婚型」（結婚するまで持つ）一一・五％と、ずっと継続して職業を持ちたいと思っている者は二割にすぎない。また、「考えていない」と答えている者も約二割（一九・一％）ある。これらの者は家業や家事に従事することを希望している者が多く、他はその時の状況に応じて考えたいとする者である（表34参照）。

表33　卒業直後の進路

(上段実数)
(下段　%)

	合　計	就　職	大学院に進学	その他の学習継続	家業・家事	結　婚	その他	無　答
合　計	1,013 100.0%	915 90.3%	25 2.5%	32 3.2%	17 1.7%	13 1.3%	9 0.9%	2 0.2%
児童	47 4.6%	43 91.5%	— —	— —	3 6.4%	— —	1 2.1%	— —
食物	33 3.3%	29 87.9%	2 6.1%	1 3.0%	1 3.0%	— —	— —	— —
管理栄養士	24 2.4%	21 87.5%	3 12.5%	— —	— —	— —	— —	— —
住居	88 8.7%	83 94.3%	1 1.1%	3 3.4%	— —	— —	1 1.1%	— —
被服	64 6.3%	59 92.2%	1 1.6%	2 3.1%	1 1.6%	— —	1 1.6%	— —
物理	38 3.8%	34 89.5%	1 2.6%	1 2.6%	1 2.6%	1 2.6%	— —	— —
数学	54 5.3%	52 96.3%	1 1.9%	— —	— —	1 1.9%	— —	— —
化学	23 2.3%	23 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —
理二	55 5.4%	45 81.8%	4 7.3%	4 7.3%	1 1.8%	1 1.8%	— —	— —
家政経済	76 7.5%	69 90.8%	1 1.3%	2 2.6%	1 1.3%	3 3.9%	— —	— —
国文	116 11.5%	102 87.9%	— —	5 4.3%	3 2.6%	2 1.7%	4 3.4%	— —
英文	127 12.5%	113 89.0%	5 3.9%	6 4.7%	— —	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%
史学	62 6.1%	57 91.9%	1 1.6%	1 1.6%	1 1.6%	1 1.6%	— —	1 1.6%
社会福祉	91 9.0%	78 85.7%	3 3.3%	3 3.3%	4 4.4%	2 2.2%	1 1.1%	— —
教育	115 11.4%	107 93.0%	2 1.7%	4 3.5%	1 0.9%	1 0.9%	— —	— —

表34　職業継続意志

	合　計	結婚型	子ども型	継続型	中断型	もたない	考えていない	その他	無答
合　計	1,013 100.0%	116 11.5%	196 19.3%	211 20.8%	246 24.3%	4 0.4%	193 19.1%	33 3.3%	14 1.4%
児童	47 4.6%	6 12.8%	15 31.9%	5 10.6%	12 25.5%	— —	7 14.9%	1 2.1%	1 2.1%
食物	33 3.3%	5 15.2%	5 15.2%	8 24.2%	9 27.3%	1 3.0%	4 12.1%	1 3.0%	— —
管理栄養士	24 2.4%	5 20.8%	2 8.3%	3 12.5%	9 37.5%	— —	4 16.7%	1 4.2%	— —
住居	88 8.7%	9 10.2%	11 12.5%	22 25.0%	21 23.9%	— —	20 22.7%	4 4.5%	1 1.1%
被服	64 6.3%	12 18.8%	7 10.9%	16 25.0%	16 25.0%	— —	10 15.6%	2 3.1%	1 1.6%
物理	38 3.8%	5 13.2%	8 21.1%	9 23.7%	4 10.5%	— —	12 31.6%	— —	— —
数学	54 5.3%	6 11.1%	18 33.3%	9 16.7%	11 20.4%	— —	7 13.0%	3 5.6%	— —
化学	23 2.3%	— —	4 17.4%	7 30.4%	5 21.7%	— —	6 26.1%	— —	1 4.3%
理二	55 5.4%	4 7.3%	4 7.3%	14 25.5%	13 23.6%	— —	18 32.7%	2 3.6%	— —
家政経済	76 7.5%	6 7.9%	19 25.0%	14 18.4%	20 26.3%	— —	14 18.4%	1 1.3%	2 2.6%
国文	116 11.5%	18 15.5%	24 20.7%	20 17.2%	26 22.4%	1 0.9%	22 19.0%	4 3.4%	1 0.9%
英文	127 12.5%	17 13.4%	33 26.0%	23 18.1%	34 26.8%	— —	15 11.8%	4 3.1%	1 0.8%
史学	62 6.1%	7 11.3%	9 14.5%	8 12.9%	16 25.8%	— —	17 27.4%	4 6.5%	1 1.6%
社会福祉	91 9.0%	4 4.4%	19 20.9%	19 20.9%	24 26.4%	1 1.1%	18 19.8%	4 4.4%	2 2.2%
教育	115 11.4%	12 10.4%	18 15.7%	34 29.6%	26 22.6%	1 0.9%	19 16.5%	2 1.7%	3 2.6%

表35 「学科選択理由」と「職業継続意志」（4年）

	合計	結婚型	子ども型	継続型	中断型	もたない	考えていない	その他	無答
合計	1013 100.0%	116 11.5%	196 19.3%	211 20.8%	246 24.3%	4 0.4%	193 19.1%	33 3.3%	14 1.4%
職業	154 15.2%	9 5.8%	26 16.9%	54 35.1%	41 26.6%	— —	22 14.3%	2 1.3%	— —
性格・興味に合う	644 63.6%	81 12.6%	135 21.0%	108 16.8%	151 23.4%	3 0.5%	131 20.3%	25 3.9%	10 1.6%
つきたい教授	6 0.6%	— —	2 33.3%	2 33.3%	2 33.3%	— —	— —	— —	— —
資格の取得	103 10.2%	10 9.7%	12 11.7%	32 31.1%	32 31.1%	— —	15 14.6%	1 1.0%	1 1.0%
家庭生活	31 3.1%	4 12.9%	12 38.7%	2 6.5%	4 12.9%	— —	7 22.6%	1 3.2%	1 3.2%
社会活動	18 1.8%	1 5.6%	3 16.7%	5 27.8%	5 27.8%	— —	3 16.7%	— —	1 5.6%
その他	55 5.4%	11 20.0%	6 10.9%	7 12.7%	10 18.2%	1 1.8%	15 27.3%	4 7.3%	1 1.8%
無答	2 0.2%	— —	— —	1 50.0%	1 50.0%	— —	— —	— —	— —

一年生では「継続型」が二九・五%、「中断型」二五・三%、「結婚型」九・九%、「子ども型」六・三%と継続型が増加し子ども型が減少する。このような傾向がみられるのは本学選択理由に「就職を考えて」を挙げた者が四年生では一割にも満たなかったのに対して、一年生では二九・八%と約三割を占め、職業志向が強かったことと関連しよう。また反面、一年生では卒業後の生活について具体的なイメージがまだ描けず観念的な応答が多いのに対して、四年生では職業を持つこと、またそれを継続していくことの困難さがより具体的な課題として迫ってくるためではないかと思われる。

学科別の傾向としては、表34に示すように継続型は「化学」「教育」「理二」「住居」「被服」「食物」「物理」等が多いのに対して、中断型は「管理栄養士」が「子ども型」は「数学」「児童」の占める比率が高くなっている。

また、学科選択理由との関連をみると、「職業」に

役立たせたいと答えている者は「継続型」が最も多く、「性格・興味」を挙げた者は「中断型」「子ども型」が、また「家庭生活」に役立たせたいと考えた者は、結婚するまで、子どもができるまでといった「短期就業型」が比較的多い（表35参照）。

東京学生職業センターが昭和六〇年九月に実施した「大学生等の就職意識調査」によると、「特に考えていない」者が三五・六％と最も多く、次いで「出産まで」二六・二％、「定年まで」一七・三％、「結婚まで」一二・〇％、「できるだけ長く」五・四％、「若いうちだけ」三・五％の順となっている。大学女子では「就業継続型」（定年までできるだけ長く）は三二・九％（短大二〇・三％、専修学校一七・〇％）と三割を超えているが、やはり「早期引退型」（結婚・出産まで、若いうちだけ）が三五・八％（短大三七・九％、専修学校三七・九％）と「継続型」を上回っている。

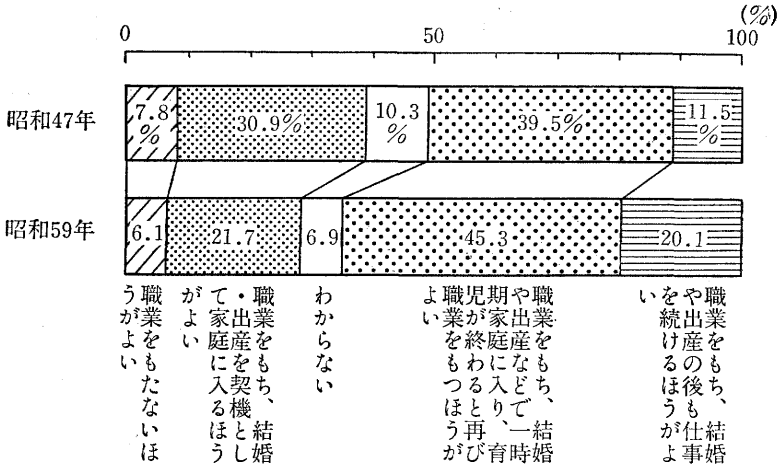
上記の資料は昭和六〇年九月一〇日～同九月二一日までに同センターを利用した六一年三月卒業予定の男女学生（大学・短大・専修学校）一、一四七名（内大学女子一九五名）を対象としたものだが、一般的な傾向でも、総理府の世論調査にみられるように、「中断再就職型」が四五・三％と最も多い。「継続型」は四七年と比べると五九年までの一二年間で一一・五％から二〇・五％へと約一〇％増加しているものの、結婚や出産を契機として家庭に入ると答えている「短期就業型」二一・七％を下回っている（図10参照）。

四年生については、更に「就業理由」「希望職種」「職場選択理由」等についてたずねている。

② 就業理由

就業理由では、「社会的視野を広げたい」と答えている者が最も多く七〇・一％、次いで「経済力を持ちたいから」三六・〇％、「自分の能力をいかすため」二八・〇％、「専門をいかしたいから」一五・二％、「将来の生活設計に備えて」一四・五％と続いている。「働くのが当然だから」と積極的な姿勢の者が一三・三％と約一割みられる反面

図10　女子の職業に対する考え方



〔資料出所〕　総理府「婦人に関する意識調査」（昭和47年）（対象…18歳以上の女子）
総理府「婦人に関する世論調査」（昭和59年）（対象…20歳以上の女子）

「家庭にいるだけではつまらないから」と受身の態勢の者も一二・九%とほぼ同比率を占めている（表36参照）。

学科・専攻別の傾向は表36に示すとおりである。

職業継続意志との関連でみると、「継続型」では「専門をいかしたい」「能力をいかすため」と答えている者が、また「結婚型」「子ども型」では「社会的視野の拡大」を挙げる者の割合が比較的高い。「中断型」の中でも「働くのが当然」と答えている者が一七%と二割近くみられる。このことは将来、育児休業制度や老親の介護のための介護休暇等が普及すれば、継続して就業する可能性があることを示唆しているものと思われる（表37参照）。

また、学科選択理由に「職業」や「資格」を挙げた者は、就業理由に「能力をいかすため」「専門をいかしたい」を挙げる者が多く、他方、「性格・興味」を挙げた者は「社会的視野を広げたい」と思って就業する者が多い（表38参照）。

表36 就業理由

	合計	専門をいかす	能力をいかす	経済力をもつ	社会的視野	家庭だけでは不満	将来の生活設計	働くのが当然	その他	無答
合計	915 100.0%	139 15.2%	256 28.0%	329 36.0%	641 70.1%	118 12.9%	133 14.5%	122 13.3%	19 2.1%	5 0.5%
児童	43 4.7%	8 18.6%	19 44.2%	17 39.5%	28 65.1%	3 7.0%	2 4.7%	5 11.6%	— —	— —
食物	29 3.2%	3 10.3%	9 31.0%	13 44.8%	19 65.5%	3 10.3%	3 10.3%	4 13.8%	— —	— —
管理栄養士	21 2.3%	7 33.3%	6 28.6%	8 38.1%	14 66.7%	1 4.8%	3 14.3%	1 4.8%	— —	— —
住居	83 9.1%	32 38.6%	27 32.5%	23 27.7%	50 60.2%	9 10.8%	9 10.8%	6 7.2%	2 2.4%	1 1.2%
被服	59 6.4%	4 6.8%	19 32.2%	21 35.6%	43 72.9%	7 11.9%	12 20.3%	8 13.6%	1 1.7%	— —
物理	34 3.7%	6 17.6%	11 32.4%	16 47.1%	21 61.8%	4 11.8%	4 11.8%	3 8.8%	— —	— —
数学	52 5.7%	16 30.8%	8 15.4%	12 23.1%	39 75.0%	5 9.6%	9 17.3%	13 25.0%	— —	— —
化学	23 2.5%	5 21.7%	8 34.8%	9 39.1%	15 65.2%	1 4.3%	1 4.3%	4 17.4%	2 8.7%	— —
理二	45 4.9%	9 20.0%	17 37.8%	20 44.4%	29 64.4%	5 11.1%	4 8.9%	5 11.1%	1 2.2%	— —
家政経済	69 7.5%	2 2.9%	14 20.3%	25 36.2%	55 79.7%	10 14.5%	11 15.9%	10 14.5%	1 1.4%	— —
国文	102 11.1%	2 2.0%	22 21.6%	34 33.3%	70 68.6%	21 20.6%	20 19.6%	17 16.7%	4 3.9%	2 2.0%
英文	113 12.3%	8 7.1%	25 22.1%	39 34.5%	87 77.0%	31 27.4%	17 15.0%	10 8.8%	2 1.8%	1 0.9%
史学	57 6.2%	3 5.3%	13 22.8%	25 43.9%	43 75.4%	5 8.8%	14 24.6%	4 7.0%	4 7.0%	— —
社会福祉	78 8.5%	16 20.5%	23 29.5%	23 29.5%	56 71.8%	3 3.8%	11 14.1%	16 20.5%	1 1.3%	— —
教育	107 11.7%	18 16.8%	35 32.7%	44 41.1%	72 67.3%	10 9.3%	13 12.1%	16 15.0%	1 0.9%	1 0.9%

表37　職業継続意志と就業理由（M.A.）

	合　計	専門をいかす	能力をいかす	経済力をもつ	社会的視野	家庭だけでは不満	将来の生活設計	働くのが当然	その他	無答
合　計	915 100.0%	139 15.2%	256 28.0%	329 36.0%	641 70.1%	118 12.9%	133 14.5%	122 13.3%	19 2.1%	5 0.5%
結婚型	111 12.1%	5 4.5%	26 23.4%	30 27.0%	92 82.9%	23 20.7%	20 18.0%	14 12.6%	2 1.8%	— —
子ども型	190 20.8%	21 11.1%	48 25.3%	68 35.8%	160 84.2%	23 12.1%	31 16.3%	13 6.8%	2 1.1%	1 0.5%
継続型	184 20.1%	50 27.2%	74 40.2%	65 35.3%	93 50.5%	26 14.1%	21 11.4%	26 14.1%	3 1.6%	2 1.1%
中断型	230 25.1%	32 13.9%	60 26.1%	85 37.0%	173 75.2%	19 8.3%	29 12.6%	39 17.0%	4 1.7%	1 0.4%
もたない	1 0.1%	— —	— —	— —	1 100.0%	1 100.0%	— —	— —	— —	— —
考えていない	167 18.3%	27 16.2%	42 25.1%	71 42.5%	101 60.5%	24 14.4%	27 16.2%	23 13.8%	5 3.0%	— —
その他	23 2.5%	3 13.0%	2 8.7%	8 34.8%	16 69.6%	1 4.3%	3 13.0%	5 21.7%	3 13.0%	1 4.3%
無　答	9 1.0%	1 11.1%	4 44.4%	2 22.2%	5 55.6%	1 11.1%	2 22.2%	2 22.2%	— —	— —

③ 希望職種

では就業を希望する者たちは、どのような職種を望んでいるのであろうか。希望職種についてみると、全般的に「事務職」を希望する者が最も多く三八・八%、次いで「専門・技術職」二三・〇%、「サービス業」一〇・八%、「教育職」八・〇%、「研究・専門職」六・六%であり、「公務・福祉」三・〇%、「芸能関係」二・七%と続いている。

この項目は自由記述で回答を求めたものを表39の類型に分類したものだが、具体的な職種では主として次のようなものが挙げられている。

〈教育職〉

幼・小・中・高教員、保母、各種学校・塾教員

〈事務職〉

一般事務、秘書、金融（銀行・証券）・保険関係、編集・出版事務

〈専門・技術職〉

情報処理関係（システム・エンジニア・プログラマー、

表38　学科選択理由と就業理由（4年）

	合計	専門をいかす	能力をいかす	経済力をもつ	社会的視野	家庭だけでは不満	将来の設計	生活	働くのが当然	その他	無答
合計	915 100.0%	139 15.2%	256 28.0%	329 36.0%	641 70.1%	118 12.9%	133 14.5%	122 13.3%	19 2.1%	5 0.5%	
職業	146 16.0%	53 36.3%	40 27.4%	43 29.5%	92 63.0%	17 11.6%	18 12.3%	16 11.0%	3 2.1%	1 0.7%	
性格・興味に合う	570 62.3%	53 9.3%	156 27.4%	212 37.2%	417 73.2%	78 13.7%	91 16.0%	74 13.0%	11 1.9%	1 0.2%	
つきたい教授	5 0.5%	— —	1 20.0%	3 60.0%	2 40.0%	1 20.0%	— —	1 20.0%	— —	1 20.0%	
資格の取得	99 10.8%	24 24.2%	39 39.4%	34 34.3%	65 65.7%	7 7.1%	9 9.1%	15 15.2%	— —	1 1.0%	
家庭生活	28 3.1%	1 3.6%	7 25.0%	12 42.9%	22 78.6%	6 21.4%	3 10.7%	2 7.1%	1 3.6%	— —	
社会活動	16 1.7%	2 12.5%	5 31.3%	7 43.8%	10 62.5%	1 6.3%	3 18.8%	2 12.5%	— —	— —	
その他	49 5.4%	6 12.2%	7 14.3%	18 36.7%	31 63.3%	7 14.3%	9 18.4%	12 24.5%	4 8.2%	1 2.0%	
無答	2 0.2%	— —	1 50.0%	— —	2 100.0%	1 50.0%	— —	— —	— —	— —	

ワープロ・インストラクター等）、設計関係（ハウジング・プランナー、インテリア・コーディネーター、キッチン・アドヴァイザー等）、服飾デザイナー

〈研究・専門職〉

医薬品・電気機器等の研究・開発、各種研究機関助手・調査員、栄養士

〈サービス業〉

販売・営業関係（百貨店勤務等）、スチュワーデス

〈公務・福祉〉

国・地方公務員（教員を除く。）、社会福祉主事、福祉指導員、施設職員（老人ホーム寮母等）

〈芸能関係〉

シナリオライター、マスコミ関係（テレビ番組の企画・製作）、音楽家

学科別の傾向をみると、表39に示すように、教育職は「児童」「教育」、事務職は「英文・史学」、専門・技術職は「数学」「住居」「物理」、研究・専門職は「管理栄養士」「理二」「化学」、サービス業は「家政経済」、

表39 希望職種

	合計	教育職	事務職	専門・技術職	研究・専門職	サーヴィス業	公務・福祉	芸能関係	未定	無答
合計	915 100.0%	73 8.0%	355 38.8%	210 23.0%	60 6.6%	99 10.8%	27 3.0%	25 2.7%	15 1.6%	51 5.6%
児童	43 4.7%	11 25.6%	16 37.2%	5 11.6%	— —	6 14.0%	— —	— —	— —	5 11.6%
食物	29 3.2%	2 6.9%	4 13.8%	8 27.6%	6 20.7%	4 13.8%	1 3.4%	1 3.4%	2 6.9%	1 3.4%
管理栄養士	21 2.3%	— —	7 33.3%	— —	11 52.4%	3 14.3%	— —	— —	— —	— —
住居	83 9.1%	— —	12 14.5%	54 65.1%	2 2.4%	5 6.0%	— —	3 3.6%	1 1.2%	6 7.2%
被服	59 6.4%	7 11.9%	23 39.0%	12 20.3%	4 6.8%	9 15.3%	— —	— —	1 1.7%	3 5.1%
物理	34 3.7%	1 2.9%	2 5.9%	21 61.8%	5 14.7%	1 2.9%	— —	— —	1 2.9%	3 8.8%
数学	52 5.7%	4 7.7%	— —	47 90.4%	1 1.9%	— —	— —	— —	— —	— —
化学	23 2.5%	5 21.7%	— —	6 26.1%	8 34.8%	1 4.3%	— —	— —	— —	3 13.0%
理二	45 4.9%	3 6.7%	5 11.1%	16 35.6%	16 35.6%	1 2.2%	1 2.2%	2 4.4%	— —	1 2.2%
家政経済	69 7.5%	2 2.9%	34 49.3%	2 2.9%	2 2.9%	15 21.7%	1 1.4%	2 2.9%	2 2.9%	9 13.0%
国文	102 11.1%	3 2.9%	59 57.8%	9 8.8%	2 2.0%	15 14.7%	1 1.0%	6 5.9%	3 2.9%	4 3.9%
英文	113 12.3%	4 3.5%	77 68.1%	8 7.1%	1 0.9%	13 11.5%	1 0.9%	6 5.3%	— —	3 2.7%
史学	57 6.2%	2 3.5%	36 63.2%	6 10.5%	— —	6 10.5%	1 1.8%	2 3.5%	2 3.5%	2 3.5%
社会福祉	78 8.5%	1 1.3%	33 42.3%	6 7.7%	1 1.3%	11 14.1%	18 23.1%	1 1.3%	1 1.3%	6 7.7%
教育	107 11.7%	28 26.2%	47 43.9%	10 9.3%	1 0.9%	9 8.4%	3 2.8%	2 1.9%	2 1.9%	5 4.7%

表40　就職内定率

	合　計	教育職	事務職	専門の技術職	研究・専門職	サーヴィス業	公務・福　祉	芸能関係	未定	無答
合　計	915 100.0%	73 8.0%	355 38.8%	210 23.0%	60 6.6%	99 10.8%	27 3.0%	25 2.7%	15 1.6%	51 5.6%
まっている	837 91.5%	42 5.0%	343 41.0%	208 24.9%	59 7.0%	98 11.7%	18 2.2%	21 2.5%	14 1.7%	34 4.1%
まっていない	77 8.4%	31 40.3%	11 14.3%	2 2.6%	1 1.3%	1 1.3%	9 11.7%	4 5.2%	1 1.3%	17 22.1%
無　答	1 0.1%	— —	1 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

公務・福祉は「社会福祉」に希望者が多いなど学科の特色が反映されている（表39参照）。

調査終了時点（昭和六一年二月二八日現在）で、就職が内定している者は九一・五％（八三七名）と約九割を占め、まだきまっていないと答えている者は八・四％（七七名）のみである。希望職種でみると、「事務職」「専門・技術職」「研究・専門職」「サービス業」等では内定率が高いが、免許取得者の最も多かった「教育職」では未定の者が多くなっている。これは例年、教職関係の採用が遅れるのに加えて、前述のように児童・生徒数の減少による教員削減の影響が現れてきたものと思われる（表40参照）。

職業継続意志との関連をみると、「継続型」は「教育職」「専門・技術職」を、「短期就業型」は「事務職」を希望する者が比較的多い（表41参照）。また、就業理由で「専門をいかしたい」と答えている者は「教育職」「専門・技術職」を希望する者が多く、「将来の生活設計に備えて」「社会的視野の拡大」「家庭にいるだけではつまらない」といった点から就業を考える者は「事務職」を希望する者が多くなっている（表42参照）。

本調査においては、全般的な傾向として事務職を希望する者が多かったが、リクルートリサーチが行った「大学女子の就職動機調査」（昭和六二年三月卒業見込みの四年制大学・短期大学の女子学生対象）によっても、最も希望が多かった職種は、

表41　職業継続意志と希望職種

	合　計	教育職	事務職	専門・技術職	研究・専門職	サーヴィス業	公務・福　祉	芸能関係	未定	無答
合　計	915 100.0%	73 8.0%	355 38.8%	210 23.0%	60 6.6%	99 10.8%	27 3.0%	25 2.7%	15 1.6%	51 5.6%
結婚型	111 12.1%	3 2.7%	64 57.7%	20 18.0%	6 5.4%	12 10.8%	1 0.9%	2 1.8%	1 0.9%	2 1.8%
子ども型	190 20.8%	4 2.1%	93 48.9%	48 25.3%	12 6.3%	17 8.9%	1 0.5%	2 1.1%	4 2.1%	9 4.7%
継続型	184 20.1%	42 22.8%	31 16.8%	42 22.8%	13 7.1%	23 12.5%	12 6.5%	7 3.8%	4 2.2%	10 5.4%
中断型	230 25.1%	11 4.8%	86 37.4%	57 24.8%	14 6.1%	31 13.5%	6 2.6%	9 3.9%	3 1.3%	13 5.7%
もたない	1 0.1%	— —	1 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
考えていない	167 18.3%	13 7.8%	66 39.5%	35 21.0%	13 7.8%	13 7.8%	6 3.6%	3 1.8%	3 1.8%	15 9.0%
その他	23 2.5%	— —	10 43.5%	5 21.7%	1 4.3%	2 8.7%	1 4.3%	2 8.7%	— —	2 8.7%
無　答	9 1.0%	— —	4 44.4%	3 33.3%	1 11.1%	1 11.1%	— —	— —	— —	— —

四年制・短大ともに「事務職（営業・総務等一般事務）」である。次いで四年制では「企画調査」「秘書」の人気が高く、さらに、「記者・編集者・アナウンサー・ディレクター」「プログラマー・システムエンジニア」「小・中・高教員」等がほぼ同比率で続いている。

④　職場選択理由

次に職場を選択する際にどのようなことを重視したかをみてみよう。

職場選択理由の一位は、「自分にとってのやりがいや興味」五二・七%であり、二位が「自分の適性や能力がいかせる」四四・八%である。次いで「企業の安定度」二五・九%、「企業の種類や特性」二五・九%が同比率で三・四位を占め、「通勤に便利」が一三・一%で五位となっている。以下、「企業の社会への貢献度」六・八%、「給料が高い」五・九%、「休日が多く残業が少ない」四・九%と続くが、「男女同一待遇」三・〇%、「男女同一賃金」一・二%、「育児休暇」〇・五%等現在女子雇用の面で問題になっている点を

表42　就業理由と希望職種

	合　計	教育職	事務職	専門・技術職	研究・専門職	サーヴィス業	公務・福祉	芸能関係	未定	無答
合　計	915 100.0%	73 8.0%	355 38.8%	210 23.0%	60 6.6%	99 10.8%	27 3.0%	25 2.7%	15 1.6%	51 5.6%
専門をいかす	139 15.2%	36 25.9%	6 4.3%	49 35.3%	22 15.8%	3 2.2%	12 8.6%	4 2.9%	— —	7 5.0%
能力をいかす	256 28.0%	33 12.9%	69 27.0%	60 23.4%	19 7.4%	37 14.5%	4 1.6%	14 5.5%	3 1.2%	17 6.6%
経済力をもつ	329 36.0%	14 4.3%	130 39.5%	79 24.0%	20 6.1%	36 10.9%	10 3.0%	9 2.7%	9 2.7%	22 6.7%
社会的視野	641 70.1%	37 5.8%	280 43.7%	143 22.3%	38 5.9%	69 10.8%	16 2.5%	17 2.7%	8 1.2%	33 5.1%
家庭だけでは不満	118 12.9%	8 6.8%	60 50.8%	17 14.4%	4 3.4%	12 10.2%	5 4.2%	2 1.7%	— —	10 8.5%
将来の生活設計	133 14.5%	4 3.0%	76 57.1%	27 20.3%	— —	18 13.5%	1 0.8%	— —	5 3.8%	2 1.5%
働くのが当然	122 13.3%	7 5.7%	53 43.4%	29 23.8%	9 7.4%	12 9.8%	4 3.3%	3 2.5%	2 1.6%	3 2.5%
その他	19 2.1%	2 10.5%	3 15.8%	5 26.3%	1 5.3%	4 21.1%	1 5.3%	1 5.3%	1 5.3%	1 5.3%
無　答	5 0.5%	1 20.0%	2 40.0%	— —	1 20.0%	— —	— —	— —	— —	1 20.0%

挙げる者はいずれも極めてわずかである（表43参照）。

職業継続意志との関連では「継続型」「中断型」は「やりがい・興味がある」「適性や能力がいかせる」を挙げる者が多く、他方「短期就業型」では「企業の安定度・種類・特性」等を選ぶ者が比較的多い。「短期就業型」の中でも結婚するまでと答えている者に「企業の社会的評価」を挙げる者が多く、「継続型」では「通勤に便利」といった条件を求める者が少ないといった傾向がみられる（表44参照）。

また職種についてみると、「企業の社会的評価や安定度」「休日が多く残業が少ない」といった点を挙げる者は「事務職」に多く、「男女同一賃金・同一待遇」を求める者は、「専門・技術職」に比較的多いといった傾向がうかがわれる（表45参照）。

さらに学科選択理由との関連では、学科選択

表43　職場選択理由（M.A.）

	合　計	企業の安定度	企業の種類・特性	企業の社会的評価	社会への貢献度	能力がいかせる	やりがい・興味	給料が高い
合　計	915 100.0%	237 25.9%	237 25.9%	79 8.6%	62 6.8%	410 44.8%	482 52.7%	54 5.9%
児童	43 4.7%	13 30.2%	11 25.6%	3 7.0%	5 11.6%	17 39.5%	24 55.8%	3 7.0%
食物	29 3.2%	6 20.7%	8 27.6%	2 6.9%	2 6.9%	15 51.7%	16 55.2%	2 6.9%
管理栄養士	21 2.3%	6 28.6%	2 9.5%	2 9.5%	2 9.5%	12 57.1%	12 57.1%	3 14.3%
住居	83 9.1%	17 20.5%	28 33.7%	8 9.6%	2 2.4%	48 57.8%	45 54.2%	5 6.0%
被服	59 6.4%	14 23.7%	11 18.6%	5 8.5%	3 5.1%	29 49.2%	28 47.5%	2 3.4%
物理	34 3.7%	9 26.5%	7 20.6%	6 17.6%	2 5.9%	19 55.9%	15 44.1%	2 5.9%
数学	52 5.7%	18 34.6%	17 32.7%	3 5.8%	1 1.9%	26 50.0%	20 38.5%	1 1.9%
化学	23 2.5%	2 8.7%	6 26.1%	— —	4 17.4%	13 56.5%	10 43.5%	3 13.0%
理二	45 4.9%	9 20.0%	6 13.3%	1 2.2%	4 8.9%	27 60.0%	30 66.7%	1 2.2%
家政経済	69 7.5%	14 20.3%	16 23.2%	9 13.0%	1 1.4%	28 40.6%	37 53.6%	7 10.1%
国文	102 11.1%	35 34.3%	31 30.4%	11 10.8%	6 5.9%	37 36.3%	47 46.1%	9 8.8%
英文	113 12.3%	36 31.9%	32 28.3%	11 9.7%	8 7.1%	53 46.9%	51 45.1%	5 4.4%
史学	57 6.2%	12 21.1%	21 36.8%	4 7.0%	4 7.0%	13 22.8%	33 57.9%	6 10.5%
社会福祉	78 8.5%	21 26.9%	16 20.5%	4 5.1%	11 14.1%	33 42.3%	47 60.3%	1 1.3%
教育	107 11.7%	25 23.4%	25 23.4%	10 9.3%	7 6.5%	40 37.4%	67 62.6%	4 3.7%

	男女同一賃金	男女同一待遇	育児休暇がある	休日多・残業少	通勤に便利	その他	無答
合　計	11 1.2%	27 3.0%	5 0.5%	45 4.9%	120 13.1%	32 3.5%	2 0.2%
児童	— —	1 2.3%	— —	2 4.7%	5 11.6%	1 2.3%	— —
食物	— —	1 3.4%	— —	— —	3 10.3%	3 10.3%	— —
管理栄養士	— —	— —	1 4.8%	— —	2 9.5%	— —	— —
住居	1 1.2%	1 1.2%	— —	3 3.6%	2 2.4%	1 1.2%	1 1.2%
被服	1 1.7%	4 6.8%	2 3.4%	7 11.9%	7 11.9%	2 3.4%	— —
物理	1 2.9%	3 8.8%	— —	1 2.9%	3 8.8%	— —	— —
数学	— —	1 1.9%	— —	5 9.6%	11 21.2%	1 1.9%	— —
化学	— —	1 4.3%	— —	1 4.3%	5 21.7%	— —	— —
理二	1 2.2%	1 2.2%	— —	2 4.4%	4 8.9%	2 4.4%	— —
家政経済	1 1.4%	2 2.9%	— —	2 2.9%	11 15.9%	3 4.3%	1 1.4%
国文	1 1.0%	2 2.0%	— —	4 3.9%	15 14.7%	3 2.9%	— —
英文	1 0.9%	2 1.8%	1 0.9%	7 6.2%	13 11.5%	5 4.4%	— —
史学	— —	2 3.5%	1 1.8%	2 3.5%	8 14.0%	5 8.8%	— —
社会福祉	2 2.6%	2 2.6%	— —	3 3.8%	13 16.7%	3 3.8%	— —
教育	2 1.9%	4 3.7%	— —	6 5.6%	18 16.8%	3 2.8%	— —

表44　職業継続意志と職場選択理由（M.A.）

	合　計	企業の安定度	企業の種類・特性	企業の社会的評価	社会への貢献度	能力がいかせる	やりがい・興味	給料が高い
合　計	915 100.0%	237 25.9%	237 25.9%	79 8.6%	62 6.8%	410 44.8%	482 52.7%	54 5.9%
結婚するまで	111 12.1%	47 42.3%	27 24.3%	20 18.0%	7 6.3%	41 36.9%	37 33.3%	6 5.4%
子ども	190 20.8%	70 36.8%	64 33.7%	11 5.8%	9 4.7%	76 40.0%	92 48.4%	14 7.4%
継続	184 20.1%	22 12.0%	33 17.9%	8 4.3%	22 12.0%	110 59.8%	124 67.4%	10 5.4%
中断	230 25.1%	50 21.7%	55 23.9%	15 6.5%	15 6.5%	101 43.9%	128 55.7%	15 6.5%
もたない	1 0.1%	1 100.0%	— —	1 100.0%	— —	— —	— —	— —
考えていない	167 18.3%	42 25.1%	47 28.1%	20 12.0%	7 4.2%	66 39.5%	87 52.1%	7 4.2%
その他	23 2.5%	4 17.4%	8 34.8%	1 4.3%	1 4.3%	11 47.8%	10 43.5%	2 8.7%
無答	9 1.0%	1 11.1%	3 33.3%	3 33.3%	1 11.1%	5 55.6%	4 44.4%	— —

男女同一賃金	男女同一待遇	育児休暇がある	休日多・残業少	通勤に便利	その他	無答
11 1.2%	27 3.0%	5 0.5%	45 4.9%	120 13.1%	32 3.5%	2 0.2%
3 2.7%	1 0.9%	— —	8 7.2%	20 18.0%	4 3.6%	— —
1 0.5%	5 2.6%	— —	9 4.7%	23 12.1%	2 1.1%	— —
— —	8 4.3%	2 1.1%	4 2.2%	14 7.6%	9 4.9%	— —
1 0.4%	5 2.2%	3 1.3%	10 4.3%	38 16.5%	11 4.8%	2 0.9%
— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
6 3.6%	6 3.6%	— —	11 6.6%	22 13.2%	6 3.6%	— —
— —	2 8.7%	— —	3 13.0%	3 13.0%	— —	— —
— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

表45　職場選択理由と職種（M.A.）

	合　計	教育職	事務職	専門・技術職	研究・専門職	サーヴィス業	公務・福祉	芸能関係	未定	無答
合　計	915 100.0%	73 8.0%	355 38.8%	210 23.0%	60 6.6%	99 10.8%	27 3.0%	25 2.7%	15 1.6%	51 5.6%
企業の安定度	237 25.9%	2 0.8%	136 57.4%	51 21.5%	9 3.8%	20 8.4%	3 1.3%	2 0.8%	2 0.8%	12 5.1%
企業の種類・特性	237 25.9%	4 1.7%	102 43.0%	66 27.8%	14 5.9%	29 12.2%	3 1.3%	5 2.1%	5 2.1%	9 3.8%
企業の社会的評価	79 8.6%	— —	47 59.5%	10 12.7%	3 3.8%	9 11.4%	— —	2 2.5%	3 3.8%	5 6.3%
社会への貢献度	62 6.8%	9 14.5%	29 46.8%	6 9.7%	5 8.1%	4 6.5%	4 6.5%	— —	— —	5 8.1%
能力がいかせる	410 44.8%	54 13.2%	116 28.3%	104 25.4%	40 9.8%	43 10.5%	11 2.7%	17 4.1%	4 1.0%	21 5.1%
やりがい・興味	482 52.7%	62 12.9%	138 28.6%	103 21.4%	32 6.6%	62 12.9%	22 4.6%	20 4.1%	11 2.3%	32 6.6%
給料が高い	54 5.9%	— —	25 46.3%	13 24.1%	4 7.4%	7 13.0%	— —	2 3.7%	— —	3 5.6%
男女同一賃金	11 1.2%	2 18.2%	1 9.1%	4 36.4%	— —	1 9.1%	2 18.2%	— —	— —	1 9.1%
男女同一待遇	27 3.0%	5 18.5%	5 18.5%	7 25.9%	2 7.4%	3 11.1%	1 3.7%	— —	2 7.4%	2 7.4%
育児休暇がある	5 0.5%	— —	2 40.0%	— —	— —	3 60.0%	— —	— —	— —	— —
休日多・残業少	45 4.9%	1 2.2%	24 53.3%	11 24.4%	— —	5 11.1%	— —	— —	— —	4 8.9%
通勤に便利	120 13.1%	5 4.2%	55 45.8%	31 25.8%	7 5.8%	8 6.7%	6 5.0%	1 0.8%	1 0.8%	6 5.0%
その他	32 3.5%	1 3.1%	14 43.8%	8 25.0%	2 6.3%	2 6.3%	2 6.3%	1 3.1%	1 3.1%	1 3.1%
無答	2 0.2%	— —	2 100.0%	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

の際に「職業」に役立たせたいから、取得したい「資格」がとれるからと職業や資格取得を挙げた者は、「適性や能力がいかせる」「やりがいや興味がある」といった点から職場を選択する者が多く、他方、自分の「性格や興味」にあっているといった観点から学科を選んでいる者では「企業の安定度や種類・特性」を挙げる者が他に比して多いといった状況がみられる（表46参照）。

前述の「大学生等の就職意識調査」においても、企業選択の際の基準について意見を求めているので参考までに引用しておこう。大学女子では選択の基準として「仕事の内容」を挙げる者が圧倒的に多く八八・二％を占め、次いで「勤務地」五九・五％、「会社（業界）の将来性」四二・一％が上位を占めている。その他「賃金」三三・八％、「会社規模」一九・〇％、「労働時間」一四・九％、「事業内容」八・七％である。

大学男子では、「会社の将来性」を挙げる者の割合が高く女子を上回っているのに対して「勤務地」「賃金」「労働時間」等は女子を下回っており、男女の職業観の差がみられる。

本調査と比較すると、「賃金」「労働時間」等を挙げる者が、本調査の対象者より多い点が目立っている（図11参照）。

ここで附属校出身者の傾向を四年生の調査からみておこう。

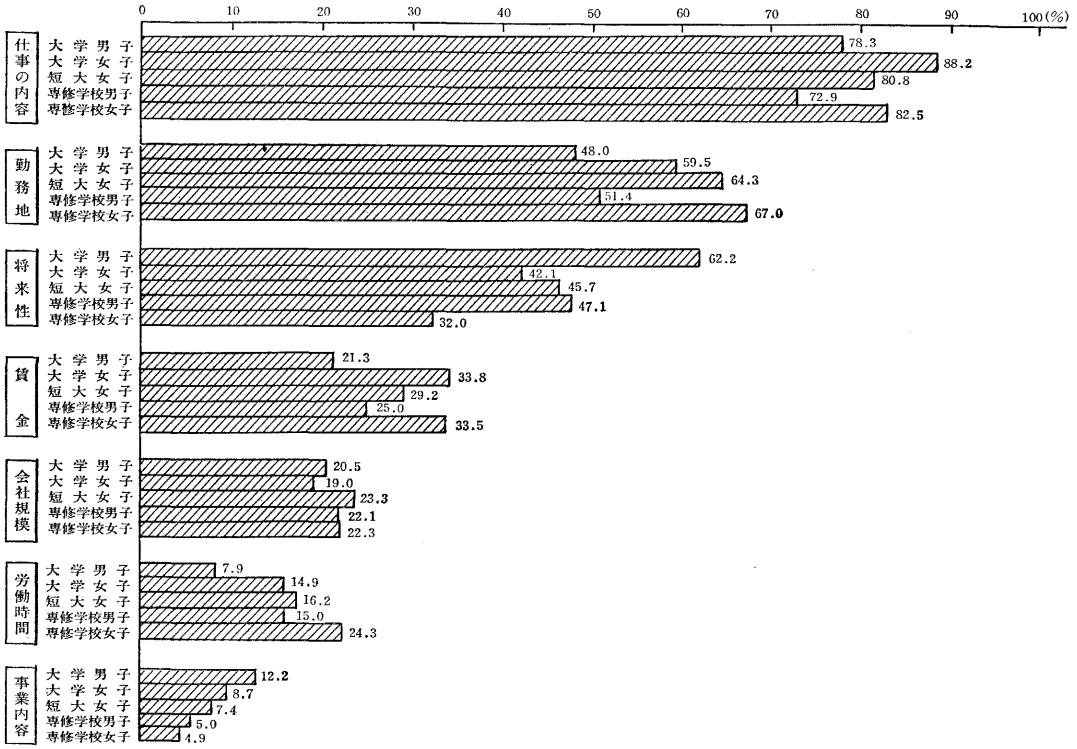
職業継続意志についてみると、附属校の出身者は「子ども型」が二五・一％と最も多く、「中断型」の二三・六％を若干上回っている。「継続型」は一四・〇％であり、「結婚型」の一四・七％とほぼ同比率である。これに対して大学からの入学者は「中断型」が二四・一％と一位を占めているが「継続型」が二三・六％でこれに次いでいる。しかし、小・中・高校からの入学者別にみると「結婚型」は小学校の出身者が多く（二九・四％）、中学からの者は六・五％にすぎない。一方、「継続型」は小学校五・九％に対して中学校では二二・九％と高率で大学からの入学者と類似

表46　学科選択理由と職場選択理由（M. A.）

	合　計	企業の安定度	企業の種類・特性	企業の社会的評価	社会への貢献度	能力がいかせる	やりがい・興味	給料が高い
合　計	915 100.0%	237 25.9%	237 25.9%	79 8.6%	62 6.8%	410 44.8%	482 52.7%	54 5.9%
職業	146 16.0%	30 20.5%	32 21.9%	9 6.2%	10 6.8%	84 57.5%	77 52.7%	11 7.5%
性格・興味に合う	570 62.3%	157 27.5%	167 29.3%	53 9.3%	36 6.3%	233 40.9%	294 51.6%	30 5.3%
つきたい教授	5 0.5%	1 20.0%	1 20.0%	— —	— —	2 40.0%	4 80.0%	1 20.0%
資格の取得	99 10.8%	21 21.2%	18 18.2%	9 9.1%	10 10.1%	53 53.5%	62 62.6%	6 6.1%
家庭生活	28 3.1%	10 35.7%	6 21.4%	3 10.7%	1 3.6%	8 28.6%	17 60.7%	1 3.6%
社会活動	16 1.7%	6 37.5%	5 31.3%	2 12.5%	3 18.8%	9 56.3%	5 31.3%	— —
その他	49 5.4%	12 24.5%	8 16.3%	3 6.1%	2 4.1%	19 38.8%	21 42.9%	5 10.2%
無答	2 0.2%	— —	— —	— —	— —	2 100.0%	2 100.0%	— —

男女同一賃金	男女同一待遇	育児休暇がある	休日多・残業少	通勤に便利	その他	無答
11 1.2%	27 3.0%	5 0.5%	45 4.9%	120 13.1%	32 3.5%	2 0.2%
1 0.7%	7 4.8%	3 2.1%	8 5.5%	14 9.6%	3 2.1%	1 0.7%
8 1.4%	15 2.6%	2 0.4%	24 4.2%	81 14.2%	22 3.9%	— —
— —	— —	— —	— —	— —	1 20.0%	— —
1 1.0%	2 2.0%	— —	4 4.0%	10 10.1%	— —	— —
— —	— —	— —	2 7.1%	5 17.9%	1 3.6%	— —
— —	1 6.3%	— —	— —	— —	— —	— —
1 2.0%	2 4.1%	— —	7 14.3%	10 20.4%	5 10.2%	1 2.0%
— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

図11　企業選択の基準（性・学歴別）（M.A.）



〔資料出所〕　東京学生職業センター「大学生等の就職意識」昭和60年12月

のパターンを示している。高校出身者は一二・九%であり、小学校と中学校のほぼ中間に位置している。

就業理由では、「社会的視野の拡大」を挙げる者が附属校出身者、大学からの入学者ともに一位を占め、「経済力をもつ」「能力をいかす」「専門をいかす」と続くが「社会的視野」を挙げる者の比率は附属校出身者が七四・三%（大学六八・三%）と高く、「専門をいかす」を挙げる者は大学からの入学者が一七・七%（附属九・三%）と高い。小・中・高の各段階では、社会的視野の拡大を挙げる者は小学校、高等学校からの者が多く、専門をいかしたいとする者は中学校からの者が多い。

希望職種では、附属校出身者は「事務職」を希望する者が四七・四%（大学三五・三%）と多いのに対して、大学からの入学者は「教職」を希望する者が一〇・二%（附属三・〇%）と多くなっている。

職場選択理由では、両者ともに一位に「やりがい・興味」、二位に「能力がいかせる」を挙げているが、三位は大学からの者が「企業の種類・特性」を挙げているのに対して、附属からの者は「企業の安定度」を挙げており、三位と四位がいれかわっている。さらに小学校、高等学校からの者では、「企業の社会的評価」を挙げる者の比率が高い。

＜家庭生活について＞

次に家庭生活について、結婚観、性別役割分業観等の面からみていくことにする。

①　結　婚　観

まず結婚の意志についてみると、約九割（八七・一%）の者が「ある」と答えており、結婚の意志は「ない」とはっきり否定した者は〇・九%のみである。すでに結婚している者が〇・六%、「なんともいえない」と回答を保留する者が約一割である。

表47　結婚の理由

合計	女のしあわせ	あたり前だから	みんながするから	精神的安定	経済的安定	社会的信用
882 100.0%	120 13.6%	39 4.4%	7 0.8%	487 55.2%	22 2.5%	14 1.6%

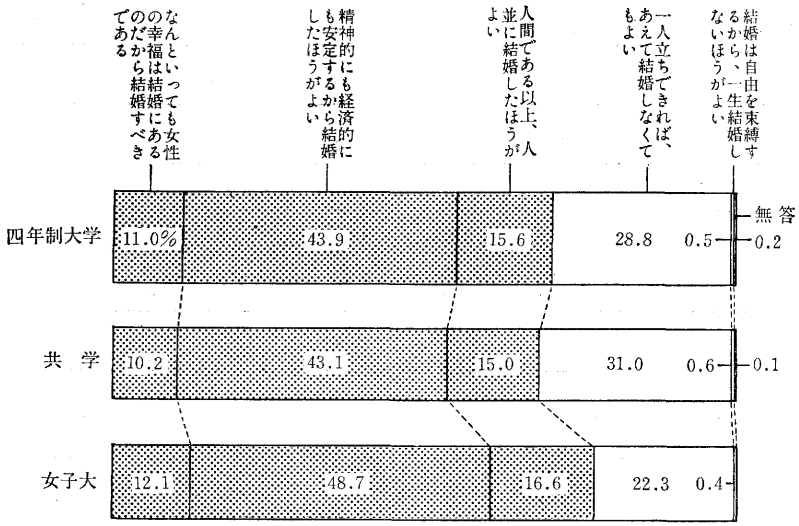
まわりがうるさい	子ども	セックス	なんとなく	その他	無答
11 1.2%	63 7.1%	1 0.1%	30 3.4%	69 7.8%	19 2.2%

結婚の意志のある者に結婚の年齢をたずねた結果では、「二六～二九歳」を挙げる者が最も多く五六・五%と過半数に達している。「二二～二五歳」を目やすとする者が二九・六%、現在はまだ「考えていない」者が八・四%あり、「三〇～三四歳」と晩婚型は一・六%にすぎない。

結婚の理由では、「精神的に安定するから」と精神面を挙げる者が五五・二%と最も多く、「経済的に安定するから」と経済的理由を挙げる者は二・五%のみである。結婚は「女のしあわせだから」と思っている者は一三・六%であり、「子どもがほしいから」と考えている者も七・一%と一割に満たない。「なんとなく」「まわりがうるさいから」といった消極的、受身的な理由から結婚を考える者も若干みられる（表47参照）。

リクルトリサーチが昭和五九年三月卒業予定の女子学生を対象に行った調査（「女子学生は何を考えているか」一九八四年）でも「精神的にも経済的にも安定するから結婚したほうがよい」と考える者が半数近く（四八・七%）を占めている。「女性の幸福は結婚にある」（一二・一%）、「人並みに結婚したほうがよい」（一六・六%）といった意見が三割近くある反面、「一人立ちできればあえて結婚しなくてもよい」と考える者も二割以上（二二・三%）みられる（本調査で、結婚の意志はないと答えた者、また回答を保留した者の中にも同様な考えを持つ者があると思われる）。女子大学と共学大学を比べると、「精神的・経済的安定」を挙げる者は女子大学に多く、「一人立ちできれば結婚しなくてもよい」と考える者は共学大学に多い（図12参照）。

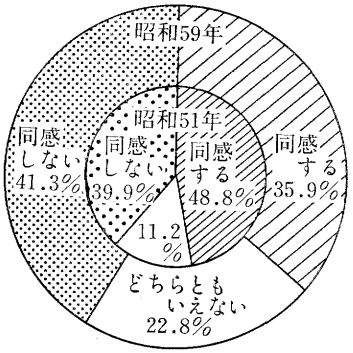
図12　結　婚　観



〔資料出所〕　リクルートリサーチ「女子学生は何を考えているか」1984年

図13　性別役割分業観

「男は仕事・女は家庭」という考え方について



〔資料出所〕　総理府「婦人に関する世論調査」（昭和51年，59年）
（対象　20歳以上の女子）

②　性別役割分業観

前述した職業観はまた性別役割分業観と密接にかかわっている。「男は外で働き女は家を守る」といった意見について賛否を問うた結果（この項目は一年生にも同様に回答を求めている）では四年、一年ともに「どちらともいえない」と答えている者が過半数を超えている。「賛成」の者が、四年一二・六%、一年では一六・三%あるが、「反対」の者が四年二三・七%、一年二六・八%といずれも

表48　性役割意識

学年	合計	賛成	反対	どちらともいえない	無答
4年	1,013 100.0%	128 12.6%	240 23.7%	634 62.6%	11 1.1%
1年	1,027 100.0%	167 16.3%	275 26.8%	584 56.9%	1 0.1%

表49　育児役割意識

学年	合計	男性もするべき	むしろするべき	むしろするべきでない	するべきでない	わからない	無答
4年	1,013 100.0%	351 34.6%	483 47.7%	113 11.2%	25 2.5%	29 2.9%	12 1.2%
1年	1,027 100.0%	347 33.8%	415 40.4%	165 16.1%	37 3.6%	54 5.3%	9 0.9%

表50　家事役割意識

学年	合計	男性もするべき	むしろするべき	むしろするべきでない	するべきでない	わからない	無答
4年	1,013 100.0%	267 26.4%	471 46.5%	188 18.6%	31 3.1%	45 4.4%	11 1.1%
1年	1,027 100.0%	214 20.8%	413 40.2%	275 26.8%	40 3.9%	80 7.8%	5 0.5%

賛成を上回っている（表48参照）。

前述の総理府の世論調査から一般的な傾向をみると、「男は仕事、女は家庭」という考え方について、「同感する」者が昭和五一年の調査では四八・八%と半数近くに達し、「同感しない」三九・九%を上回っていたが、五九年の調査では逆に「同感する」者が三五・九%と減少し、「同感しない」と答えている者が四一・三%と上回っている。「どちらともいえない」と答えている者が増加しており、このことは、従来の男は外、女は内といった社会通念がくずれつつあり、状況に合わせて柔軟に対応していく方向にあるとみられるが、「賛成」「反対」どちらともきめかね「同感する」「同感しない」といった気持ちのはざまで揺れ動いているとも言えるであろう。本調査においても同様の傾向が指摘できる。

では実際に、家事（掃除・洗濯・炊事）、育児（おむつの取りかえ・入浴の世話など）といった具体的な事柄ではどのように考えているのであろうか。家事より育児について「男性もするべきである」とする積極的論が四年（三

表51　職業継続意志と育児役割意識

	合計	男性もするべき	むしろするべき	むしろするべきでない	するべきでない	わからない	無答
合計	1013 100.0%	351 34.6%	483 47.7%	113 11.2%	25 2.5%	29 2.9%	12 1.2%
結婚するまで	116 11.5%	26 22.4%	47 40.5%	30 25.9%	9 7.8%	4 3.4%	— —
子ども	196 19.3%	47 24.0%	112 57.1%	25 12.8%	9 4.6%	3 1.5%	— —
継続	211 20.8%	95 45.0%	94 44.5%	15 7.1%	— —	5 2.4%	2 0.9%
中断	246 24.3%	93 37.8%	116 47.2%	26 10.6%	4 1.6%	7 2.8%	— —
もたない	4 0.4%	— —	3 75.0%	— —	— —	1 25.0%	— —
考えていない	193 19.1%	69 35.8%	97 50.3%	15 7.8%	3 1.6%	8 4.1%	1 0.5%
その他	33 3.3%	17 51.5%	14 42.4%	1 3.0%	— —	1 3.0%	— —
無答	14 1.4%	4 28.6%	— —	1 7.1%	— —	— —	9 64.3%

四・六%)、一年(三三・九%)ともに多く、「むしろするべきである」を加えると、四年生では八二・三%と八割を超え、一年でも七四・二%と七割以上を占めている。「するべきでない」とする者は四年二・五%、一年三・六%といずれもわずかである(表49参照)。

これに対して家事については、「男性もするべきである」と積極的に答えている者は四年二六・四%、一年二〇・八%であり、「むしろするべきである」を加えると四年生で約七割(七二・九%)、一年生で約六割(六一・〇%)を占めている。「するべきでない」と答えている者は三・一%(四年)三・九%(一年)のみであるが、「わからない」と答えている者が「育児」に比べて若干多くなっている(表50参照)。

さらに四年生では職業継続意志との関連をみているが、「育児」については「男性もするべきである」と答えている者は「継続型」が最も多く(四五・〇%)、次いで「中断型」(三七・八%)となっている。これに対して「結婚するまで」「子どもができるまで」と答えている

表52　職業継続意志と家事役割意識

	合　計	男性もするべき	むしろするべき	むしろするべきでない	するべきでない	わからない	無　答
合　計	1013 100.0%	267 26.4%	471 46.5%	188 18.6%	31 3.1%	45 4.4%	11 1.1%
結婚するまで	116 11.5%	8 6.9%	43 37.1%	40 34.5%	17 14.7%	8 6.9%	— —
子　ど　も	196 19.3%	26 13.3%	100 51.0%	56 28.6%	7 3.6%	7 3.6%	— —
継　続	211 20.8%	88 41.7%	95 45.0%	18 8.5%	2 0.9%	6 2.8%	2 0.9%
中　断	246 24.3%	64 26.0%	130 52.8%	40 16.3%	1 0.4%	11 4.5%	— —
もたない	4 0.4%	— —	2 50.0%	1 25.0%	— —	1 25.0%	— —
考えていない	193 19.1%	65 33.7%	86 44.6%	28 14.5%	2 1.0%	12 6.2%	— —
そ　の　他	33 3.3%	14 42.4%	13 39.4%	5 15.2%	1 3.0%	— —	— —
無　答	14 1.4%	2 14.3%	2 14.3%	— —	1 7.1%	— —	9 64.3%

表53　結婚希望年齢

	22～25歳	26～29歳	30～34歳	考えていない	無　答
合　計	259 29.6%	494 56.5%	16 1.8%	73 8.4%	32 3.7%
本学附属	97 36.2%	131 48.9%	10 3.7%	21 7.8%	9 3.4%
外　部	162 26.7%	363 59.9%	6 1.0%	52 8.6%	23 3.8%

短期就業型では「男性もするべきである」とする比率はいずれも二割程度であり、逆に「男性はするべきでない」と答えている者の割合が多くなっている（表51参照）。家事についても同様の傾向がみられる（表52参照）。以上のように、結婚、出産後も継続して職業を持ちたいと考えている者は家庭生活においても、家事・育児の面で夫の協力を期待する者が多いと言えよう。この期待は中断型の場合にもかなり高いとみられ、夫の家庭生活への協力の度合が、再就職の可能性

に関連してくると思われる。

なお附属校出身者では、大学からの入学者に比べて結婚希望年齢が低く（表53参照）、また家事・育児についても男性もするべきであると考えている者の比率が低くなっている。

まとめ

以上、日本女子大学学生の学生生活の状況及び卒業後の展望についてみてきた。ここで調査の趣旨に照らして本調査を通してみられた全般的な傾向と今後の課題を述べてまとめとする。

＜学生生活＞

日本女子大学を選んだ理由では、「専攻分野」「大学の特色・学風」「四年制大学」といった点が重視されている。また四年制大学入学理由では、「専門志向」（専門的知識・技術の修得）、「教養志向」（教養を高めるため）、「学歴・資格志向」が上位を占め、「大学生活を楽しむ」「友人を得たい」といった点は四・五位にとどまっている。さらに一年生では、四年生に比べて「職業志向」（将来の就職を考えて）が強くみられる。

これらの点に関しては、大学からの入学者と附属校出身者との差が大きく、大学からの入学者では「専門分野」「学歴・資格」「偏差値」「就職」といった点を挙げる者が多いのに対して、附属校出身者では「大学の特色・学風」を挙げる者が多く、これと並行して（多肢選択）当然のことながら「附属校にいたので」を挙げる者が九割を超えている。

学科や専攻を選ぶに際しては、自分の「性格・興味」から選択する者が最も多く「職業に役立たせる」「資格を取得したい」とする者を大きく上回っている。この傾向は特に附属校出身者に多い。

四年間の学生生活についての満足度は概して高く、「専門知識の習得」「資格取得」「授業」「学科目選択のガイダンス」「教養特別講義」「就職・進路指導」「教師とのふれあい」「友達づきあい」「社会に出ていく自信」等のすべての項目で満足している者が過半数を占めている。特に「友だちづきあい」「クラブサークル活動」の満足度がきわだって高く現代の学生生活の一端がうかがえる。また、「専門的知識の習得」「授業」「社会へ出ていく自信」といった点についても六～七割の者が満足している。

全般的に附属校出身者の満足度が高いが、特に「社会へ出ていく自信の獲得」について満足している者が多い。

これに対して不満に思ったり改善したいとする点では、「カリキュラム」や「学科目選択」についてが最も多く、学科目選択のガイダンスについての満足度も低い。既に見たように（「学生生活の満足度」参照）学科目選択が自分の希望通りになされた者では専門知識や授業についての満足度も高いが反面、カリキュラムや学科目選択に不満であった者は授業についての満足度も低く、どのような学科を履習することができたかがどれだけ充実した学生生活をおくれたかのメルクマールになっている。

カリキュラムや学科目選択に関しては、「時間割の都合でとりたい科目が履習できない」「教職課程の科目取得に規制され授業選択の幅がせばめられる」「一般教養課程の授業で抽選にもれ興味のない科目をとらざるを得なかった」「選択科目の開設が少ない」「フィールドワークの機会を増やしてほしい」「他学部・他学科の講義が受けられるようにしてほしい」といった意見や要望が出されている。

一年生では単位取得に関して、他大学との単位互換制度を望む者が多く、多様な学生のニーズにどのように対応していくか、カリキュラム、資格取得等の面で検討[1]が急がれる。また、高校までの学校生活と大学生活とでは学科目履習の仕方、学習方法等が異なり、「ギャップを埋めるのに苦労した」「うまく適応できず学習意欲を失った」と述べて

いる者もあり、学習相談、情報提供といった面でのガイダンスが望まれる。

学科や専攻を選択する際に、資格取得を挙げた者は一割にすぎないが、実際に資格を取得した者は六割（四年）を超え、在学中に資格を得たいと望む者も八割（一年）に達している。本学で取得できる資格は、幼・小・中・高教員、栄養士・管理栄養士、食品衛生管理者、食品衛生監視員、衣料管理士、社会福祉主事、児童福祉司、司書、学芸員、社会教育主事補等であるが、実際に取得した資格では教員免許が七割以上を占めている。

もちろん、資格取得がそのまま就業機会の保障につながるものではなく、児童・生徒数の減少に伴って教員採用の前途は厳しい。教育養成系大学では「将来構想委員会」を設置し、教員以外の教育者養成のための新しい課程（例えば国際教育、教育情報、社会教育、教育臨床等のコース）の検討をすすめているところもある。[2] 本学においてもこの面での対応が迫られることになろう。

クラブ・サークル活動は学内外ともに盛んであるが、学外活動の参加者が学内のそれを大きく上回っている点が目立っている。この傾向は四年生より一年生に、大学からの入学者より附属校出身者により顕著である。活動の種類では学内は「芸術・芸能関係」、学外では「体育・スポーツ関係」の参加者が多いが、特に学外でのスポーツ活動（主としてテニス）が盛んである。他方、大学以外の場での活動は概して低調であり参加率は低い。しかし学科によっては専攻領域との関連でボランティア活動等の社会活動に積極的に取り組んでいるところもあり、情報、機会、場の提供の仕方によって活動の場が広がる可能性も出てこよう。

＜卒業後の生活＞

卒業直後の進路では、家事・家業に従事する者、結婚する者はわずかであり、就職を希望する者が九割に達して

いる。しかし結婚・出産を契機に退職する「早期退職型」が約三割、育児期以後の再就職を希望する「中断・再就職型」が二〜三割を占め、「継続型」は二割程度にすぎない（一年生では継続型が約三割と増加する傾向にある）。就業理由では経済力をもつ、能力の発揮、専門をいかすといった点よりも社会的視野の拡大といった点にウエイトが置かれ社会性が重視されている。

職種では「事務職」についで、システムエンジニア、プログラマー、インテリア・コーディネーター等「専門・技術職」を希望する者が多く、「教育職」は一割程度にとどまっている。また職場選択の際には、企業の種類・特性・安定度といったことよりも、やりがい・興味・各自の適性・能力といった面が優先する傾向がみられる。

特に、学科を選択する際に職業志向（職業に役立つことを考えて選択）がはっきりしている者は、職業生活においてもずっと職業を継続したいとする者が多く、これらの「継続型」の者にあっては、就業理由では「専門や能力を生かすため」、職種では「専門・技術職」「教育職」を希望する者の割合が高い。また職場選択も「やりがい・興味」「適性・能力」といった点から選んでいる者が多くなっている。

一方、家庭生活に役立たせたいとする者は職業継続においても「短期就業型」をとる者が多く、この者たちの職業傾向は、就業理由では「社会的視野の拡大」、希望職種では「事務職」、職場選択理由では「企業の安定度・種類・特性」を挙げる者が多いといった構図がみられる。後者は附属校出身者においてより顕著である。「中断再就職型」は両者の中間に位置している。

家庭生活については、「男は外で働き、女は家を守る」といった考え方に反対する者が賛成者を上回り、性別役割分業観は薄れつつあるとみられるが「どちらともいえない」と答えている者が半数を超えている点が注目される。この傾向は本学だけではなく、共学大学を含めた女子大学学生においても同様にみられる。[3] どちらともいえない回答を

保留しているのは、「一概にはいえない」「時と場合によって流動的に考える」といった意志表示とも受けとれるが、また「自分の生き方がはっきりつかめていない」「環境次第で」といった受け身の姿勢の反映ともみられる。

しかし、「家事」「育児」については男性も協力すべきであると考えている者が七～八割に達し、家庭生活の具体的な場面では、男女の共同参加意識が定着してきているように思われる。特に、職業継続志向がはっきりしている者においては、夫の協力を期待する度合が高い。逆に、家庭志向の強い短期就業型の者では、男性はするべきでないと答えている者の割合が高く、家事・育児を女性の仕事として引き受けたいとする姿勢がうかがわれる。家庭志向は附属校出身者の方が強い。

一方、中断再就職型の者では継続型についで男性の家事・育児参加への期待が強く出されている。牧野暢男氏は、再就職型の者について女子大生の就業意識の分析を通して、「再就職型は継続型とは別個の職業経歴であると考えてよい。再就職型の職業経歴選好を規定するのは、『家庭役割優先』の家庭観、地位志向の低さ、強い社会的制約観等であり、夫や子どもの生活に抵触しない自己の職業生活設計といういわゆる自己規制は、『社会制約』を倍加し、さらに地位志向の低さはパート的、アルバイト的職業への就業を予想させる。就業動機を含めた状況いかんでは、再就職型は入退職の繰り返しという『不安定型』の職業経歴になる可能性も大きい」[4]と指摘している。

確かに女性の再就職の状況は氏の指摘する側面を含み、婦人問題ともなっているが、前述のように、中断型の者の中には働くのが当然と考えている者もおり、いまだに家庭責任が女性に大きくかかっている状況の中で、従来からの女性役割とのかっとうに悩みつつこのパターンを選択せざるを得なかった者もあるとみられる。また子育てに積極的な意義を認めている者もあるであろう。

しかしいずれにしても、「再就職型の女性にとっては、確固とした家庭観・職業観さらには人生観をもつことがか

なり重要であろう。また、中断期間中の自己啓発、情報収集も必要であるが、社会的には再教育・再訓練の場をどのように保障していくかが考えられなければならない[5]」といった点が女子教育の課題であり、この点で女子大学の果たす役割も大きいといえよう。

短期就業型の者においても、同様の視点が問われねばならないと考える。

＜女子大学の意義＞

女子だけの大学なので入学したと答えている者では、「男性を意識したり、差別を受けることなく伸び伸びと学習できた」「男性の目を気にせず互いに飾らずに自分を出せた」「女性だけだったので自主性・主体性が養われた」「女性だけの方が能力を発揮しやすい」といったものから「高校まで共学だったので男女平等ということについては教えられたが〝女性〟という性を捨てていたように思う」「女性としての自分をしっかりみつめられた」「女性の問題、女性の生き方について考える機会を与えられた」「女性の視点・立場から取り組む（建築・経済・文学等）目をひらかれた」女性であることの認識に立って、ひとりの人間としての自覚をもって社会に役立ちたいという意識が芽生えた」「女性の社会的役割についての認識を新らたにした」といったものまで各自の受け止め方は多様であるが、単に、女だけの方が学びやすいといった消極的な姿勢よりも、女性であることを積極的にとらえて生きたいとする意欲がみられる。

また、「さまざまなタイプの同性の教師に出合えて刺戟を受け、女性としての生き方の励みとなり参考になった」「各界で活躍している同性の先輩に接する機会が多く、これからの人生を考える指針を得た」といった声も出されている。女子大学の意義を積極的に認めている者は附属校出身者に多い。

反面、河上婦志子氏が指摘するように「女子大学におけるリーダーシップは発揮の対象がもっぱら女性に限られており、男性に対する指導経験とはならない」「学生全体の経験の広がりという点からみて、異性と日常的接触や協働体験の欠如からくる女子大学の閉鎖性の方が問題が大きいといわざるをえない」[6]といった面も否定できない。

しかし、クラブ・サークル活動の状況にみられるように、いまや女子大学は閉そくされた場ではなく男性とともに行動する機会は大きく開かれている。今後単位の互換制度等が進められるならば、学術面での交流、協力といった面にも道が開かれよう。また女子大学で育てられたリーダーシップ、女性の視点、立場からのアプローチが男性を含めた集団において発揮される必要性はますます高まり、その機会も女性たちの努力によって増していくことが予想される。本書の巻頭の麻生誠氏の提言[7]のように、より豊かな人間文化を創造する期待が女性のリーダーシップにかけられており、これからの女子大学、女子教育研究のあり方にこめられていると言えよう。

四年生の調査の最後に、女子教育研究所への期待を述べてもらったが、「創立者の教育理念を生かした教育を広めてほしい」「日本女子大学創立の源といえる『女子教育』を常にリードしてこそ、この大学のアイデンティティが確立されると思う」「女子教育の歴史を忘れずに伝えてほしい」「女性が自らの興味に沿って実力を発揮できる社会を目指して研究をすすめてほしい」「社会的に男女平等意識が高まる教育を期待する」「男子と同等に働ける女性を育成する観点を打ち出してほしい」「出産後の女性の仕事についての実態を明らかにし、働く女性を援助してほしい」「学生・卒業生に厳しい姿勢で問題を提起し、女性の潜在する能力を引き出してほしい」「社会人になっても参加できるゼミのような学習の場をつくってほしい」「卒業生にとって生涯教育の場となることを期待する」といった声が出されている。

これらの希望は女子教育研究所への要望であると同時にまた日本女子大学への期待でもある。女子大学の意義は一

律に論じられるものではなく、そこに学び育った者たちが各自の存在をかけてどのような歩みをしてきたか、しようとしているかといった点にかかっているといっても過言ではないであろう。その意味で女子の高等教育は四年間の学生生活で完結するものでなく、生涯教育として展開する必要性、可能性を含んでおり、生涯教育機関としてどのような役割を果たすことができるかがいま、女子大学に問われていると思う。

〔注〕

(1) 辻功氏は「学校が『資格』制度で武装すればするほど、本来の学校の機能である教育機能から遠ざかることがないとはいえない。少なくとも、生涯教育の視点からみると、逆機能の懸念が強い。必要なことは、資格体系としての学校を全面的に否定することではなく、生涯教育の理念に立って、その体系の欠陥を修正し改善することである」と述べている。「資格体系としての学校」日本生涯教育学会編『生涯教育と学校教育』——日本生涯教育学会年報第三号　一九八二年

(2) 松本良夫「教員養成大学の苦悩」ＩＤＥ『現代の高等教育』№二七五——教員養成の転換期　一九八六年

(3) 野萩青少年財団プロジェクトチーム「現代女子学生の意識と行動調査」野萩青少年育成財団　一九八七年

(4) 牧野暢男・上野真理子「女子大生の就業意識の構造」大学論集第一六集（一九八六年）　広島大学大学教育センター

(5) 前掲書

(6) 河上婦志子「女子大学——存続の方向を探る——」、天野正子編著『女子高等教育の座標』垣内出版　一九八六年

(7) 麻生誠「女子の高等教育についての三つの提言」本書所収

なお、本調査は一番ヶ瀬康子教授（日本女子大学女子教育研究所主事）をはじめとする研究所スタッフによる研究組織で行ったものである。執筆に当たっては、一～三（河合慶子）、四（真橋美智子）、五・まとめ（山本和代）が分担した。自由記述の集計は近代女性文化史研究会（本学史学科卒業生）の労に負うところが多い。機械集計については日本女子大学計算研究所の助力を得たものであることを付記する。

大学生活に関する調査（4年）

日本女子大学女子教育研究所

<記入について>

- 資料は統計的に処理し、決して個人名を出すようなことはありません。
- 各事項について、該当するものやあなたの意見にできるだけ近いものの番号に○印をつけるか、（　　）の中に具体的に記入してください。
- 矢印→のある場合は、矢印に従って次の質問に進んでください。

この欄には記入しないでください。

▽　▽

1）A　学　部　　1. 家政学部　　2. 文学部

B　学科・専攻　　1. 児童学科　2. 食物学専攻　3. 管理栄養士専攻　4. 住居学科
5. 被服学科　6. 家政理学科一部・物理専攻
7. 家政理学科一部・数学専攻　8. 家政理学科一部・化学専攻
9. 家政理学科二部　10. 家政経済学科　11. 国文学科
12. 英文学科　13. 史学科　14. 社会福祉学科　15. 教育学科

C．出身校（種類、共学・別学のそれぞれについて各1つ）注　転校した人は、長くいた方の学校

学　校	種　　類	共学・別学	所　在　地
高等学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.検定　6.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	1.東京都　2.神奈川県　3.東京・神奈川以外の関東地方　4.北海道　5.東北　6.中部　7.近畿　8.中国　9.四国　10.九州　11.沖縄県　12国外
中学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	
小学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	

6

7　8　9

10

11

2）A　あなたが日本女子大学を選んだのはどんな理由からですか。（2つ）

1. 自分が専攻したい分野があるので　　2. 大学の特色・学風にひかれて
3. 四年制の大学に行きたかったから　　4. 大学院まであるから
5. 附属校にいたから　　6. 先輩・先生にすすめられて
7. 親・兄姉など近親者のすすめで　　8. 女子だけの大学だから
9. 将来の就職を考えて　　10. 学費のことを考えて
11. 地理的に通学に便利だから　　12. 自分の偏差値に合う学校だから
13. 受験雑誌や学校案内をみて　　14. その他（具体的に　　）

12　13

B　日本女子大学は第一志望でしたか。

1. はい　　2. いいえ

14

3）　あなたが現在の学科・専攻を選んだのはどんな理由からですか。（1つ）

1. 職業に役立たせたいから　　2. 自分の性格や興味にあっていたから
3. 指導を受けたい教授がいるから　　4. 取得したい資格がとれるから
5. 家庭生活に役立たせたいから　　6. 社会活動に役立たせたいから
7. その他（具体的に　　）

15

4）あなたは大学入試に際して「共通一次」を受けたことがありますか。

1. 受けたことがある　　2. 受けたことはない

5）あなたは本学在学中に何か資格・免許を取得しましたか。

（2（取得した）に○印をつけた方は、イ、ロ、ハ、のいずれかに○印をおつけください。）

1. 取得しなかった ──→ 7）へ進んでください。

2. 取得した（イ、学内のみ　ロ、学外のみ　ハ、両方で）

6）＜5）で2（取得した）に○印をつけた方に＞

どんな資格・免許ですか。

1. 学内の資格・免許（本学教育課程の中で取得できるもの）
   1. 教職（中高）　2. 教職（小）　3. 教職（幼）
   4. 司書教諭　5. 司書　6. 学芸員
   7. 管理栄養士　8. 栄養士　9. 衣料管理士
   10. 保母　11. 社会福祉主事　12. その他（　　）

2. 学外の資格・免許（具体的に　　）

（全員に）7）　四年間の学生生活も残り少なくなりましたが、あなたは現在下記の点（①～⑩）でどの程度満足していますか。それぞれについて、あてはまる数字に○印をおつけください。

	①専門的知識の習得	②資格の取得	③授業について	④学科目選択のガイダンス	⑤教養特別講義について	⑥就職・指導・進路についての	⑦先生とのふれあい	⑧友だちづきあい	⑨クラブ・サークル活動	⑩社会へ出ていく自信の獲得
1. 大いに満足	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2. やや満足	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3. やや不満	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4. 大いに不満	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

8）　あなたは大学ではサークル・クラブ活動に参加しましたか。

1. 参加した
   - 学内（サークル・クラブ数）
   - 学外（　　）

2. 参加しなかった ──→ 10）へ進んでください。

9）＜8）で1（参加した）に○印をつけた方に＞

A. どのような内容のサークル・クラブ活動ですか。主な学内のサークル・クラブ活動に◎、主な学外のサークル活動に△をそれぞれ一つずつおつけください。

1. 文学・歴史・哲学・宗教関係　　2. 社会・福祉・教育関係
3. 自然科学関係　　4. 芸術・芸能関係
5. 体育・スポーツ関係　　6. その他（具体的に　　）

B. 参加の理由はどんなことですか。（2つ）

1. 友人がほしいから　　2. 自分の希望する進路に直結すると思うので
3. 大学内に自分の場がほしいから　　4. 楽しみのため
5. 趣味と一致するから　　6. 競技へ参加するため
7. 社会問題に関心があるため　　8. 自分の特技・技術を向上させるため
9. 知識・教養を身につけたいから　　10. 身体を鍛えるため
11. 団体生活に魅力を感じて　　12. 自己の成長のため
13. 学生生活を豊かにするため　　14. 授業では得られないものを補うため
15. サークル・クラブ・部の雰囲気がよかったから
16. その他（具体的に　　）

16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 ◎ 40 △ 41 42 43

【全員に】10)　あなたは大学以外の場で何かの活動に参加していますか。　44

1.　参加している（主なものについて、その種類・内容を具体的にお書きください。）　45

2.　参加していない

11)　あなたが日本女子大学で学んで、特によかった点、不満に思った点、改善したらよいと思われる点について お書きください。

よかった点（　　）　46 47

不満な点（　　）　48 49

改善したい点（　　）　50

12)　あなたは卒業後にどのような学習の機会があったらよいと思いますか。あなたが生涯教育機関として本学に期待することがありましたら、お書きください。

（　　）　51 52

13)　あなたは本学卒業後にどのような進路をとりたいと思いますか。　53

1.就　職　　2.大学院へ進学

3.　2（大学院進学）以外での学習の継続　　4.家業・家事など

5.結　婚　　6.その他（具体的に　　）

14)　<13)で1（就職）に○印をつけた方に>

A．あなたが職業を持ちたいと思うのはどんな理由からですか。（2つ）　54 55

1.　専門をいかしたい　　2.　自分の能力をいかすため

3.　経済力をもちたいから　　4.　社会的視野を開げたい

5.　家庭にいるだけではつまらない　　6.　将来の生活設計に備えて

7.　働くのが当然だから　　8.　その他（具体的に　　）

B，あなたは職場を選択する場合、どのようなことを重視したいと思いましたか。（2つ）　56 57

1.　企業の安定度　　2.　企業の種類や特性　　3.　企業に対する社会的評価

4.　社会への貢献度　　5.　自分の適性や能力がいかせる　　6.　自分にとってのやりがいや興味

7.　給料が高い　　8.　男女同一賃金　　9.　男女同一待遇・同一研修

10.　育児休暇がある　　11.　休日が多く残業が少ない　　12.　通勤に便利

13.　その他（具体的に　　）

C．現在、あなたの就職は内定していますか。　58

1.　はい　　2.　いいえ

D．内定している方はその職種を、内定していない人は希望する職種を中学校教員、プログラマー、一般事務などのように具体的にお書きください。　59

（　　）

(全員に)15) あなたは職業継続についてどう考えていますか。

1. 結婚するまでもつ　　2. 子どもができるまでもつ
3. 子どもができてもずっともち続ける　　60
4. 子どもができたらやめ、大きくなったら再びもつ
5. もたない　　6. まだ考えていない
7. その他（具体的に　　）

16) 男女の性役割分業について現在いろいろ論議されておりますが、あなたはどう考えていますか。
（1つだけ）

	男性もするべきだ	どちらかと言えばするべきだ	どちらかと言えばするべきでない	男性はするべきでない	わからない	
A 家事（掃除、洗濯、炊事）						61
B 育児（おむつの取りかえ 入浴の世話など）						62

C 「男は外で働き、女は家を守る」という考え方について　　63

1. 賛成　　2. 反対　　3. どちらともいえない

17) 結婚について、あなたはどう考えていますか。

A. あなたは結婚しようと思いますか。

1. はい
2. いいえ　　3. なんともいえない　　4. 既に結婚している　　64

→ 18)へ進んでください

B. <Aで1.（はい）に○印をつけた方に>
それはどんな理由からですか。あなたの気持に近いものを選んでください。（1つ）

1. 女のしあわせだから　　2. あたり前だから　　3. みんながするから　　65
4. 精神的に安定するから　　5. 経済的に安定するから　　6. 社会的信用がえられるから
7. 結婚しないとまわりがうるさいから　　8. 子どもがほしいから　　9. セックスのため
10. なんとなく　　11. その他（具体的に　　）

C. <Aで1（はい）に○印をつけた方に>
あなたはいくつぐらいまでに結婚したいと思いますか。　　66

1. 22歳から25歳ぐらいまで　　2. 26歳から29歳ぐらいまで
3. 30歳から34歳ぐらいまで　　4. 35歳すぎてから
5. 特に考えていない

（全員に）18）あなたが定期的に読んでいる新聞や雑誌についてお書きください。

A．新聞について（2つ以内）

1. 朝日新聞　2. 毎日新聞　3. 読売新聞
4. 日本経済新聞　5. その他の日刊新聞　6. 政党新聞
7. 宗教新聞　8. スポーツ新聞　9. 大学新聞（学生新聞含）
10. その他（具体的に　　）
11. 新聞は読まない

67 68

B．雑誌について（3冊以内）

＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿

69 70 71

19）本在学中に最も感銘を受けた本について、その書名および著者名をお書きください。（1冊）

書　名＿＿＿＿＿＿＿＿　著者名＿＿＿＿＿＿＿＿

72

20）A．あなたは成瀬記念館の展示（ビデオを含む）を参観したことがありますか。

1. はい　2. いいえ

73

B．女子教育研究所が成瀬記念館内にあることをご存知でしたか。

1. はい　2. いいえ

C．女子教育研究所に何か期待することがあったらお書きください。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

大学生活に関する調査（1年）

日本女子大学女子教育研究所

<記入について>

○資料は統計的に処理し、決して個人名を出すようなことはありません。

○各事項について、該当するものやあなたの意見にできるだけ近いものの番号に○印をつけるか、（＿＿）の中に具体的に記入してください。

○矢印 → のある場合は、矢印に従って次の質問に進んでください。

この欄には記入しないでください。

◇　◇

1) A 学部　1. 家政学部　2. 文学部

B 学科　1. 児童学科　2. 食物学科　3. 住居学科　4. 被服学科　5. 家政理学科一部・物理専攻　6. 家政理学科一部・数学専攻　7. 家政理学科一部・化学専攻　8. 家政理学科二部　9. 家政経済学科　10. 国文学科　11. 英文学科　12. 史学科　13. 社会福祉学科　14. 教育学科

C 出身校（種類、共学・別学のそれぞれについて各1つ）注、転校した人は、長くいた方の学校

学校	種類	共学・別学	所在地
高等学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.検定　6.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	1東京都　2神奈川県　3東京・神奈川以外の関東地方　4北海道　5東北地方　6中部地方　7近畿地方　9四国　10九州　11沖縄県　12国外
中学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	
小学校	1.日本女子大学附属　2.他の私立　3.公立　4.国立　5.国外	1.女子校　2.共学校　3.一部男女共学の形態をとる学校	

D 高等学校卒業の時期

1. 昭和60年3月　2. 昭和59年3月　3. 昭和58年3月　4. その他　昭和（　　）年（　　）月

2) あなたが4年制大学に入学しようと思ったのはどんな理由からですか。（2つ）

1. 専門的知識や技術を修得したいから
2. 教養を高めたいから
3. 大学卒業の学歴、資格（教員、司書、栄養士等）を得たいから
4. 大学入学は当然と思ったから
5. 就職したくなかったから
6. まわりが行くから
7. 親や先生、先輩、友人等にすすめられたから
8. 大学生活を楽しみたいから
9. よい友人を得たいから
10. 自由な時間を持ちたいから
11. ただ何となく
12. その他（具体的に　　）

3) あなたが女子の大学を選んだのはどんな理由からですか。

(　　)　71 72 73

4)A　あなたが日本女子大学を選んだのはどんな理由からですか。（3つ以内）

1. 自分の専攻分野の教授陣がよいので
2. 大学の特色・学風にひかれて
3. 四年制の大学に行きたかったから
4. 大学院まであるから
5. 附属校にいたから
6. 建学の精神にひかれて
7. 先輩・先生にすすめられて
8. 親・兄姉など近親者のすすめで
9. 友人がいくから
10. 将来の就職を考えて
11. 学費のことを考えて
12. 地理的に通学に便利だから
13. 自分の偏差値に合う学校だから
14. 受験雑誌や学校案内をみて
15. その他（具体的に　　）

23 24 25

B　日本女子大学は第一志望でしたか。

1. はい　　2. いいえ

26

5) あなたが現在の学科・専攻を選んだのはどんな理由からですか。（2つ）

1. 将来の職業に役立たせたいから
2. 自分の性格や興味にあっていたから
3. 指導を受けたい教授がいたから
4. 有名な教授がいたから
5. まわりがすすめるから
6. その専門課程を勉強したいから
7. 家庭生活に役立たせたいから
8. 社会に役立つことをしたいから
9. 結婚の条件を整えたいから
10. その他（具体的に　　）

27 28

6) 高校卒業後の進路決定（大学や専攻の決定）で、あなたが最も重視したのはどんなことですか。（1つ）

1. 模擬試験の結果（偏差値）
2. 高校時代の成績
3. 高校時代の得意科目
4. よい先生との出会い
5. 家族のすすめ（父、母、兄、姉、祖父母）
6. 先輩の意見
7. 高校の進路指導の先生の意見
8. 先生（小、中、高）のすすめ
9. 自分の意見
10. その他（具体的に　　）

29

7) A　あなたは大学入試に際して「共通一次」を受けましたか。

1. 今年度受けた
2. 今年度受けなかったが前に受けたことがある
3. 受けたことがない

30

B　私立大学も「共通一次」に参加した方がよいという意見が臨時教育審議会で出ていますが、それについてあなたはどう考えますか。

1. 国公立大学と同じように私立大学にもあった方がよい
2. 私立大学には現状どおり、なくてよい
3. 国公立、私立を問わず、「共通一次」はない方がよい
4. その他（具体的に　　）

31

8) あなたが日本女子大学に期待することは、どんなことですか。

(　　)　74 75 76

9) 本学に入学し、二ヶ月が過ぎましたが、時間割や単位取得などについてあなたはどのように感じていますか。

1. 大いに満足　2. やや満足　3. やや不満　4. 大いに不満　32

→11) へ進んでください

→10) へ進んでください

10) 不満の理由はどんなことですか。（2つ以内）

1. 必修が多すぎる
2. 自分の希望する受講科目がない
3. 時間割の都合で受けたい科目が受けられない
4. 時間割の都合で受けたい先生の授業を受けられない
5. 単位取得についてのガイダンスが足りない
6. その他（具体的に　　）

33　34

11) あなたは単位の取得に関して他大学との単位互換制度があったら利用したいと思いますか。

1. 利用したい　2. 利用したいと思わない　3. 特に考えていない　35

12) 本学在学中に、資格・免許の取得を考えていますか。

1. 考えている　2. 考えていない　3. わからない　36

→14) へ進んでください

13) A　どんな資格・免許ですか

1. 学内の資格・免許（本学教育課程の中で取得できるもの）＿＿＿　＿＿＿　＿＿＿　37 38 39

2. 学外の資格・免許　40 41 42

B　どのようにして取得したいと思いますか。それぞれについて当てはまる番号に○印をつけてください。

1. 専門学校・各種学校に通う	1. 専門学校・各種学校	1. 専門学校・各種学校
2. 通信講座（社会教育）を受講	2. 通信講座	2. 通信講座
3. 各種の講座（カルチャーセンターなど）を受講	3. 各種の講座（カルチャーセンターなど）	3. 各種の講座（カルチャーセンターなど）
4. 独学	4. 独学	4. 独学
5. その他	5. その他	5. その他

43 44 45

14) へ進んでください

↓ 12) から

14) A　あなたは、高校の三年間に部・クラブ活動に参加しましたか。

1. 参加していたが途中でやめた　　2. 途中から参加した
3. 一時中断した時期があった　　4. 1年からずっと参加した
5. 全く参加しなかった

46 □

B　部・クラブ活動に通常何時間位費しましたか。（高校二年の時の、一週間平均の時間でお答えください。）

1. 2時間未満　　2. 2時間以上4時間未満　　3. 4時間以上6時間未満
4. 6時間以上8時間未満　　5. 8時間以上10時間未満　　6. 10時間以上
7. その他（具体的に　　）

47 □

15) あなたは大学ではサークル・クラブ・部活動に参加していますか。

1. 学内のサークルに参加している。　サークル／クラブ／部 ＿＿＿＿ 名 ＿＿＿＿

2. 他大学のサークルに参加している。　サークル／クラブ／部 ＿＿＿＿ 名 ＿＿＿＿

3. いずれにも参加していない。

48 □　49 50 □□　51 52 □□　53 54 □□

16) 参加の理由はどんなことですか。（2つ）

1. 友人がほしいから　　2. 自分の希望する進路に直結すると思うので
3. 大学内に自分の場がほしいから　　4. 楽しみのため
5. 趣味と一致するから　　6. 競技へ参加するため
7. 社会問題に関心があるため　　8. 自分の特技・技術を向上させるため
9. 知識・教養を身につけたいから　　10. 身体を鍛えるため
11. 団体生活に魅力を感じて　　12. 自己の成長のため
13. 学生生活を豊かにするため　　14. 授業では得られないものを補うため
15. サークル・クラブ・部の雰囲気がよかったから
16. その他（具体的に　　）

55 56 □□

17) A　あなたは、上記の大学以外の場でグループ・サークルに参加していますか。

1. 参加している。

（主なものについて活動の種類を具体的にお書きください。　　）

57 58 □□

2. 参加していない。

B　それはいつ頃からですか。

1. 小学校時代から　　2. 中学校時代から
3. 高等学校時代から　　4. 大学にはいってから

59 □

18) 大学生活の中で、現在あなたが特に困ったり、悩んだりしていることがあったら書いてください。

（　　）

77 78 79 □□□

19) あなたは、卒業直後にどのような進路をとりたいと思いますか。

1. 就　職　　2. 大学院へ進学
3. 結　婚　　4. まだ考えていない
5. その他（具体的に　　）

60 □

20) あなたは職業をもつことについてどう考えていますか。

1. 結婚するまでもつ　　2. 子どもができるまでもつ
3. 子どもができてもずっともち続ける
4. 子どもができたらやめ、大きくなったら再びもつ
5. もたない　　6. まだ考えていない
7. その他（具体的に　　）

61 □

21) 男女の性役割分業について現在いろいろ論議されておりますが、あなたはどう考えていますか。
（1つだけ）

	男性もするべきだ	どちらかと言えばするべきだ	どちらかと言えばするべきでない	男性はするべきでない	わからない
A 家　事（掃除、洗濯、炊事）					
B 育　児（おむつの取りかえ 入浴の世話など）					

A 家事　62 □

B 育児　63 □

C 「男は外で働き、女は家を守る」という考え方について

1. 賛　成　　2. 反　対　　3. どちらともいえない

64 □

22) A 定期的に読む雑誌（3冊）

＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿

65 □ 66 □ 67 □

B 感銘を受けた書物（3冊）

＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿　＿＿＿＿＿＿

68 □ 69 □ 70 □

ご協力ありがとうございました。

女子の高等教育　　女子教育研究双書⑧

昭和62年6月25日初版発行　　定価3,800円（送料300円）

編　者　　日本女子大学女子教育研究所

発行所　株式会社　ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座7の4の12
営業所　東京都新宿区西五軒町52
郵便番号（162）
電　話　(03) 268—2141(代)
振替口座　東京4—10,000番

検　印
省　略

印刷　行政学会印刷所(S)　　製本　大口製本印刷(株)

＊乱丁，落丁本はおとりかえいたします。

ISBN 4—324—00500—1
(5102158—00—000)